



FUJIKO

鳳の眼
未の章

・前置き、登場人物

・前置き

舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、今までの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

名は`警備部暗躍係、別名は秘密警察。公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいたることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

エージェントの一人、リカは女性だけで構成された大手劇団に所属していた。彼女が秘密警察の一員であることを知る者は限られていた。彼女は死と隣り合わせの日々を送り、葛藤しつつ、あらゆる危機や難事件に立ち向かうという使命を与えられたのであった。

・主な登場人物

リカ

本作の主人公、大手歌劇団の人気スターを務める一方、秘密警察の一員という裏の顔がある。恵まれた体格、類まれな美しさで多くのファンを湧かせてきた彼女であったが、歌劇団創立百周年記念の年に退団発表することを決意する。

ツバキ

歌劇団の劇団員の一人。新人時代からスターになる素質があり、裏社会でも名をあげて実力を兼ね揃えていた。しかし、ある任務で敵の罠にはまり、相棒であるリカを救って自分の身を犠牲にした。おさげ髪と左目下の黒子が特徴。

ノリコ

歌劇団の劇団員の一人で、リカの新人時代にトップスターとして君臨していた。ダンスが得意で、独特な表現力で舞台を引き立てる実力者。裏社会では単独で行動して、犯罪組織を壊滅しており、威嚇で相手の動きを封じる能力があると噂されている。

ハナ

リカの同期でダンスを得意とする劇団員で、一期先輩のツバキを慕っている。秘密警察に属していないが、その存在を知っている。

安藤ユウ

警視庁の若手捜査員の一人で、元々、捜査一課の刑事であったが、自分の意志で秘密警察に異動することとなった。ノリコと組んで難事件を担当しているが、後にリカとパートナーを組むこととなる。

水口茉緒

リカの幼馴染み。高校卒業後、親が経営している旅館`美楽荘、で仲居として働いている。

水口沙耶

茉緒の母親で、`美楽荘、の女将。一見、優しい女性に見えるが、気が強く、自分にも厳しい性格である。特に娘の茉緒には二代目の女将を継いでもらうため、厳しく教育している。

水口雅春

茉緒の父親で`美楽荘、の主人。彼は脱サラして旅館経営を始めた。当初、赤字続きであったが、家族の協力で繁盛していった。突如、リゾート地開発計画の案が持ち上がり、彼は反対運動活動に参加している。

中山祥子

`美楽荘、の仲居の一人。清楚で真面目な女性であるが、彼女はある闇を抱えていた。

西野伶亜

茉緒の姪っ子。小学三年生で学校が夏休みで、`美楽荘、に遊びにやって来た。リカと初めて会い、今回、彼女は身の毛もよだつ体験をすることとなる。

古谷孝三

リカと同じ日に`美楽荘、に宿泊しに来たが、その日、近くの裏山で遺体となって発見された。死亡した彼は、恐ろしい秘密を隠していた。

平松昭

高級タワーマンションのオーナー。普段は気さくな好青年であるが、裏の顔を持ち、ある事件の捜査対象となる。

墮天使の鎮魂歌

ある平穏な夜、リカは、稽古場フロアのエレベーターホールで自主稽古を行っていた。

彼女は納得いくまで、長い時間をかけて稽古をしていた。普段、エレベーターホールはひんやりと冷たい空間であるが、リカの発する熱気で、著しく温度に変化が起こった。床はリカの大量の汗が垂れていき、水浸しになるほどであった。

「...ふう、ちょっと休憩するか...」

リカはひとまず休憩し、水浸しになった床をきれいに拭き取ってから腰を下ろした。このエレベーターホールはリカのお気に入りの稽古場で、新人時代から利用しているわけだが、それには理由があった。

しかし、それは、彼女の口から語られることはなかった。じっとエレベーターホールにいると、リカはあることを思い出す、それは、今から十年程前の出来事であった...

東京 都内某所

二月中旬の寒い夜、ある高層ビルに二つの影が忍び寄っていた。影の正体は、公安部の密偵の女性であり、一人は若手時代のリカであった。

当時のリカは、裏稼業である密偵活動を始めたばかりであった。表の舞台の仕事、裏稼業は共に未熟な面がまだ目立っていた。先輩や関係者たちからは、「まだ粗削りな部分があるが、素質はある」と評価を得ている。

ビジュアル面では、肌が白く、容姿が美しく、身長は一七三センチメートルと日本女性としては長身な方で、プロのモデルのような体型である。好きな色は紫で服装の色も紫色が多い。異常なほど大食いであり、アルコールはワインなどを好む。よく眠り、性格は口数が少ない方で、仕事以外ではマイペースな一面を見せる。

趣味はスポーツ観戦、ゴルフ等、愛車はアルファロメオ。この時から射撃能力が優れており、あらゆる銃器、火器に精通している。

もう一人の名はツバキ。リカより一年先輩で頭が切れ、本業である舞台女優の仕事では、若手ホープとして注目されている。裏稼業では新人ながら数々の難事件を解決している実力者である。外見は、少年のような容姿で性格は優しく、ムードメーカー、後輩の面倒をよく見たりと世話焼き。

ツバキは、自分の過去のことを一切話そうとしない。驚異的な身体能力を持っているが、体の線が細いため体に負担がかかってしまうという弱点がある。よって長時間の戦闘、隠密活動は不可能とされていたが、後に公安部が開発した薬物で活動できるようになった。趣味は旅行、チェス等。

任務で使用する武器は小太刀や隠し武器など。武術は、剣道、空手、柔道と日本武術を得意とする。

二人が侵入した高層ビルには追っている犯罪組織（組織の名は不明）の幹部が潜伏していた。

世界中のあらゆる情報を盗み、国家の機能を停止させようとする犯罪組織が現れ、日本も標的となっていた。

難易度はさほど高くないため、新人のリカたちに任されて、組織を追うこととなったが、捜査協力者に内通者がいることが発覚した。手がかりを掴むためにその内通者を尋問しようとするが、その人物は、口を割らず自ら命を絶った。よって、捜査が難航しそうになったが、組織の関係者が東京に潜伏しているという情報が入り、捜査を続けていくと、死んだ内通者と情報交換していた人物を発見した。リカたちは、その人物を慎重に尾行し、幹部がいる場所を突き止めたのであった。

リカとツバキは苦労を重ね、敵陣に踏み込もうとしていた。

潜入したビル内は、不気味なほど静かで、とりあえず、リカたちはエレベーターに乗り込み、幹部がいると思われる、最上フロアへと向かおうとした。標的がいるフロアに着いた瞬間、リカたちは武器を構え、気を集中させながら通路を通った。

そして、ツバキは標的がいると思われる部屋の扉を蹴破り、リカと共に室内に突入したが、そこには誰もいなかった。二人は不審に思った。

「静かすぎる、どういうこと？」

「おかしいな、場所はここのはず…」

標的を見失ったりリカたちは不安げな表情を浮かべた。

「あらら、はめられちゃったかな…？」

ツバキが嫌な予感を察知して悟った。

「グゴォ！」

「！」

その時、突如、部屋に巨大モニターが現れて電源が入った。そこには一人の男が映っていた。

「ようこそ、よく来たね、歓迎するよ、間抜けなスパイたち…！」

映像に映っている人物こそ、二人が追っている犯罪組織の幹部の一人であった。顔は、暗闇の

ため見えなかった。

「歓迎するにとしては寂しい部屋だわ、やっぱり私たちが誘い込むための罠だったようね...？」

ツバキは、鋭い視線で幹部の男に話しかけた。

「そういうことだ、ここで君らお得意のどんぱちをすることは勝手だが、失った部下はすぐに補充できないでね、だからすぐ帰らしたよ...」

犯罪組織の幹部は、リカたちの行動を全て見抜いているようであった。

「...へえ、部下には優しいんだ、それでこれから私たちがどうする気？」

ツバキは、落ち着いた表情で彼に質問した。

「このビルと運命を共にしてもらおうか？」

「ピッ...」

すると、犯罪組織の幹部は何かのスイッチを押し、その直後、モニターの映像が切り替わった。画面にはタイマーのカウントが表示された。

「ビルの何処かに、このビルを吹き飛ばすほどの威力がある高性能爆弾が仕掛けてある、もうここは必要ないんでね...ちょうど邪魔なものがいっぺんに処分できるいい機会だ...！」

犯罪組織の幹部は、余裕の笑みを浮かべ、リカとツバキは、すぐに助かる手段を考えた。

「...と言いたいが、助かるかもしれない方法が一つだけある...！」

「！」

リカとツバキは、犯罪組織の幹部の意外な発言に驚いている様子であった。

「いいかい？よく聞くんた、ここを脱出するには非常用エレベーターを使うしかない、ただ、そのエレベーターは細工してあってね、乗れるのは六十キロ以下の重さの物だけで、重さが認証されれば、正常に作動する仕掛けだ...一度一階まで下りればもう使えなくなる、これで一人は助かるということになるわけだ、ご理解頂けたかな？じっくり相談するといい、見たところ二人とも同じくらいの体型のようだが...どうだい、僕は優しいだろ？.....」

「...そうね、そんな優しいあなたの顔が拝めなくて残念だわ...」

ツバキは、犯罪組織の幹部を睨み付けながら言葉を返した。

「...やれやれ、君らのような連中が現れてから動きにくくなったよ、そのうち君たちの組織と対峙する時がくるだろうけど.....生きていればいいね...幸運を祈るよ...」

犯罪組織の幹部は機嫌よく喋り続け、そのまま映像と音声途絶えた。タイムリミットは容赦なく迫っており、冷静に考える時間はないのに等しかった。

「どうする？」

リカはツバキの指示を待った。

「...ここは高層ビル四十九階の密室、脱出ルートはエレベーター一基、脱出に使えるような道具もない...爆弾を探す時間もない、色んな任務を乗り越えてきたけど、これは最悪なケースね、ちなみに訊くけど、あんた体重は六十キロ以下よね？」

「ええ、そうだけど...」

「私ももちろん六十キロ以下だけど...ブツブツ...」

ツバキは、作動するエレベーターの前に立ち、何やら呟いていた。リカの方は、冷静に物事を考える余裕がなく、冷や汗が止まらなかった。そんな時...

「...！」

ツバキは何か閃いたのか、ある決断をして、問題のエレベーターのボタンを押した。

「さあ、早くエレベーターに乗って...！」

「え？」

その時、リカは自分の耳を疑った。

「な...何言ってん...」

「ドッ！」

すると、ツバキは、素早くリカの腹部に一撃を与えて気絶させた。

「あなたはまだ死んではいけないわ、この仕事はね、何かを犠牲にしないと成り立たないの、組織のルールの一つ...あなたに未来を託すわ、だから生きて...」

ツバキは、覚悟を決めて気絶したリカをエレベーターの中へと移した。エレベーターは正常に作動して、そのまま一階に下りて行った。

「さようなら...」

ツバキは、リカに別れの挨拶を言って、静かに爆破時刻を待った。

そして、時間が流れ、悪夢のような夜が過ぎていき、朝日が昇り始めた。リカとツバキが閉じ込められた高層ビルは、瓦礫の山と化していた。

早朝、警察が爆発現場に駆けつけ、現場検証と被害者の捜索が始まり、リカの方は奇跡的に発見され、重傷ではあるが生き延びていた。一方、ツバキの方は発見されず、死亡したとされた。

報道番組ではリカたちのことや犯罪組織についてのことは伏せられ、謎のビル爆破事件と報道された。

爆破事件から数日後、ツバキの葬儀が関係者だけでしめやかに行われた。遺体はないため、棺の中には彼女の遺品だけが入れられた。親族や関係者は、棺の前で手を合わせて悲しさをあらわにした。

リカは入院中のため、参列出来ずにいた。

公安部は、ツバキを殺した組織を全力で捜索したが、有力な手掛かりはなかった。それから一切、謎の犯罪組織と接触することはなく、警察組織ならび、世界各国の秘密情報機関は、謎の組織の捜索から手を引いた。

「目を閉じれば、あの時の惨劇が甦る...大事な人が消えて気味の悪い爆音と暗闇に包まれる、あの時の...」

静かな病室のベッドには、包帯でぐるぐる巻きにされた一人の女性が、体を丸めて寝そべっていた。その患者女性は、起きているが精気がなく、植物人間に近かった。

「グオー...」

その時、彼女の病室に、一人の医者とダークスーツを着た男性が入室してきた。

「.....今の彼女の容体は？」

「昨夜に意識を取り戻し...怪我は酷いものでしたが、順調に回復しています...脈も正常値...ただ...」

「...ただ？」

医者は表情を曇らせ、患者の女性の容体をスーツ姿の謎の男に告げようとした。

「...体力は回復していますが、精神面に問題が.....よほど怖い体験をしたのか、何かに怯えているようです...確かに、あんな事故に巻き込まれたらどうにかなるのは当然かと思いますが...睡眠はあまりとらず、ほとんどこうやって体を小さくしたままです...部屋の灯りを消せば、異常なほど騒ぐことがあります...」

「...これではまだ使い物にならん...もう少し様子を見るか...」

「...はい、また何か変化があればご報告します...」

二人は、しばらく横たわっている患者女性のことについて話して、病室から去って行った。

横たわっている患者女性は、まだちゃんと口が利けない状態ではあるが、耳は聴こえており、医者たちが話していたことを理解していた。

「...お腹減ったな～」

患者女性は、心の中でそう呟いた。この女性の正体は、リカであった。

リカは、追っていた犯罪組織の罠にはまって瀕死の重傷を負ったが、奇跡的に助かった。それでも彼女が失ったものは大きく、悔やんでも悔やみきれなかった。それは、パートナーのことである。目を閉じれば、フラッシュバックでツバキと別れた時の記憶が甦るので、リカは、ずっと目を開けた状態でいた。

意識を取り戻してからかなりの時間が経っていて空腹状態であるが、体が思うように動かず、食事を受け付けることが出来なかった。

しかし、その状態はずっと続くことはなく、数時間経って、リカに異変が起こった。

「♪！」

「.....先生！例の患者さんが居る病室のナースコールが！！」

「.....何だと！？」

担当医と医療スタッフは、急いでリカがいる病室へと駆けこんだ。すると、彼らの目の前には生き生きとしたリカの姿があった。

「...そんな団体で来ないでよ、びっくりするじゃない...！」

「.....ようやく正常な状態に戻ったようだね...よかった...心配したぞ...！」

担当医は、リカの姿を見てほっとした様子であった。

「私はどれくらいここに...？」

「そうだな...今日で一ヶ月になる...」

「そう...この体...酷い有り様ね...」

「...これでもまだましな方だ...酷い怪我だったが...驚異的な回復力だ、順調に回復していつている...！」

「...体は丈夫な方なんでね.....」

「だからといって、まだ安心は出来ない...元の状態に戻すには、かなり時間が掛かる...」

「...そのようね.....一つ頼みたいことがあるんだけど...」

「何だね？」

「お腹減った...何か食べさせて...！」

リカは、無邪気な表情で担当医たちに空腹を訴えた。

「...よし、君のことだ、病院食では不満だろうと思うから、ちゃんとした料理をご馳走しよう〜」

担当医の許可が出て、リカがいる病室にぞくぞくと料理が運ばれていった。リカは、それをあつという間にたいらげ空になった皿が積まれていった。周りの医療スタッフは驚愕のあまり口が開いたままであった。

そこに一人来訪者が向かっていた。

「随分と賑やかじゃないか...」

「！！！」

リカは突然の来訪者に驚き、食べていた物が喉に詰まりそうになった。彼女は慌てて水を含み、食べ物を飲み込んだ。

「病み上がりで一気に食べるのは体に毒だぞ...」

「.....課長！」

その来訪者は、公安部の課長であった。つまり、裏稼業のリカの上司である。

「...元気になったじゃないか、お祝いの花を持ってきたが、お前の場合、花より団子だったかな...？」

「いえいえ、ありがたく頂きます！！」

リカは、赤面しながら食事を止めた。課長は、リカと二人で話がしたいようなので、医療スタッフは静かに席を外した。

「予想より回復が早かったのでびっくりしたよ、さすがだな...」

「ご心配をおかけしました...出来るだけ早く仕事復帰しますので...」

「...そう焦ることはない、物事には順序がある...今のお前では普通の生活も困難だろう...」

「...はい、そうですね...」

「...それにお前には報告しないといけないことがある」

「...？」

課長の暗い表情から、それはいい報告ではないとリカは察知していた。

「...思い出したくはないだろうが、例の任務はご苦勞であった...よくあんな廢墟から生き残ったな...まさに奇跡だ...運を随分使い切ったんじゃないか？」

「.....」

リカは、嫌な予感がして課長の冗談に応答できなかった。部長は応答を待たず率直に報告を続けようとした。

「...しかし見放された者もいる.....残念だが彼女は.....ツバキは助からなかった...もうこの世にいない...！」

「.....！！！」

リカは、ツバキのことについて、薄々勘付いていたが、それは耳にしたくないことであった。

「先輩が.....死んだ.....！やはりそうですか.....」

凶報を聞いたリカは、気分が沈んでいく一方であった。彼女はそのまま俯き、続けて話すことが出来なかった。

「...お前が昏睡状態の時に葬儀を済ませた...今更なんだが、まさかこんな事態になるとは夢にも思っていなかった...想定の外...あの爆破したビルの中で何があった...？今話せるのはお前しかいない...話せるか？」

課長の問いに対し、リカは、重い口を開こうとした。

「...私もはっきり言って、簡単な任務だと甘く見ていました...彼女も同じ気持ちのはず...でも、相手は予想以上に手強かった...追い詰めてもうちょっとのところで、取り逃がし...あげくの果てには、罠にはまりこの通りです...大事な仲間を失った...」

「.....想像以上に規模が大きかったということだな...？」

「...ええ、結局、尻尾を掴むことが出来ませんでした...謎に包まれたままです...」

「...単なる情報の乗っ取り屋ではなかったわけか.....これでまた振り出しだな...」

「...申し訳ありません」

「お前が謝ってもどうにもならん...ただ、不思議なことに例の爆破事件が起きてから情報漏えいによる被害が無くなったんだ...世界中の秘密情報機関も騒がなくなった...一件落着と言えるだろうか.....?」

「...もう犯人を追わないんですか?」

「...ああ、有力な情報がないからな...動きようがないんだ...それで捜査から手を引くことになった...お前には悪いが、無念を晴らすことが出来ない...」

「.....」

リカは悔しさのあまり下唇を噛んだ。

「.....一つ訊きたいのだが、同じ場所にいてどうしてお前だけ助かったんだ...?説明出来るか?」

「.....それは.....先輩が...ツバキの機転が利いたからだと思います...」

「...ツバキが...?」

「はい...あの高層ビルから脱出する手段は、エレベーターしかなかった...でもそれも奴の手により細工されていた...一人しか乗れないエレベーターに、私を強引に乗せたから助かった...」

「...わが身を犠牲にして、お前を助けたわけか...」

「そういうことです...!」

「...さすがはツバキだな、苦渋の決断だが仕方がないことだ...それだけ甘い世界じゃないことをお前も重々承知しているはずだ...親身に受け止めろ」

「分かっています...」

「...だから今回の件は諦めろ...他にもすることがたくさんある...これから忙しくなるぞ...お前は表でも裏でも期待されているホープだからな...ツバキは、これからの輝かしい未来をお前に託し

「たんだ...！」

「...はい」

「...ところでお前は今までサポート役に徹してきたわけだが、もうそれは卒業だ、これからは、自分で判断して動かなくてはならない...自信はあるか？」

「...今は何とも言えません...とりあえずこの怪我を早く治すことが先決かと...」

「...ああ、そうだな、根性のあるお前ならリハビリに耐えて、すぐ復帰できるだろう...」

「はい、頑張ります！」

「...とりあえず今はぐっすり眠ることだ...まともに寝てないだろ？」

「...そうですね、お腹いっぱいになったんで、眠たくなってきました...今夜は安心して眠れそうです...」

「...そろそろ失礼するよ、...そうだ、後日、歌劇団理事長も見舞いに訪れるだろう...」

「そうですか...わざわざありがとうございます...お休みなさい...」

リカは安堵の表情を浮かべ、課長はとりあえずほっとして病室を後にした。その夜、リカは惨劇の夢を見ることなく、爆睡して朝を迎えた。ここから彼女の過酷な試練が待ち受けていたのであった。

翌朝、リカは、担当医を自分の病室に呼び出していた。

「...もう本格的にリハビリを始めるだって...！？」

担当医は、リカの思いがけない発言に開いた口が塞がらなかった。

「...ええ、もうだいぶ怪我は治ってるからいいでしょう？」

「確かに異常な速さで回復しているが、リハビリするにはまだ早すぎるぞ...奇跡的に靭帯は影響がないが、骨は完全につながっていない...立つことなど.....」

「...ほれ」

「...!!」

すると、リカはどや顔で地に足をついて、バランスを保って立ちだした。担当医は、驚きのあまり声が出なかった。彼は念のため、レントゲン写真で確認しようとしたが、結果、リカの体の骨折部分は、ちゃんとつながっていた。

「...これは驚いた...！ここまで回復しているとは...」

「これならオーケーでしょ？」

「.....分かった、リハビリするのを許可しよう...」

リカは、自信に満ちた表情を浮かべてリハビリ施設に連れられた。こうしてリカの復帰劇の幕が開かれようとしていた。

都内大学病院リハビリセンター

リハビリを受けにきたリカは、車椅子から立ち上がり、自力で歩こうとしていた。周りを見渡すと手足がなく、義手義足を取り付けた者がたくさんいて、リカのように現場復帰するために誰よりも真剣に励んでいる者ばかりであった。

リカは、看護師の指示のもと、リハビリに集中した。まず普通に歩く練習を始めようとした。初級の歩行練習用通路は、三十メートルほどあった。はじめはさすがに思うようにいかず、すぐつまずいて倒れ込み、悪戦苦闘していた。リカは、まず壁に手をつけて、ゆっくりと歩こうとした。それは、スケートリンクではじめて滑る時のような感覚であった。

リカの怪我は、治りが早いと言ってもしばらく昏睡状態だったため、筋力がかなり落ちており、その状態ですぐリハビリを行うのは、担当医の言った通り無謀なことであった。病室で立ったのも、やせ我慢だったかもしれないと担当医はふと思った。

「...どうだね？まだ無理だろう？自分の体が一番分かっているはずだ...病室に戻ろう...」

「.....嫌よ、この一直線の通路で歩けるまで帰らないわ...」

リカは負けず嫌いなところがあり、闘志を燃やしていた。担当医は、呆れて溜め息をついた。

「...すまないが、私も他に仕事があるからいつまでも君にかまっていられない...無理は絶対するな、本当に体が壊れるぞ...！」

リカは、担当医の忠告に笑顔で受け答えした。担当医が去った後も、彼女は諦めず懸命にリハビリを続けようとした。

看護師がリカを見守る中、他に彼女の様子を見学している者が居た。それはグレーのスーツを着て、サングラスをかけた、いかにも怪しい男であった。

「.....」

謎の男は、しばらくリカのリハビリしている姿をそっと覗いていた。

「.....ちょっと休憩したらどうですか？すごい汗の量だし、顔色も悪い...」

看護師は、リカの体調が気になり優しく声を掛けた。

「...大丈夫よ...でも、お腹空いてエネルギー切れかも...はは...」

「...昼食は用意してあります...ただ、お願いしたいことが...」

「...何？」

「...食事についてですが、制限させてもらいます...こちらで決めたメニューを食べて頂きます...」

「...そんな～」

「...あなたの食事スタイルは、はっきり言って以上です...今のあなたは、病人なんですから...昨夜は特別ですよ...今後のことを考えて、こちらのルールに従ってもらいます...リハビリが終わっても身体検査があるので、異常なデータが出ない為にも我慢してもらいます...！」

「え！身体検査までってこと！？」

「...そういうことですね～」

リカにとって、食事制限は拷問に近いことであり、それで一気に力が抜けたようであった。

「どうします？」

看護師の容赦ない問いに困り果てたりカであったが、数分後ようやく観念した。

「.....従います、続けさせて下さい...」

「...了解しました...それでは昼食を取ってからあと一時間頑張りましょう」

「...は～い」

リカは重い腰を上げて、看護師のサポートのもと、ちゃんと歩けるよう専念した。

リハビリ初日は、ひとまず夕刻まで続けて、リカは、病室へと戻って行った。さすがに疲れたのか、彼女はベッドで横になった途端、鼾をかいて寝ていた。

同じ頃、リカのサポートをしていた看護師は、担当医にリハビリの結果を報告していた。

「...でどうだった？」

「.....やはり食事制限のことがかなりショックだったのか、前半は調子が悪かったです...」

「...だろうな、それで今日は少しも歩けなかったのか？」

看護師は、担当医の問いに対してゆっくり口を開こうとした。

「.....はっきりいって、今日はちゃんと歩くことは無理だと思ってました.....しかし、最後の最後で歩きました...ゆっくりではありますが、壁に手をつかず三十メートル歩きました.....！」

「...何だって!？」

「...これは真実です...！」

「...とても信じられん...骨がくっついたばかりで立つのがやっとなのはず...それに筋力はかなり落ちている...初日でちゃんと歩けるとは...！」

「...同感ですが、事実なので...」

「...無理しすぎて異常はないだろうな...? 忠告はしておいたが...」

「検査の結果、悪化はしていませんでした...足の包帯も交換しておきましたし...もうほぼ足の怪我は回復しています...」

「...彼女の回復力には驚かされるばかりだ...それならもう少し厳しくやろう、飴と鞭で、飴はあまり与えるなときつく言われてな...極限まで追い込めとのことだ...それを実行するこっちの身にもなってほしいが...」

「了解です...それでは明日から次のメニューに移ります...」

「...うむ、それで現在彼女は...？」

「...寄り道させないよう病室まで送りました...今は疲れてぐっすり寝てるかと...」

「...油断するな...なんといっても食欲に関しては要注意だ...監視を怠るな...」

「心得ています...また後で様子を...」

「よろしく頼む...」

こうして、一日目のリハビリが無事終わり、リカの試練が続いた。

それから数週間後、担当医は、リカのリハビリ結果の報告書に目を通して、落ち着いた様子であった。

「...想像以上に楽しませてくれるな...彼女は...！」

「...ええ、軽々と二百キログラムのベンチプレスを持ち上げていました...リハビリでする行為じゃないですよ...やけになってるんでしょうか...？」

「...それもあるな...好きなものが食べられないからストレス発散だろ...何はともわれ順調のようだな...報告しておこう」

こうして、リカのリハビリは、問題なく進んでいき、それから一ヶ月近く経とうとしていた。

その日、リカはリハビリを終えて無事退院できるかどうかの身体検査を受けていた。

「.....血圧は若干高いが神経使う仕事だから仕方ないか.....退院を認めよう！」

「...え？いいの？」

「ああ、怪我も完治したし、おめでとう」

「やった～！やっと解放される！」

「お疲れ様でした！」

「ありがとう！世話になったわね！」

「.....退院したとはいえ、くれぐれも無理しないようにな...特に食事は...」

「分かってるって...！」

リカは、担当医に苦笑いを浮かべ、礼を言った後、病院を出ようとした。彼女は迎えのタクシーを待っていたが、なかなか来ないので困り果てていた。

「...プア...プア...！」

その時、クラクションの音が聴こえ、その音は病院入口前の駐車スペースに停まっているメルセデスベンツからであった。

「...！」

クラクションが鳴った直後、ベンツの運転手が車内から出て行き、リカの方に近づこうとした。その運転手は、スーツを着た二十代後半くらいの男性であった。

「...初めまして、あなたを迎えに来ました、家までお送りしましょう...」

「...私を迎えに？あなたは一体？」

「...安藤ユウといいます、驚かせて申し訳ない...お見舞いで顔を出そうとしたんですが忙しくて...」

「...初対面のあなたがどうして迎えに？」

「...僕は.....公安の人間です！」

「...え？」

安藤はリカに近づき、自分が公安の関係者だと小声で明かした。

「...ここで話すのもなんですから、続きは車の中で話しましょう...どうぞ」

「.....」

リカはまだ半信半疑のまま、安藤の車に乗り込んだ。安藤は、運転しながらリカと話をしようとした。

「...そんなに警戒しないで、どうも殺気が満ちている...腕を組む振りをして、上着の内ポケットに利き手を深く突っこむのは、止めてもらえるとありがたい...ここで撃てば大きな事故につながる...」

「.....！」

リカは、いざという時のためにひっそりと銃を抜く準備をしていたが、安藤に見抜かれていた。彼女は素直に従い、利き腕を銃から放した。

「...プロだということは分かったけど、まだあなたを信用していないわ...証明出来るものは？」

「...警察手帳や経歴の書類はいくらでも見せるよ、僕が敵なら、もうとつくにあなたを殺している...ちなみに今日はオフでね...銃は持っていない...」

「...まあいいわ、少しでも怪しい素振りを見せれば、強引に降りるわよ...」

「...分かったよ、話を続けても？」

「...どうぞ」

「...かなり酷い怪我だったようだけど、予定より早く退院したようだね...関係者は皆、驚いているだろう？」

「...意外と体が丈夫なのが取柄でね、早く仕事したいし...」

「...表では舞台の仕事をしているようだけど、結構人気あるみたいだね～」

「...まあね、まだまだ未熟だけど.....舞台を観に行ったことは？」

「...ないんだよ、歌劇団のことも最近知った...出演者が全員女性というのは凄いね...男も演じるわけだ？」

「男役をね...はっきり知らないあなたからすれば不思議な感じでしょう？」

「...いいや、興味深いね、話のタネに観に行きたいもんだが...あなたは男を演じるのか？」

「...男役専門よ、劇団入団後、男役と女役を選択出来るわ...途中、役を替えられるし...」

「...どうして男役を？」

「背が高いからよ、あんまり背が高いと、ドレスとか女性用の衣装が似合わないわ...」

「普段はひらひらの衣装とか着ないのか？」

「...そうね、入団してからスカートは一度も履いたことないわ...まず持ってないし...」

「...成程、役を忠実に演じるためだね」

「...かなり興味を持ってきているようね...男性のファンが増えてくれるとなんか嬉しいわ...」

リカは表情が和らぎ、安藤と打ち解けようとしていた。

「もう少し話を続けたいが、寄り道する所があつてね...そっちの用件を済ましてから続きの話をしよう...」

「...何処に行くの？」

「...あなたに会いたいという人を待たせているんだ、これから会ってもらおうよ」

「...それは誰なの？」

「...連絡を受けただけだから顔は知らないが、あなたがよく知っている人物だと思うよ...」

リカは、待っている相手を知らないまま、安藤に待ち合わせ場所へと連れられた。

待ち合わせ場所は都内の公園であつた。

「...並木道を通って奥の広場のベンチに座っているようだ...行けば、すぐに分かるとのことだ...」

「...あなたは？」

「...僕は来ないように言われた、ここで待ってる、用が済んだら戻ってきてくれ」

リカは素直に安藤に従い、一人で公園へと入って行った。広場に向かうと、ベンチに座っている者が一人居て、リカは、恐る恐るその人物に接触しようとした。座っている人物は女性で、サングラスをかけて、シックな感じの服装を着こなしており、とても一般人とは思えない風貌であつた。

「...あれ？まさか...！」

リカは、待っている人物の正体が分かつたようであつた。

「...いつまでぼけっと突っ立っているの？早く座りなさいよ...！」

ベンチに座っている女性は、命令口調でリカに話し掛けた。どうやら目上の人間のようなようであった。

「まさか...あなただったとは...驚きました...でもなぜ？」

「...可愛い後輩が入院したんだから、心配するのは当然でしょ？見舞いに行こうと思ったけど...行く暇がなくてね...」

「それは別に構いませんが...」

リカを待っていたのは、先輩のノリコであった。

リカの新人時代に就任した劇団班トップスターの一人で、クールな一面が特徴で、ダンス技術が長けている。裏の世界では、孤高の狩人（ハンター）として恐れられている。

「...体の具合はどう？もう完全に回復しているの？」

ノリコはサングラスを外し、淡々とリカに質問した。

「.....えっと...はい！的確な治療トリハビリで、だいぶ良くなりました...！」

「...そう、それなら安心ね、皆、あなたが戻って来るのを待っているわ...」

「...私も仲間の顔を早く見たいです」

「.....あなたの相棒のことは残念に思うわ...彼女のことはよく知っていてね...はっきり言って、あなたよりしっかり者が将来が期待された...」

「.....そうですよね...どうして彼女が？どうせなら私が.....！！」

その時、リカは、表情が固まり、冷や汗を掻いた。それはまるで、金縛りにあったかのようであった。

「...その先のことを口にすれば、また病院送りになるわよ.....！」

リカが小刻みに頷くと、謎の金縛りは解けたようで、それはノリコの影響かどうかは不明であった。

「.....でも悔しくてたまりません、私をもっとしっかりしていれば.....！」

「...自分を責めてもしょうがないわ、そういう運命だったのよ...あなたにも大物になる素質があるから...ツバキは、あなたの才能を見込んで、自らの命を犠牲にしたんだと思う...彼女はそういう人よ、未熟な点はこれから補えばいい.....今のあなたはプロとしての自覚が足りないわ...」

「.....」

リカは曇った表情のままであった。

「このままではツバキが浮かばれない...先を目指す気があるのなら、くよくよしてないで心を入れ替えなさい...！」

リカはノリコのお叱りの言葉を浴び、それが身に染みて、今の自分の姿を恥じた。

「...ノリコさんの言う通りです、私はネガティブだから...」

「だからもっと自信を持ちなさい！」

「...はい、すみません」

「.....あと...これは辛いことだと思うけど...ツバキの件はしばらく忘れなさい...相手が悪かったわ、とても敵わない...関わらない方がいい...じきに対決する時は来るわ...それまで待つよ...！」

「...分かりました」

リカは、涙をこらえてノリコに従った。

「...でもきつりハビリを乗り越えて、少しでも早く復帰する気持ちには感服したわ...これだと先が期待できるわね...！」

「ありがとうございます...！」

「今とはとにかく、本業である舞台の仕事に重点を置くのよ、あなたもいずれ私と同じように上を目指す立場になる...そろそろ私たちの班の公演稽古が始まるわ...うかうかしている暇はない...今までより厳しく行くから覚悟して...！」

「...は...はい！」

ピリピリとしたムードに包まれる中、ノリコは、まだ何か言いたげであった。

「.....それとこれは正式に発表してないけど、特別にあなたに話しておくわ...」

「...何でしょうか？」

「.....歌劇団を退団しようと思うの」

「...え？」

リカは、ノリコの衝撃的な発言で目が点になった。

「...まだ先のことだけどね、周りに言いふらさないでよ～後からちゃんと発表するんだから...」

「それは自分の意志ですか？」

「...いちいち詮索しないで、トップスターなんてずつとなれるものじゃないし...未練はないわ...そろそろ世代交代ってことよ...」

「私は困ります...教えてほしいことがたくさんあるのに...」

「...だから辞めるまでちゃんと指導するわ...あなたを含め、若手を成長させるためにみっちり鍛えてあげる！それなら納得でしょ？」

「...はい」

「よし、これで全て伝えたわ、あなたの元気な姿を見れて良かった...今度は稽古場で会いましょう」

ノリコは、サングラスをかけ直して、颯爽とリカの前から去ろうとした。リカは、ノリコの姿が見えなくなるまで呆然と立ったままの状態であった。

しばらくして、車内で待っていた安藤は、戻ってきたリカにそっと話し掛けようとした。

「...用事は済んだようだな」

「.....ええ、随分と待たせたわね」

「...別にいいさ、それじゃあ行くか...」

安藤は、車を発進させてリカを家まで送ろうとするが、なぜか移動中に会話しようとしなかった。リカもまた話し掛けようとせず、車内は気まずい空気が流れた。安藤は、リカの思い詰めた表情を見て、気安く喋り掛けてはいけないと察していた。沈黙の時間が続き、気づけば安藤が運転する車は、リカの自宅マンションの前に停まっていた。

「...ここで合ってるだろ？」

「ええ、ありがとう、短い間だけど世話になったわ...もう会うことないわね」

「.....」

その時、安藤はリカの発言に対して、何か言いたげな表情を浮かべた。

「...どうしたの？」

「...実は永遠の別れにはならないんだ...上の命令でな...これから俺がお前の新しい相棒になるわけだ...改めてよろしく頼む...！」

「...え...えー！！！！！！？」

安藤は急に馴れ馴れしく接し、リカは、驚きのあまり車内で声を張り上げた。こうして、リカの新しい生活が始まろうとしていた。

それから数日後、リカが所属する班が出演する舞台作品の稽古が始まり、彼女は、久々に仲間と顔を合わせて歓喜に沸いた。

ある日、忙しいスケジュールの合間を縫って、リカは亡くなったツバキの墓参りに訪れていた。その日の彼女の服装は、男性用の喪服であった。リカはツバキの墓前で立派な男役、舞台女優になると誓って、数分手を合わせた後、その場を後にした。

それから長い年月が流れた。記念すべき百周年の年が近づき、歌劇団は、より一層活気づいていた。

女性ファンが多いとされる歌劇団であったが、徐々に男性ファンも増えていき、海外のファンも現れて、一層注目されることとなった。こうして、歌劇団が盛り上がってるわけだが、そ

の裏であることが蠢いていた。

打って変って、その年の残暑厳しい東京。都内某所のオフィスビルの一室で、待っている者が一人居た。

待っている部屋は、CEO（最高経営責任者）の部屋で、その人物はアポイントメントを取っておらず、無断で社内へと潜り込んでいた。会社の人間は、そのことに気づき、急いで侵入者のもとへと向かった。

「.....誰だ、お前は？どうやって入った？」

CEOが警備を引き連れて、侵入者の前に現れた。侵入者は慌てることなく、ゆっくりと立ち上がった。その侵入者は、オーダーメイドの紫がかかったダークスーツを身に纏って、腕を組んで姿勢よく立っていた。

「...ここはセキュリティー専門の会社だと耳にしたけど、たいしたことないわね...おたくの社員に化けて、お邪魔させてもらった...本人は無事だから安心して」

「.....お前は一体...？」

「...私の名はリカ、公安のエージェントよ、あなたに訊きたいことがあって来たの」

「.....警察か？警察が何の用だ？」

「...しらばっくれないで、あなた、陰で色々なことしているでしょう？」

「.....ぐ！」

CEOは、リカに指摘されて顔色を悪くしていた。

「...悪事を働いているようだけど、今回は見逃してあげるわ...別件で訪れているんでね...」

「ごちゃごちゃと喧しい女だ、警察だろうと許せないことだ、早く出て行け！」

「...私の質問に答えてくれたら出て行くわ...」

「...黙れ！自分から出て行かないんなら、力づくで追い出すまでだ...！」

CEOはリカの用件に応じず、警備を使って彼女を追いだそうとしていた。

「...！」

警備がリカを捕らえようとするが、彼女は抵抗して、反撃の隙を窺い、リカは警備の一人に蹴りを浴びせた。

「...何している？どンドン行け！」

リカの強さに怖気づいた警備たちであったが、CEOの命令で仕方なく動こうとした。警備たちは、一斉にかかろうとしたが、リカには通用せずことごとく倒されていった。気づけばCEOだけ残り、2人きりになった。リカはCEOに銃を突きつけた。

「.....さて、これで邪魔者が居なくなった...ゆっくり話しましょうか」

「.....警察が脅迫する気か！」

「...警察、警察って五月蠅いね、私は非常勤みたいなものよ、特殊な枠だから問題ない、これも捜査よ...！」

「.....何が訊きたいんだ？」

CEOは身の危険を感じ、リカの質問に答えようとした。

「.....あなたがある犯罪組織の一員だということは分かっている...知っていることを全て話してもらおうわ...」

「！.....詳しいことは知らない.....私はただの下っばだ...話せることはない...！」

「...じゃあこれならどう？十年くらい前に関連会社が爆破事件に巻き込まれたはず...爆破された会社の情報は抹消されて調べようがない...何か知っているでしょう？」

「...！！あ...あれには私が関与していない.....どうしてそんなことを訊く？」

CEOは包み隠さず質問に答えようとして、リカは、CEOに追っている事件の事実を話そうとした。

「.....爆破された会社には私も居たのよ、そして仲間が一人...爆破に巻き込まれて死んでしまったわ...だから犯人を追ってる...！」

「...敵討ちということか...」

「...そうよ、絶対に許さない！」

この年、リカは所属している歌劇団のトップスターに就任して歌劇団の看板を背負う人材に選ばれた。また、裏の世界では、一流エージェントに昇格して、相棒の公安職員、安藤と共に凶悪な犯罪を捜査していた。彼女は、あらゆる困難を乗り越えて、仲間の敵を討とうと奮闘していた。

「.....！あれ？私、寝てた？」

リカは、自主稽古の休憩中に疲れ果てて眠ってしまっていた。彼女は、長く夢を見ていたようであった。すっきりした顔で目覚めたリカは、稽古を続けようとせず、帰る支度をしようとした。

「.....今夜はこれくらいにしとくよ...無理するのは体に毒でしょ...？」

リカは帰り際、彼女以外誰もいないはずのエレベーターホールで何やら語り掛けた。それは亡くなった友、ツバキに向けた言葉であった。リカは、ツバキとの約束を果たし、彼女の分まで精いっぱい生きようと考えていた。

サマーメモリー

ある厳しい暑さが続く日本の夏、百年の伝統がある大手歌劇団は勢いが衰えず、観客の期待に応えようと奮闘していた。

歌劇団は、六つの班に分かれて公演を行っており、公演スケジュールなどはそれぞれ異なる。さらには、拠点としている劇場の公演だけでなく、全国ツアー公演、若手スター育成のための公演などがあるため、班の中で二手に分かれることが多々ある。これにより、ファンは日本各地で歌劇団の舞台を楽しむことが可能となった。

一班のトップスターのリカは、大作の公演を終えて一段落ついていた。次の仕事であるディナーショーは、まだ先のことなので、彼女は久々の長期休暇が取れることが出来た。

ある朝、リカは一度目を覚まして慌てた素振りになるが、ふと休暇だということに気づいた。

「...ふ〜焦った...」

ほっとしたリカは、不規則と分かっているながら再び寝転がり、二度寝することにした。よほど疲れが溜まっていたのか、彼女はすぐに眠りに就いた。

真夏といっても朝の時間は涼しい方で、リカは、冷房を点けずに眠っていた。

リカは、ある夢を見ていた。しかし、それは夢といっても実際にあったことで、彼女の過去の出来事であった。

時代はリカがまだ歌劇団の新人劇団員だった頃、この頃、トップスター時代に比べれば楽な方で、彼女は安心して夏休みを取っていた。

リカは、夏に休みを取ると、決まった場所に足を運んでバカンスを楽しんでいた。

その場所は神奈川県内に位置する美しい海が一望出来るのどかな田舎町、柚里浜（ゆずりはま）であった。漁業で盛んな町であるが、春は山で花見が出来て、夏はスキューバダイビング、秋は紅葉狩り、冬は外湯巡りと一年中楽しめる観光スポットとなっている。

トンネルの暗闇から抜けて海沿いを走る列車にはリカが乗っていた。その他の乗客の中には、馬鹿騒ぎしている大人や子供がいて、それを迷惑そうに見ている者もいた。

「...コン」

その時、酔っ払いが放ったビールの空き缶が、リカに命中した。しかし、彼女は少しも反応せず、サングラスをかけながら爆睡していた。

「...ご乗車ありがとうございました...まもなく柚里浜に到着いたします...お降りの際、お忘れ物

がないようお気を付け下さい...」

車内に聴き心地のいいアナウンスが流れ、リカは、目を覚ましててきぱきと降りる準備をした。

「あ～やっと着いた～暑いね～」

リカは背中を軽く反らし、駅を出て強い日差しを浴びた。外は蝉の声が鳴り響き、夏の空気が染み渡っていたが、がらんとして、これといって目立つ物はなかった。駅前には、タクシー乗り場や一日に二本しか来ないバス停留所、他に小さな売店や古びた食堂がある程度であった。

「...！」

リカにとって見慣れた風景であったが、よく辺りを見渡すと、気になる物が目に入った。「環境破壊するな！」「リゾートホテル建設反対！」等と書かれた旗が駅の隅の方に掲げられていた。さらには熱い中、だらだらと汗を掻きながら署名運動をしている町民を目にした。

「...あのすみません」

「え？」

バス停に立っていたリカは、署名運動している町民の一人と目が合い、声を掛けられた。

「...時間は取らせないので、ご協力願いますか？」

「...はい、いいですけど」

リカは、サングラスを一旦外して町民の話に耳を傾けた。

「...ありがとうございます、実は、この柚里浜に高級リゾート施設の建設の話が持ち上がって、我々町民はそれに反対しているわけでした...計画を中止しようと、署名を集めているんです...」

「...成程、暑い中ご苦労様です...」

リカは、気立てのいい七十代前半の男性町民から事情を聴き、快く署名用紙とアンケート用紙を受け取った。

「...今日は、この町にご旅行で来られたんですか？」

「...はい、毎年、夏になると来るようにしているんです、スキューバダイビングがしたくて...」

リカは、用紙に記入しながら老人男性の質問に答えた。

「そうですか、自慢出来る美しい海ですからね～あなたと同じ目的で多くの方が来られますよ...日帰りですか？」

「...いえ、泊まりです、休みは長いんで...ずっと同じ旅館に予約しています」

「へえ～...ちなみにその旅館の名は？」

「...えっと、美楽荘って旅館ですけど...」

「ああ～美楽荘ですか～あそこはいいですね～従業員もいい方ばかりですし...」

「そうなんですよ、子供に頃から家族と来ているんで気に入っちゃって～」

リカは、すっかり老人男性と意気投合して、日陰にあるベンチに一緒に座り、しばらく雑談していた。

「...！」

時間を絶つのを忘れ、気づけば、リカが待っているバスが到着して、老人と別れることになった。

「...すみませんね～老人のつまらない会話を聞いてもらって...」

「...いえいえ、楽しかったです、何か亡くなったおじいちゃんを思い出しました、無理しないようにして下さい...！」

「...本当にありがとうございました、どうか楽しんで帰って下さい...それでは」

老人男性は、リカに別れの挨拶をして署名運動を再開した。後から分かったことだが、老人男性の正体は、前町内会会長であった。現在は会長の座を長男に譲り、悠々自適に暮らそうとしたが、リゾート計画のことが気になり、町民と共に建設反対運動に参加していた。

リカは、バスで宿泊する旅館に向かおうとしたが、乗客は、地元の間三人とリカのみであった。景色を見ると、道路は海と山に挟まれてまさに自然の宝庫であり、とても都会では味わえないものであった。リカは、バスの中でもう仕事の疲れが吹っ飛びそうであった。しばらくしてバスは山中を通り、リカが宿泊する旅館近辺で停車した。

リカが宿泊する旅館「美楽荘」は、こじんまりした二階建てで、周りの旅館と比べると古びていた。しかし、それに風情があって、魅力的で多くの旅行者が宿泊していた。何よりリカのような常連客が多かった。また、前会長が言ったように従業員はいい人材ばかりで、細やかなサービスが行き届いていた。

「いらっしやいませ〜」

リカが旅館に入ると、気品あふれる和装で出迎える美人女性がいた。

「あの...またお世話になります〜」

リカは、美人女性に愛想よく挨拶した。どうやら二人は顔馴染のようであった。

「...リカちゃん、今年も来てくれたのね、お気に入りの部屋はちゃんと取ってあるから...」

「ありがとうございます！」

美人女性は、美楽荘の女将であった。名は水口沙耶、四十七歳。実年齢より若く見えて、優しくであるが怒ると怖い一面が出る。

「ゆっくりして行って、あの娘に案内させるから...茉緒、お客様よ〜！」

すると、一階へ降りていく足音が聴こえ、一人の若い仲居がリカたちの前に現れた。

「あ〜リカ！待ってたよ！」

その仲居もまた、リカと顔馴染であった。彼女は沙耶の実娘で、名は水口茉緒、十九歳。リカの幼馴染みであった。

高校卒業後、親が経営している旅館で仲居として働いていた。母の跡を継ぐため、幼い頃から厳しい教育を受けていた。

「さ〜リカちゃんを部屋まで案内してあげて！ちゃっちゃとね！」

「分かってるわよ、ちゃんとするから！」

リカは、茉緒たちの親子喧嘩を見て、くすくすと笑っていた。茉緒は、リカの荷物を持って、宿泊部屋まで案内しようとした。

「結構、様になって来たわね、まだ仕事は大変？」

「...まあね、常連客が多いからやりやすい方だけど...さっき見た通り、まだ一度も褒められてないわ...小さい頃から仕事を手伝わされて厳しいったらありやしない...」

リカたちは、宿泊部屋に向かいながら雑談していた。

「...怒ったら怖いかもしれないけど、いいお母さんじゃないの...全然変わらないわね、おばさん...いつまでも綺麗～」

「...一切、疲れた表情を私たちの前で見せないからね...その辺がプロよ...家族の中で一番プライド高いし...リカのお母さんの方が綺麗だと思うけど...」

「.....そうかな？なんか変わった人だからね～そこが似たんだけど...」

「.....あんたの方こそどうなのよ、舞台の仕事は順調なの？」

「...ええ、まあ...まだチョイ役ばかりだからなんとも...今さらだけど、自ら舞台に立って歌ったり踊ったりするなんて考えられないかも...」

「...考えられないと思っているのは、私たち身内よ...まさかあんたがあんな歌劇団に入団するなんて信じられなかった...友達全員驚きっぱなしだったわ...てっきりモデルになるかと...」

「...私もモデルになるつもりだったんだけど、歌劇団は親に薦められたのよ、母は歌劇団のファンだし...絶対人生の役に立つって言われて...」

「歌劇団専属学校の入学試験は大変だったんでしょ？全く会えない時あったし...倍率があげつないって聞いたけど...よく一発で合格出来たわね...」

「...まあ奇跡ってやつじゃないの...」

「...運も実力のうちって言うしね...これからのあんたの活躍が楽しみだわ～ふふ」

「からかわないでよ...それよりこの町、随分揉めているみたいね？」

「え？」

「...リゾート施設を建てる計画で騒ぎになっているんでしょ？」

「...ええ、今年の春くらいから建設会社側と対立しててね...今頃、公民館で言い争っているでしょう...うちの父さんも代表で反対運動に参加しててね...駅前で署名してくれたのね？」

「...うん、偶然、署名運動しているおじいさんに会ったのよ、感じがいい人だったから気分よく同意したわ...」

「...おじいさんね」

茉緒は、頭に前町内会会長の顔がよぎったが、あえて、リカに正体を明かさなかった。

「私も今のこの町、好きだから早く中止になるのを祈っているわ」

「ありがとう、確かに最近、町は寂れてきたけど、必要としてくれている人は大勢いるわ、町の人はいいい人ばかりだし...もし高級ホテルなんて建ったら柚里浜ではなくなってしまうわ...なんとしても中止にさせないと...」

「私に出来ることがあったら何でも言ってね！」

「ありがとう、気持ちだけ受け取っておくわ、あんたは思い存分楽しんでくれたらいいから.....！」

その時、リカたちの前に一人の仲居が現れた。

「...あら、茉緒さん...そちらはお友達？」

「はい、客でもあるんですけど、毎年、この時期に泊まりに来るんです...」

「そうなの、綺麗なお友達ね」

「...あっありがとうございます...！」

「...彼女には今年の春から働いてもらってるの」

「...中山祥子と申します、よろしく申し上げます」

「...リカです...よろしく申し上げます！」

祥子は、リカたちより年上で大人の女性の色気を出し、実に魅力的であった。

「それじゃあ、リカさん、ごゆっくり～」

祥子は、リカに上品な姿勢で振る舞い、その場を去って行った。

「...今の仲居さん、綺麗な人ね～」

「そうでしょう、仕事の覚えもいいし、もう人気者よ、かなりの戦力になってるわ」

「そうでしょうね～」

リカは祥子に見とれていた。

「...さあお気に入りの部屋に入って」

リカは、茉緒に扉を開けてもらって、部屋に足を踏み入れた。

「...？」

その時、リカの宿泊部屋のはずであったが、なぜか人の気配を感じ、奥の部屋につながる襖をそっと開けようとした。

「...！！」

部屋には人影があり、それは、一人の女の子であった。

「こら！何してんの！」

茉緒は、部屋にいる女の子にきつく声を上げた。

「.....」

女の子は茉緒の怒号に動じず、何食わぬ顔を浮かべて部屋から出て行った。

「...あの娘、誰？」

「うちの姪っ子よ、今、小学校は夏休みだから遊びに来ているの、一人でね...ほんとお転婆で...悪いわね、驚かせちゃって...」

「...別にいいわよ、全然平気だから」

「あの子どもが汚してないでしょうね...せっかく綺麗に掃除したのに...」

「やっぱり子供にも分かるのよ、ここがいい部屋だってことが...」

リカの言う通り、予約した部屋からの風景は素晴らしいものであった。自慢の美しい海が一望出来る絶好の場所であった。リカは、毎年この部屋を予約していた。

「まあ自由にやってよ、早速泳ぎに行くんでしょう？」

「うん、今日は天気がいいからね～」

「昨日は滝のように雨降ってたのに...あんたは、確か晴れ女だったわね」

「うん、結構天気は恵まれているわ」

「...じゃあ私が旅館の車で下まで送ってあげるよ～」

「ありがとう、ちょっと待ってて、用意するから～未来の女将さん～♪」

リカはスキューバダイビングを目的にやって来たわけだが、ダイビングライセンスを持っていなかった。まず彼女が向かったのはダイビング体験の施設であった。

「.....それじゃあ私はここで...今日は忙しいからすぐに戻らないと...夕方に迎えに来るから」

「うん、ありがとう、頑張って、未来の女将さん〜♪」

リカは、茉緒に礼を言って、一人でダイビング教室へと入っていた。
インストラクターとは顔馴染で、スタッフたちはリカを温かく迎えた。

「いらっしゃいませ、お待ちしていました」

「よろしくお願いします〜」

リカのインストラクター担当は、こんがり焼けた肌で健康的な好青年であった。

「今日は天候が良くて水温が高い方だから気持ちよく潜れますよ〜」

「はい、楽しみにしています〜」

リカは、期待しながら水着の上からレンタルのダイビングスーツやシュノーケルセットを身につけた。その後、彼女は小船に乗せてもらい、ダイビングポイントに向かった。

「それじゃあこの辺りで潜りましょうか」

「はい」

リカは、インストラクターに指導してもらいながら海に潜ろうとした。澄んでいる海の中を覗くと、それは神秘的な光景であった。海中には、優雅にさまざまな種類の魚が泳いでおり、リカたちを少しも警戒せず、歓迎しているように見えた。視界が良かったため、海中の様子がはっきりと分かり、リカたちも海の住人になった気分であった。彼女は、海中でインストラクターに写真を撮ってもらい、その光景は、地上での観光と変わらない行為であった。リカは時間を忘れ、初日から満喫していた。彼女は時間を忘れるくらいの海の中が好きであった。

一方、美楽荘は忙しいようで対応に追われていた。そんな中、また一人、宿泊客が訪れようとした。受付には急いで戻ってきた祥子が待機していた。

「...いらっしゃいませ、ようこそ.....！」

祥子は、訪ねてきた男性客の顔を見るとなぜか青ざめた表情を浮かべた。

「...予約した古谷ですが...」

「え...はい、承っております...」

祥子は、どうにか気持ちを切り替えて対応した。

「...！」

そこに茉緒が現れて、祥子は冷静さを装った。

「...いらっしやいませ～.....祥子さん、すみません...！皆バタバタしていて...」

「...別にいいのよ...部屋までご案内するからここをお願い...」

「分かりました」

祥子は、茉緒に受付を任せて古谷という男性客を部屋まで案内した。

「...お荷物お持ちします...」

「...いえ、結構...大丈夫ですから...」

「.....！」

古谷は何処か無愛想で、気まずい空気が流れた。祥子と古谷は、とても初対面とは思えなかった。

「.....夕食の時間になりましたらお知らせしますので...それまでごゆっくり...」

祥子は、若干早口で旅館内の説明をして、逃げるように部屋から去ろうとしていた。しかし、古谷の手が伸びて、彼女は引き止められた。祥子は、古谷に肩を掴まれ、脅えている様子であった。

「...まあ、そう怖がるなよ、久しぶりに会えたんだから...」

その時、古谷の様子が豹変し、祥子に馴れ馴れしく話し掛けた。

「.....私は、あなたのこと知らないわ...！」

「...その割には、顔をちゃんと覚えてくれているようじゃないか...少し整形したんだが、効果な
しかな...ふふ」

「...顔を変えても分かるわ、あなたの嫌な部分が滲み出ているから...」

「さすがだな...長く一緒に居たからな、また会えて嬉しいよ...」

「...何の用なの？」

「...ゆっくりと話したいが、今は忙しいだろう...落ち着いたら部屋に来てくれ...」

「.....」

祥子は首を縦に振らず躊躇していた。

「...俺からは逃げられんぞ、住み込みで働いているんだろう？警察にも言えないしな...」

祥子は、古谷に何やら弱みを握られて、拒否することが出来ないようであった。この二人が接
触したことで、ある問題が巻き起ころうとしていた。

気づけば夕刻となり、夕日が澄んだ海を赤く染めていた。リカは、ずっと海中散歩を楽しんで
、そろそろ引き揚げようと陸に上がっていた。

「今日はありがとう～また明日よろしく～」

リカは、ダイビングスタッフたちに手を振って、茉緒が運転する車で、宿に戻ろうとした。

「今日は、満喫出来た？」

「ええ、何度潜っても全然飽きないわ～泳ぎ疲れたけど良かったわ～」

「でしょうね～でも楽しみはまだあるわ、日頃の疲れを吹き飛ばす温泉に今日はいい魚が大量に
獲れてね...豪華な夕食が待っているわ、でも、あんた確か...海鮮類、苦手だったわね...？」

「うん、でも火が通っていれば大丈夫...生が苦手で...」

「あんた臭いに敏感だからね...魚の生臭さが耐えられないのね...まあ、肉料理もあるし、メニューは豊富だから問題ないでしょう？」

「うん、エビフライとか陶板焼美味しいね～刺身以外なら食べられるよ！」

リカは無邪気に友と語り合い、幸せな一時を過ごしていた。

美楽荘の宿泊部屋数は六室あり、その日は満室となった。リカは、夕食前に温泉に入ろうとしたが、脱衣場の人の多さに嫌気が差し、夕食後に入ろうと決めた。ダイビング後、しっかり海水を洗い流したので特に問題なかったようであった。

リカは、風呂を諦めて部屋に戻ろうとしたが、その途中、受付ロビーで茉緒の姪を目にした。彼女は椅子に座り蹲っていて明らかに様子がおかしかった。

「...どうしたの？お腹の調子でも悪いの？」

「.....」

リカは茉緒の姪を気にかけるが、彼女の応答がなかった。茉緒の姪の体は、震えており何かに怯えているようであった。

「.....帰ってきてからずっとその調子なのよ...」

リカたちの前に汗を掻いた茉緒が現れた。

「部屋で会った時は元気そうだったのにね...今の状態だと、名前も訊けそうにないわね」

「...名前は西野伶亜、小学三年生よ...お転婆だけど、まだ甘えん坊な一面があってね...急に親が恋しくなったのかな...？仕事が片付いたら、事情を聴こうと思うんだけど...」

「.....」

リカは、伶亜が何か深刻な事情を抱えているのではないかと推測していた。

「...さあそろそろ夕食よ、リカ、悪いけど、この娘と一緒に食べてあげてよ、賑やかなところで食事した方がいいでしょう？」

「そうね...伶亜ちゃん、お姉ちゃんと一緒に広間の方に行こうか...」

伶亜は無言のまま、リカについて行こうとした。

「.....あのすみません」

その時、スーツ姿の男性数人が美楽荘を訪ねて来た。

「...いらっしやいませ.....あの...宿泊でしたら今日は生憎満室でして...」

丁度ロビーに居た茉緒が、男性たちに応対しようとした。しかし、突然訪ねて来た男性たちは、茉緒が予想していたこととは違う反応を見せた。

「...すみません、我々は宿泊で訪れたんじゃないんです、実は刑事でして...」

「え...?」

刑事と名乗る男性たちは、証明するために警察手帳を提示した。茉緒は、突然のことで気が動転しそうになった。

「...ある捜査をしまして、ご協力願いますか?」

「...はい、どういったことでしょうか?」

すると、刑事の一人が上着の内ポケットから写真一枚を出して、茉緒に見せようとした。

「この男性なんですが...こちらに宿泊していませんか?」

写真に写っている人物は、古谷という宿泊客で、茉緒は彼と顔を合わせていた。

「!.....はい、今日、ご予約頂いておりますが...古谷様が何か...?」

「.....さきほど遺体で発見されました」

「...え?!」

その時、茉緒は自分の耳を疑い、リカたちの耳にも届いていた。

「.....!!!」

「...伶亜ちゃん？」

リカは伶亜の異変に気づいた。彼女は、何かを思い出したようで酷く怯えていた。

「...申し訳ないですが、事情聴取したいので従業員の方、全員呼んで頂けませんか...勿論、業務が終わってからで結構です...宿泊客に騒がれないよう寝静まった時間がいいいでしょう...それまで待ちます、どうかご協力を...！」

「.....分かりました、女将に伝えて来ますので...」

茉緒は緊急を要して、女将である母に伝えに行こうとした。

謎の宿泊客、古谷の死亡により、リカは、ある重大事件に巻き込まれようとしていた。

刑事たちが訪ねて来たのを耳にした女将、沙耶は他の宿泊客に刺激を与えないよう、彼たちを速やかに使用されていない大部屋に誘導した。夕食の支度や段取りは沙耶の娘の茉緒に任された。

その頃、リカは、茉緒の姪にあたる伶亜と広間で夕食を取っていた。

遊び疲れたりカはご馳走にありつき、箸の動きが止まらなかった。しかし、それと比べ、伶亜の箸があまり進んでいないようであった。

「...どしたの？結構残っているけど...お腹空いてないの？」

「.....」

リカは心配して伶亜に話し掛けたが、彼女は無言のまま、彼女が旅館に戻ってからどうも様子がおかしかった。伶亜は少しも心を開かず、リカは困り果てていた。

「.....綺麗に食べてくれてるわね、ご飯もまだお代わりあるけど...」

リカたちに話し掛けたのは、仲居の祥子であった。

「...いいえ、もうお腹いっぱいなのでこれくらいにしときます...すみません」

「...そう、じゃあデザートは杏仁豆腐持ってきますね」

「ええ、お願いします」

「...伶亜ちゃんは.....あれ？いっぱい残してるわね...」

「...そうなんですよ、なんか元気がなくて食欲ないみたいで...」

「どうしたのかしらね？伶亜ちゃん、何かあったの？」

「...！！！！」

その時、伶亜の態度が豹変して、ますます顔色が悪くなった。彼女の体の震えは止まらなかった。

「...伶亜ちゃん？」

「あらあら、本当にどうしちゃったのかな？はじめに会った時は元気よく挨拶してくれたのに...」

「...！」

その時、伶亜はリカたちと目を合わさず、広間から逃げるように走り去って行った。リカと祥子はお互い目を合わせ、首を傾げていた。リカはまだ、ことの重大さに気づいていなかった。

一方、大部屋では従業員数人が集められ、古谷の件で事情聴取を受けていた。まず、事情聴取を受けたのは沙耶であった。

「...では古谷氏は今日、こちらの予約を取っていたわけですね...？」

「...ええ、うちは大体、常連のお客様が多いんですが、古谷は新規のお客様で、馴染がなくて...」

「...そうですか、最後に彼を見たのはいつですか？」

「...午後四時過ぎくらいに外出されまして...街を探索したいとおっしゃったので下まで車でお送りました...」

「...女将さんが運転されたんですか？」

「ええ、新規のお客様は、私か主人が対応するようにしています...主人は居なかったものから...」

「今日、ご主人はどちらに？」

「...公民館に行っています...討論会に参加するために...」

「...討論会...? ...ああ、リゾート地開発の件ですね...成程...」

「あの...何か私たちが疑ってます...?」

沙耶は、刑事たちの質問の仕方が気に入らないようであった。

「...いえいえ！そんな滅相もない！これも仕事なので気にしないで下さい...ただ、こちらの旅館に宿泊しているということが分かったのでお伺いしたまでです...」

「...それならいいですけど」

沙耶を落ち着かせたところで、また別の若手刑事が聴取を続けようとした。

「.....遺体が発見された場所は、裏山の崖下でした...崖上を調べると、彼の足跡があったため、そこから足を踏み外したと考えられます...事故として捜査しているんですが...」

若手の担当刑事は、手帳を片手に何か疑問に思っている様子であった。

「...事故なんですよ？」

「...実は不可解な点がありまして...発見された遺体は、仰向けに倒れ込んだ状態だったんです...自ら転落した場合、うつ伏せになるのが自然です...」

「...確かにそうですね」

沙耶は、刑事の話に納得して聴き続けた。

「...それに気になることはまだあって...頭部の怪我なんですが、仰向けになって落ちたのなら、後頭部にダメージが集中するはずなんですが...何故か前頭部の損傷も酷くて...とても事故で負った怪我とは思えないんです...」

「...つまり、自ら落下したのではなく、誰かに危害を加えられたということですか？」

「ええ、殺人事件...かもしれません...！」

「...そんな！」

沙耶は、とてつもない恐怖を感じ、しばらく俯いた状態であった。

「.....まだはっきりと決まったわけではありません...現場にはビールの空き缶が発見されてね、彼が飲んだものと分かり、酔っぱらって滑り落ちたとも考えられる...事故か殺人か両面で捜査しています」

「.....ショックです、今まで宿泊客とのトラブルはなかったのに...しかも死亡するなんて...」

「お気持ちは充分わかります...評判を下げるような行為は、絶対にしないのでご協力願います...！」

「.....分かりました」

「それでは聴取を続けさせていただきます、女将さんの後に他の従業員の方、呼んで頂けますか？すぐ済むので...」

「え...はい、手が空いた者から順番に呼びますので...」

「...お手数をお掛けして申し訳ありません.....！」

若手刑事は、先輩の視線を感じ、一旦身を引こうとした。そこからベテランが交代して、沙耶に何かを告げようとした。

「...女将さん、重ね重ねすみませんが、もう一つお願いしたいことが...」

「...と言いますと？」

「...実は、この死亡した古谷という男...身元がはっきりせんのです...職も派遣やらで転々としていて.....堅気じゃないかもしれません...彼が宿泊した部屋と荷物を調べさせてもらいたいんですが...」

「...ええ、構いませんが」

こうして、謎の男、古谷の転落死事件に関する事情聴取が密かに続いた。

夜も更けていき、リカは、疲れを取ろうと露天風呂に向かっていた。その時間、入浴する客はほとんどおらず、リカは、それを狙ってゆっくりと湯船に浸かろうとしていた。脱衣場に入ると、脱衣籠は一つだけ埋まっており、彼女の機嫌はよくなる一方であった。風呂場に行くと、湯気がテレビ番組の演出で使うドライアイスのように噴出され、真っ暗な空間が神秘的であった。リカは、その場をぺたぺたと歩いていき、夜景が見える岩風呂へと向かった。

「...！」

すると、そこに人影が見えて、リカは自然と目が合った。

「...あら、あなたは...」

「...どうも～こんばんは」

リカより先に湯船に浸かっていたのは祥子であった。祥子の肌は美しく白く、これが大人の美貌だとリカは見とれていた。二人はお互い愛想よく振る舞って、一緒に湯船に浸かった。

「随分と遅い時間に入るのね」

「ええ、あまり人が多いと落ち着いて入れないので...」

「...そうよね、私たちは仕事の関係でどうしても遅くなるから...それが醍醐味でもあると思うんだけど...今日はとにかく忙しくて...茉緒ちゃんも必死だったわ」

祥子は笑いながらリカに語りかけた。

「...彼女もなかなか慣れないと言ってましたが、仕事の方はどうですか？」

「...まあ大変だけど、楽しいわ、仕事が上手いかなんて当然のことだし...失敗から色んなことを学ぶわ...何より従業員の人たちはいい人ばかりだし...」

「...祥子さんは、この人じゃないんですか」

「ええ、以前は都内に住んでいてね...都会の生活が嫌になってきて、ここに引っ越してきたわけよ」

「...成程、確かにここはのどかでいい町ですからね～」

「.....でも来たばかりの時、職探しがなかなか上手くいなくてね...ここから都内に勤めるには不便だし...そんな時、助け舟を出してくれたのが女将さんよ、面接して即時採用してくれた...本当に彼女は女神に見えたわ...だから期待に応えて頑張らないと...」

「...そんなことがあったんですか、いいな～環境に恵まれてますね～」

「そうね.....ところであなたは舞台女優されてるそうね？」

「...ええ、まだ新人ですけど...」

「...茉緒ちゃんから聞いてね、あの有名な歌劇団の劇団員だからたいしたものね～」

「...いえいえ、それほどでも～これからが大変なもので...」

「...これからの活躍を楽しみにしているわ、大役が決まったら教えてね、観に行くから」

「はい、ありがとうございます！」

「...何か逆上せてきたわ、先に上がるわね」

「はい、ご苦労様です.....！」

その時、リカはあることに気づいて、視線がある場所に集中した。

「どうかした？」

「...あの、膝、どうかされたんですか？」

祥子の右膝を見ると大きな絆創膏が張られ、せっかくの綺麗な足がそのせいで台無しになっていた。

「!.....ああ、これ?急いでお客さんお迎えする時に階段から転げ落ちちゃって...本当に私って

ドジね...」

「気を付けて下さいね、大怪我にならなくてよかったですね！」

「ええ、ありがとう...それじゃあごゆっくり～」

祥子が去ったことで、風呂場はリカ一人になり、彼女の貸切状態になった。

しばらくして、リカは風呂場から上がり、浴衣姿で脱衣場を出ようとする、渡り廊下に一つの人影があった。

「あれ？リカちゃんかい？」

「...はい、おじさん今晚は～」

「やあ、リカちゃん、いらっしゃい、挨拶が遅くなったね、今日は何かバタバタしていてね...」

リカの前に現れたのは美楽荘の主人、茉緒の父親であった。名は水口雅春、五十歳。彼は大学卒業後、旅行会社営業をしていたが、退職して旅館経営をしようと考えていた。当初、妻の沙耶はそれに大反対であったが、雅春がどうにか彼女を説得して、二人で開業することとなった。当時、茉緒は幼稚園児でしばらく彼女は祖父母に面倒を見てもらうこととなった。開業当初は困難を極めて赤字が続いたが、彼らはめげず、旅館経営を続けた。そして、長年の苦勞が実り、徐々に有名旅館へと変化していったのであった。

「...偶然耳にしたんですが、宿泊客の一人が事故に遭って亡くなったそうですね...」

「ああ、私は今日、ほとんど旅館に居なかったからよく状況が分からないんだ...さっきまで町民たちと居酒屋で集まっていたから...勿論、仕事でだよ...！」

「...ふふ、分かっています、リゾート地開発の討論会に行っていたんですよね？」

「ああ、討論会の後も怒りが収まらず、仲間と行きつけの居酒屋で話し合っていたんだ...その時に女将から電話があつてね...地元の警察署に呼ばれて、女将と一緒に彼の遺体を確認したよ...常連じゃないから顔は知らないんだがね...」

「こんなこと初めてですもんね...」

「当然だよ！全く...どうしてこんなことになっちまったんだ...」

「...おじさん、そう落ち込まないで下さい...！不慮の事故なんですから、お客さんは離れていきませんよ」

「...ありがとう、リカちゃんみたいなお得意様を失うわけにはいかないからね...」

「お疲れの顔してますね...今夜はゆっくり休んで下さい...」

「ああ、そうさせてもらうよ、従業員の皆も、ようやく事情聴取が終わったみたいだ、これからゆっくり湯船に浸かるよ...」

「はい、お風呂気持ちよかったですよ～」

「...また落ち着いたら茉緒たちと話をしよう、それじゃあお休み～」

「お休みなさい～」

リカは雅春と別れ、自分の部屋に戻った。部屋に戻ると従業員により、布団が敷かれていた。

「...！？」

リカが部屋の灯りを点けると、衝撃の光景を目にすることとなった。彼女は、驚きのあまり、なかなか声が出なかった。

「.....どうして？」

敷かれた布団を見ると、何故か伶亜が横になっていた。

「...コンコン」

思いがけないことに戸惑うリカであったが、問題はどうやら解決しそうであった。リカの部屋を訪ねて来たのは茉緒であった。

「...あっやっぱりここだったか！マスターキーまで盗んで！」

「...そうか、マスターキーで入ったのか」

「ごめんね、すぐ追い出すから！」

「いいわよ、ぐっすり眠っているから急に起こしたら可哀そうよ、特別に朝まで寝かしといてあげるわ...」

「...そう、悪いわね」

「.....昼間もいたよね...この部屋になんかあるのかな？」

リカは、伶垂の不可解な行動が気になって仕方がなかった。

「...実はね.....」

すると茉緒が口を開き、事情を説明しようとした。

「...何か理由があるのね？」

「ええ、彼女はこの部屋が好きなのよ、特にここから見える景色がお気に入りだね...最近ハマったカメラで景色を撮りまくっているのよ」

「成程ね～」

「旅館に着いたら、真っ先にこの部屋を占領しようとするの、部屋が空いてる時はいいけど、今日みたいにお客さんがいるとさすがに迷惑になるわ、何度も注意しているんだけど聞かなくて...困ったもんよ」

「まあ居てもいいんだけど...どうも彼女の様子がおかしいから聴き出さないかね...」

「...そうね、今日は色んなことがあって、それどころじゃなかったわ...母さんもさすがに疲れたみたい...」

「...で例の事故の件はどうなったの？」

「地元刑事が私たち従業員を事情聴取して、亡くなった宿泊客の部屋と荷物を調べてた...何か進展があれば後日知らせるって言ってひとまず帰って行ったわ」

「...そう、何か気味の悪い事件よね...」

「全く...疫病神みたいだわ、どっと疲れた...風呂入って寝るわ...明日も早いから...それじゃあ彼

女のこと頼むわね...お休み～」

「...うん、また明日ね～」

茉緒は、ひとまずほっとした表情を浮かべ、リカの部屋を後にした。リカは起こさないよう俵を端に移動させ、一緒に眠ろうとした。こうして、リカの休暇一日目が幕を閉じようとした。

彷徨うならず者

リカは、夏休みを楽しもうと、柚里浜という田舎町へやって来たわけだが、同じ旅館に宿泊していた古谷という男が突如、遺体で発見された。夕刻、リカが宿泊している旅館「美楽荘」に地元刑事が訪れ、古谷の死を知らされるのであった。

それから翌朝、場所は変わり、東京都霞が関に位置する警視庁。そこの喫煙室で一服している男性刑事が一人居た。その男性刑事は、徹夜で仕事をしていたようで、ようやく落ち着いた様子であった。しかし、そんな彼のもとに一人の人物が迫っていた。

「.....おお、ここに居たか...！」

「...課長、お早うございます、どうしたんですか？」

「お前に話したいことがあるんだが...朝刊は読んだか？」

「...いえ、まだ読んでいませんが、休憩を取ったばかりなので...」

すると、課長は、一紙の朝刊を男性刑事に差し出した。男性刑事は、課長が指差す記事に注目した。

「...あまり大きく取り上げられていないが、この転落事故で死んだ被害者...実は重要人物なんだ...」

「...古谷孝三、この男がですか？」

「...ああ、少々雰囲気が変わっているが間違いない...恐らく整形している...名前も偽名だ...」

「...何者なんですか？」

「...お前は学生だったから知らんだろうが、彼は、ある過激派の一員だ...本名は下田武宏...朝刊を見て部長も目が点になっていたよ...」

「初めて耳にしました...どういった組織なんですか？」

「...教えよう、それは.....」

「ガチャ……！」

その時、二人の会話に割り込んでいくような感じで、一人の警察職員が喫煙室に入ってきた。職員は一服しようとするが、妙な空気に包まれて、火を点けず煙草を銜えたままであった。

「課長…」

「…そうだな、場所を変えて話そう」

男性刑事と課長は、速やかに喫煙室を後にして空き室で話の続きをした。

「…でこの古谷という男が属している組織は、社会にどのような影響を及ぼしたんですか？」

「…知名度は低いんだが…警察関係者でも限られた者しか知らない……日本赤軍は知っているな…？」

「…ええ、七〇年代から八〇年代にかけて、テロ活動をしていた武装組織でしょ？知ってますよ…歴史的な事件を起こした罪人たちですから…」

「…日本赤軍は九〇年代になると主要メンバーの逮捕、高齢化、資金の獲得困難で消滅した…それから数年後にまた別のテロ組織が暗躍していたんだ…」

「…九五年にバイオテロを起こしたカルト教団ではないんですか？」

「…いいや、全くの別物だ…当時、インターネットが普及しだした頃に組織が結成された…メンバーは、全国各地の何処にでもいる十代後半から二十代前半の若者…最初は眼中にはなかったが…これがネット社会の怖いところで、奴らはお互いの顔や身元を知らず、ネットという仮想世界でメンバーを集めていったわけだ…」

「…奴らは、何をやからしたんですか？」

「…当初は、日本赤軍の真似事をしようとして企んでいたそうさ…立て籠もりやハイジャックは、規制が強化されたことで諦めたようだ…まず規模が違うからな…計画を実行させるのにかなり苦労したそうさ」

課長は、当時の捜査内容が記録された分厚いファイルを机上に積んで、男性刑事に説明しようとした。

「...何故そんな連中を恐れるんですか？」

「...恐ろしさに気づくのに少々時間が掛かったのさ.....ある時だ、強盗事件の犯人を捕らえようとガサ入れしたんだが、...わんさかと危険薬物や銃器が出てきた...元々の事件の犯人は、その家主だったんだが、そいつの妻も一枚噛んでいてな.....外見は一般家庭の夫婦だ...とても信じられないことだった...」

「彼らも組織の人間だったんですか？」

「ああ、取り調べで全て吐いたよ...密輸は組織のためにしたことだと...それから続々と組織のメンバーが捕まったんだが、罪状は窃盗、強盗、詐欺、密輸...と様々だが、これは全て個々の犯行だ...とても犯罪組織と考えにくかった...メンバーは全国各地に存在する...！」

男性刑事は、課長が用意した資料を興味深く閲覧していた。

「...例の下田武宏という男は、どういう立場の人間なんですか？」

課長は目を閉じて、取り調べした頃を思い出しているようであった。

「...逮捕した組織メンバーを取調べすると、必ず出てくる名だ...下田は主犯格の一人だった、奴がほとんどメンバーに指示していると言っていた...顔を知っている数少ない仲間から情報を入手したんだが、偶然にも、彼は別件の事件でマークしていた...聞くところによると、奴は大規模なテロを計画していたようだ...」

「...それはどういった？」

「密輸で手に入れた銃火器で、一般市民を無差別に大量虐殺するつもりだったらしい...！一見聞くと馬鹿げていることだが...」

「...組織のメンバーは全国に居るんですよね？実行されたら防ぎようがありませんよ！」

「ああ、もし実行されていれば、この国は終わっていたかもしれない...他にもライフライン、情報媒体を麻痺させるテロも実行に移そうとしていた...IT社会が繁栄し始めた頃だ...当時では最先端の犯罪といえる...」

「確かに今と雰囲気が違いますね.....彼と接触したんですか？」

男性刑事は、当時の下田と現在の写真を見比べて、資料を見ながら課長に質問を続けた。

「...メンバーを餌に誘い込んで、確保するつもりだった...しかし、彼は指定された場所に現れなかった...勘付かれたのか、行方は分からず煙のように消えた...奴は、無差別に三人の人間を銃殺している...組織は壊滅したが、結局、奴が何者か分からず、このまま未解決になると思ったが、神は我々にチャンスくれたようだ...顔や名前を変えても忘れられない男だ...」

「...何故、僕に下田のことを話したんですか？」

疑問に思う男性刑事に対し、課長は本題に入ろうとした。

「...一つ頼みたいことがある...これは極秘捜査だ...下田が何故、柚里浜に行ったか調べて来てほしい...意味もなく行ったとは考えられない...そこで死んだというのも何か引っ掛かる...すぐに現場に向かってくれ」

「...僕が柚里浜に？」

「ああ、今のところ頼れる者が居なくてね、現場は観光地だ...宿泊して来てもいい」

「派遣されるのは僕だけですか？」

「...そのつもりだが、心細いなら人員を増やしてやってもいいが...」

「...実は、他に抱えている仕事がありまして...現場に長く居られないかもしれませんが、僕より優秀な人材を送りますよ」

「それは楽しみだ、後のことは任せる、捜査結果を心待ちにしているからな...」

死亡した古谷の正体が明らかになり、彼の死がきっかけで、さらなる事実が解き明かされようとしていた。

リカは、自然と事件の渦に入り、真相に辿り着こうとしていたのであった。

柚里浜 美楽荘 宿泊二日目

小鳥のさえずりが聴こえ、清々しい朝であったが、リカはまだ布団で寝転がっていた。しばらくすると、リカの部屋に一つの人影が近づいていき、気づけば、その人影は、彼女の布団の前であった。

「バザ！！」

その時、謎の人影は、勢いよく眠っているリカに覆いかぶさった。

「...んにゃ？何？」

リカは奇襲を受けて錯乱状態であった。

「.....起きて下さ〜い！朝ご飯ですよ〜！」

襲撃者の声を聴くと、可愛らしい子供の声であった。リカは、軽く襲撃者の体を払いのけて、顔を確認しようとした。

「.....あれ？伶亜ちゃん...もう起きたの？」

「うん、お腹空いたよ〜茉緒お姉ちゃんが朝ご飯の準備出来たって〜」

「...分かった、すぐ行く...」

リカは、元気に振る舞う伶亜の姿を見て、啞然としていた。

「...お早う、リカ」

「お早う〜...伶亜ちゃん、元気になったみたいだね...」

リカは、朝食を運ぶ茉緒と顔を合わし、早速、伶亜のことを訊ねた。

「そうなのよ、朝早く起きて遊び回っていたわ...全く子供っていうのはよく分からないわね...」

「良かったね、病気とかじゃなくて」

「...まあね、でも何で元気がなかったのか話してくれないのよ...誤魔化してばかり...」

「...私が訊いてみようか？」

「...え？いいの？あんた今日も潜るんでしょう？」

「今日はやめとくわ、まだ日にちはあるし...伶亜ちゃんの遊び相手になってあげるわ」

「...本当に悪いわね、なかなか落ち着く暇がなくて彼女の相手出来ないのよ...それじゃあ頼むわ、放っておくと何するか分からないし、遊び相手がいなくて寂しいだろうから...」

「任せといてよ！」

茉緒は、親友の心遣いに対し、安心した様子であった。リカは朝食を取ろうと広間に向かった。

「おお、伶亜ちゃん、今日はよく食べるね～昨日と大違いね」

「もう腹減った、腹減ったって五月蠅くて...もっと上品に食べな...あと、お姉ちゃんに謝りな、さんざん迷惑掛けて...」

「.....もぐ...お姉ちゃん、ごめんなさい」

伶亜は、頬にご飯粒をつけながらリカに謝った。

「別に気にしてないからいいよ、でも元気がなくて心配してたんだよ～」

リカは、大好物の納豆をかき混ぜながら伶亜と会話を続けた。二人は、自然と打ち解けていったのであった。

「...お姉ちゃん、今日は海に潜るの？」

「...えっと、今日は止めようと思っているんだけど...私が海に潜っていること、茉緒お姉ちゃんから聞いたの？」

「うん、お姉ちゃん、ここの海、好きなの？」

「好きよ、伶亜ちゃんより小さい頃から遊びに来ててね...海もそうだけど、この町に来ただけで何か落ち着くの...」

「ふーん、私も好きよ、探検ごっこしてるの」

「探検ごっこ？」

「町の色んな場所を歩いて、風景撮ったりしてるの」

「...ああ～確かカメラにはまっているんだったね～なんか楽しそう、お姉ちゃんもついて行っていい？」

「...別にいいよ、仲間が増えた方が楽しいし...」

「じゃあ決まりだね、今日は伶亜ちゃんと遊ぶことにするよ」

「...ご飯食べ終わったら玄関で待ち合わせということで～」

「了解～了解～」

「.....あら、なんだか楽しそうね」

その時、リカたちの前に祥子が姿を現した。

「お早うございます、スケジュールの打ち合わせをしまして...ねえ伶亜ちゃん...あれ？」

リカが伶亜のいる方に振り向くと、いつの間にか彼女の姿はなかった。

「...完食してるわね、結局、昨日はどうしたのかしら？」

「...さあ、子供ってよく分からないですよ～」

「リカさん、ご飯お代わり、どう？まだたくさんあるから」

「ありがとうございます」

リカは、祥子にご飯を装ってもらい、朝食を堪能していた。

「.....」

その時、祥子は、何故か思い詰めた顔をしていたが、理由は分からなかった。

リカは朝食後、自分の部屋に戻って浴衣からラフな服装に着替え、飲み物やお菓子が入っ

たりュックを背負い、約束通り、待ち合わせ場所の受付ロビーへと向かった。伶亜は、ロビーの椅子に座っており、そこには女将の沙耶が居た。

「リカちゃん、悪いわね...なかなかこの娘の相手が出来ないのよ」

「いいですよ、こっちは暇なんですから、それじゃあ伶亜ちゃん行こうか」

「...あっよかったらこれ食べて...山登りするって聞いたから...休憩の時にでも...」

沙耶は、リカたちに手作りのおにぎりと冷たい麦茶が入った魔法瓶を渡した。

「ありがとうございます、行ってきます」

リカは伶亜と手をつなぎ、旅館を出ようとした。沙耶は安心して、にこやかに二人を見送った。

「.....」

その時、沙耶の他に陰でリカたちを見送る者がいたが、その人物は、密かに何か企んでいる様子であった。

同じ頃、柚里浜の警察署に、はるばる東京から二人の刑事が訪ねて来た。一人は古谷（下田）の件で捜査している男性刑事で、もう一人は眼鏡をかけた物静かな女性刑事であった。二人は署内の空いた大部屋に連れられ、地元刑事たちに事情を話そうとした。

「...つまり古谷と偽名を使っていたこの男は、とんでもない大犯罪者だったというわけですね...?」

「ええ、転落したのは間違いなく下田という男です、出来れば我々の手で彼を発見したかったと、上司が嘆いていました...」

「...わざわざ報告して頂きありがとうございます、こっちも困っていたところですが、身元を証明する物は全て偽造された物で、遺族の連絡先も分からないものですから...」

「...彼の遺体は、何処に？」

「...検死後、署内で保管しています、遺体引き取り人がいない場合、こちらで処理しようかと思

うのですが...」

「...その件なのですが、彼の遺体は、我々が引き取ろうかと思えます...」

「...え？警視庁がですか？」

「ええ、上司から伝えるよう言われまして、責任もって引き取ります...特に問題ないでしょう？」

「...ええまあ、助かります、彼はこの土地の人間ではないので...ではお任せして大丈夫なんですかね？」

「ええ、ただちに手配しますので...」

「...お気遣い感謝するが、とても遺体を引き取りに来ただけとは思えんな...何が狙いだ？」

一人の地元ベテラン刑事が、警視庁の刑事たちを疑いの目で見ている。

「...そう睨まないで下さいよ、あなた方の仕事の邪魔はしませんよ...ただ...」

「...ただ？」

「...下田の死因が気になります...崖から転落したとのことですが...」

「それが目当てか...情報を得るために厄介ごとを引き取るわけだな...」

「ええ、交換条件というところですが、彼の生きざまに興味がありますから...」

「...成程、いいだろう、捜査状況を教えよう...おい、捜査資料を持って来い」

ベテラン刑事は部下に捜査資料を持って来るよう指示して、男性刑事たちに現状を明かした。

「...彼の遺体は、裏山の崖下で発見された、二十メートルの高さから転落したのは間違いない...」

「...事故...为什么呢？」

「...一見、事故に見えるが不可解な点が見つかった...これを見てほしい」

男性刑事たちは、遺体発見現場の写真を見せられた。それは何とも惨い姿であった。

「...ふむ、頭が完全に割れていますね...不可解な点とは？」

「発見時、遺体は仰向けに倒れていた...普通はうつ伏せに倒れるはずだろ...わざわざ後を向いて落下したとは考えにくい...自殺したとしても相当変わっている...そうは思わんか？」

「...ええ、他に不審な点は？」

「頭に受けた怪我についてだ...仰向けで転落したのなら、後頭部の損傷が激しいはず...しかし、前頭部にも深い傷口があった...これは何を意味するのか...」

「...！」

「前頭部の怪我は一点ではなく、まばらだった、とても転落時にできた怪我とは思えない...何か鈍器のような物で叩き付けられたと考えられる...」

「...つまり、下田は誰かに襲われたと？」

「ああ、計画的犯行だと言える、現場にはビールの空き缶が数本捨てられていた、ガイシャが飲んだものとされる...恐らくアルコールで神経を鈍らせて、足を滑らせたように見せかけようとしたんだろう...」

「成程、いくら力の強い男性でも、酔っぱらっていれば体の自由が奪われ、襲いやすくなる...転落死させることは容易いことだ...これは他殺ですね...！」

「ああ、改めて他殺の線で捜査を始めている...今、ガイシャが立ち寄った場所で聞き込みしているところだ...さて、かなり情報を提供したつもりだが...どうするつもりだ？」

「...ただ訊いてみただけですよ、興味があるのは下田のみですから、犯人捜索に加担する気はありませんのでご心配なく...」

「当然だ、いくら警視庁のキャリアでも、仕事を横取りされるわけにはいかない...たとえガイシャが犯罪者であろうと、誰かに殺害されたのならそいつを追い続ける...所轄には所轄のやり方があるからな...一緒に仕事する気はない...」

「そうですか、よく分かりました、情報を提供して頂き感謝します...」

「...こちらこそ色々とお気遣い感謝する...もう用がなければ、お引き取り願おうか...我々も忙しい...」

「...そうですね、長々とお邪魔してすみません...それでは失礼します」

室内に険悪な空気が漂い、男性刑事は、直ちに相棒の女性刑事と退室しようとした。彼らが退室すると、張り詰めた雰囲気が消えつつあった。

「随分あっさりと引き下がりましたね」

「...どうだかな、公安部の人間は何を企んでいるか分からん...注意を怠るな...」

ベテラン刑事は、訪ねて来た公安刑事たちを忌み嫌い、恐れているようであった。

警察署を後にした公安刑事たちは、専用の車で帰ると思われたが、車はなかなか発進しようとしなかった。二人は、車内で何か重要な会話をしているようであった。

「随分と嫌われたものだな...所轄との仲は、捜査一課に居た時の方がよかったような気がする...」

「...はじめから合同捜査なんて頭になかったでしょう？公安は単独で行動することが多いんだから...」

「...ああ、一応、極秘捜査だからな、所轄とは探っている物が違う...下田を殺した犯人が居るのなら、所轄に逮捕させればいい.....ただ...犯人がもし例の犯罪組織と関係があれば話は別だ...残党が下田と接触し、何かトラブルがあったかもしれない...」

「...組織が完全に解散したとは言い切れない...また動き出されると厄介ってわけね...?」

「そういうことだ、何か起こった後では遅いからな...そのために我々が居るんだ」

「...それで私は何をすれば？」

「まず、下田が宿泊していた旅館に行ってくれ、この町で何をしていたのか、本当に一人で行動

していたのか、所轄にばれないよう徹底的に調べてほしい、捜査方法はそっちに任す...」

「...何日か泊まりになるかもしれないわ」

「別に構わない...費用はこっちが持つ...そっちの本業の都合があるから、なるべく早く解決させることを心掛けてくれ...こっちも時間が空けば、組織について調べてみる、どんな些細なことも報告するように...」

「...了解」

男性刑事は、相棒の女性刑事に捜査資料のコピーと旅館のパンフレットを渡して別れようとした。女性は車内から出て、颯爽と旅館の方へと向かおうとした。

「...さて、少し温泉で休養してから空気の悪い職場に帰還するか...」

男性刑事はぼやいた後、寄り道しようと中心街に車を走らせた。

一方、リカは、伶亜の遊び相手となり、彼女の後をついて行った。向かった場所は、人気のない裏山であった。

「...ふう～もう十五分くらい歩いていると思うけど...こんな所よく歩けるね...車もあんまり走っていないし...一人だと危ないよ...」

「大丈夫、大丈夫、もう慣れてるから、山の中の探検は楽しいよ～」

「あらそう～まあいい運動なるわ～」

リカは、首に巻いたタオルで汗を拭きながら険しい坂道を歩き、疲れ知らずの伶亜に先導されていた。

リカたちが山中に入ると、涼しい空気が流れて、さっきまでのうだるような暑さをあまり感じなくなった。

「へえ～こんな場所があったとはね...山の方って行かないから...虫が多いし...歩きにくいし...」

「虫刺されのお薬付けとけば大丈夫だよ～さ～探検開始～♪」

ぶつぶつとぼやくリカに対し、伶亜は実に頼もしかった。二人は、静寂な森の中を散策し始めた。人の手が届かない茂った森は、神秘的であったが何処か不気味さも漂っていた。

「...！」

せっせと山道を進んで行くリカたちであったが、しばらくして、一步一步進む度に、さっきまで軽快に歩いていた伶亜の様子が一変し、ついに立ち止まった。道は二つに分かれていた。

「...どうしたの？」

リカが伶亜の異変に気づき、彼女の視線を辿るとその先には崖があった。

「...お姉ちゃん、ここは危ないよ...」

「?...危ない？ どういうこと？」

伶亜は若干、声が震えて、何かに怯えている様子であった。リカは、半歩ずつ崖がある道を進んで行った。近辺はどうも物々しい感じであった。崖下を見ると、立ち入り禁止と書かれた黄色いテープが貼られ、囲われている状態であった。

「...お姉ちゃん！」

「...！」

その時、リカたちの前に人影が現れた。

「...ちょっと、そこで何してるんですか？」

リカに大声で声を掛けたのは、一人の警官であった。

「...え？ ここ何かあるんですか？」

「あなた新聞読んだり、ニュース観たりしないのか？ 昨日、ここで転落事故があったんだよ...崖付近には近づかないことだ...」

「...ああ、そういえば泊まっている旅館の客が亡くなったって言ってたね...現場ってここだったのか...」

「...若い女性に女の子一人...こんな人気がない場所に何しに来たんだ？」

「...ちょっと山の中を散歩しようと思って...この先、通っちゃ駄目ですか？」

「...まあ特に怪しくなさそうだしいいけど...気を付けるんだよ、被害者は殺された可能性があるみたいだから...殺人犯が潜んでいるかもしれない...」

「え...？」

リカは、見張りの警察官にそっと耳打ちされて、極秘情報を知ることとなった。彼女は目が点になり、侘垂も怯えたままであった。

「...とにかくあまり彷徨かないことだ、暗くならないうちに帰るんだ...」

「...分かりました、ありがとうございます、注意します...」

リカたちは、警官に見送られて先を進んだ。リカは、この裏山に足を踏み入れたことで、ある真実に辿り着くのであった。

一方、警視庁公安部から派遣された女性刑事は、美楽荘へと訪れた。その時の女性刑事は眼鏡を外し、ラフな服装をして、観光客を装っていた。受付ロビーには女将の沙耶がいて対応していた。

「...いらっしやいませ」

「あの...すみません、お聞きしたいことがありまして...」

「...はい、どういったことでしょうか？」

すると、女性刑事は沙耶に顔を寄せて、小声で用件を話そうとした。

「...実は私、東京から派遣された刑事でして...昨日起きた転落死事件のことでやって来ました...」

「...え、でも聴取はもう済んだので話すことはないですよ...」

「...勿論、分かってます、これは独自でしていることとして、地元の刑事は私が来たことを知りません...協力して頂けないでしょうか？」

「協力というと？」

「...しばらくここに泊めてもらえませんか？調べたいことがあって、町を探索したいんです...部屋が空いてなければ別の宿に行きますが...」

沙耶は、女性刑事の頼みに思い悩んで、答えを出すことに時間が掛かった。

「.....部屋が一応、一部屋空いているんですが、問題がありまして...」

「それはどういった？」

「.....例の転落事故で亡くなった宿泊客の部屋なんです...」

「成程、別にそこで構いませんよ」

「え...！でもなんか気持ち悪くないですか？綺麗に掃除はしてありますが...」

「別に気になりませんよ、部屋で亡くなったわけじゃないからいいじゃないですか...警察関係者とかまだ居るんですか？」

「...いえ、昨夜に部屋の中を調べて、被害者の荷物を受け取って引き揚げました...もう来ないと思います...」

「では決まりですね、泊まらせてもらいますよ」

「.....仕方ありませんね、負けましたよ」

沙耶は女性刑事に押され、部屋へと案内しようとした。ここでも一つ、怪しげな影が潜っており、二人の会話を盗み聞きしていた。これでまた、さらに事態は変化しつつあった。

それから数時間経ち、リカたちは、山を登り続けて目的地に到達した。そこは見晴らしのいい絶好の場所であった。

「うわ～町全体がよく見える、あら、美楽荘も見えるね～いい場所知ってるね～伶亜ちゃ...！」

「……………」

伶亜はリカ言葉に反応せず、ずっと暗い表情を浮かべていた。魂が抜けたようで、どう見ても伶亜の様子がおかしかった。リカは彼女のことが気になり、問い詰めようとした。

「さっきまで元気だったのにやっぱりおかしいよ…伶亜ちゃん、何か隠してるね？お姉ちゃんに話してみなよ…」

「……………」

伶亜はリカの質問に対し、首を左右に振った。それでもリカは諦めず、伶亜を問い詰めた。

「……確か警察の人と会った山道で、ここは危ないよって言ってたよね？何であんなこと言ったの？」

リカは、徐々に口調をきつくして、伶亜の口を開かそうとした。

「……………グス」

その時、リカのきつい口調で追い詰められ、伶亜は鼻が詰まり、涙が溢れそうになっていた。リカはもう一息だと察知して、優しい口調で伶亜に話し掛けようとした。

「…いい場所案内してくれたから、お礼に相談乗ってあげるよ！安心して話してみてよ…すっきりするよ」

伶亜はリカに説得され、表情が少し和らいだかのように思えた。そして、彼女はリュックからある物を取り出した。

「…それって」

伶亜が取り出したのは、愛用しているデジタルカメラであった。彼女は、カメラの電源を入れてリカに画面を見せた。

「お姉ちゃん、これ見て」

伶亜がリカに見せたのは写真ではなく、動画であった。画面には昨日の裏山の様子が映し出さ

れており、それは見覚えのある場所であった。

「...ここってさっきの崖があった場所じゃない.....!!!」

その時、リカは、衝撃的な映像を目にすることとなった。

「.....お姉ちゃん...?」

映像を観た瞬間、リカは全身鳥肌が立ち、しばらく体が固まったままであった。そして、やっと体の硬直が解けて、リカは、伶亜に話し掛けようとした。

「...これ、他の人に観せた...?」

「ううん、まだお姉ちゃんにしか観せてないよ...」

「...そう、よかった、じゃあ昨日何があったか話してくれる?」

「...うん、話す!」

伶亜は、安堵の表情でリカにあることを証言した。これにより、忌まわしき事件が解決の方向に進もうとしていた。

それからさらに時間が経ち、いつものように夕日が柚里浜を赤く染めていた。リカたちは裏山探検を終えて、ゆっくりとした足取りで旅館へと戻った。

「あ～山もいいもんだね～よかったよ～」

「明日も行こうよ～川で泳ぎたい～!」

「いいね、川で泳ぐのも悪くない、行こう、行こう～♪」

リカたちは次の予定を立てて、すこぶる機嫌がよかった。喋りながらロビーに戻るとそこには茉緒が居た。

「随分楽しそうね、伶亜、遊んでもらってよかったわね～」

「裏観光スポットを教えてもらってね...いい一日を過ごせたわ」

「それはよかった、こっちも助かったわ、お母...女将も喜んでた...汗びっしょりね、お風呂はどうする？」

「...どうせ、今いっぱい入ってるんでしょう、また落ち着いてから入るわ...」

「侘垂はどうするの？」

「私もお姉ちゃんが入る～！」

「...あらあら、すっかり仲良くなったのね、焼き餅焼いちやうかも～」

リカは、夕食の時間まで一服しようと自分の部屋に戻ろうとした。

「...！」

その時、リカは、宿泊客の一人である女性刑事とすれ違った。どうやら彼女はその女性刑事を知っているようであった。二人は突然のことで、啞然としていた。

「あら、もしかしてリカ？こんな所で会うとはね...奇遇ね」

「...先輩！何でこの旅館に？」

「ちょっと事情があつてね...あなたなら話していいかも...私の部屋でお茶しない？」

「...はあ」

女性刑事の正体は、大手歌劇団員兼警視庁公安部密偵を務めるノリコであった。当時の歌劇団トップスターでリカの尊敬する先輩の一人である。

リカは、突然のノリコの誘いで、話し相手をする事となった。

「.....そう、あなたはここの常連だったのね...私が居ると休んだ気にならないわね」

「いえいえ...そんなことはないですよ！これも何かの縁かと...旅行で来られたわけではないんですね？」

リカが質問すると、ノリコの表情が一変して、部屋の外に人がいないか確かめた。

「.....仕事でね、とはいっても裏の仕事...あなたも公安の件は知っているでしょう？」

リカはノリコの質問を耳にすると、若干顔が強張り、ゆっくりと口を開いた。

「.....ええ、一ヶ月ほど前に理事長に呼ばれて、警察関係者の人と話しました...夏休みが終われば、正式に公安部の密偵に任命されるようです...はっきり言ってまだ実感がないんですが...」

「...そりゃそうよ、私も最初どうしていいか分からなかったもの...まあ徐々に慣れていったらいいわ、歌劇団の方も忙しくなるから大変だと思うけど...」

「はい...頑張りますけど...それでどういった仕事の内容なんですか？」

「...極秘任務だけど、リカならいいわ、この旅館に宿泊しているなら知っているでしょう？昨日、この部屋を予約した古谷という男性客が転落死した...その件よ」

「成程、そうですか...」

「せっかくの休暇なのに嫌な思いしたわね...」

「.....彼を殺害した犯人を捜しているんですか？」

「え？」

ノリコはリカの発言に対し、疑問を抱いていた。

「...彼は、何故殺されたんでしょうか？」

「...ちょっと待って！どうして彼が殺されたってことを.....！」

ノリコは、リカの衝撃の発言に驚愕して、つい、声のボリュームが大きくなった。彼女は、ひとまず気持ちを落ち着かせようとした。

「.....警察は事故として捜査しているんでしょうか？」

「...一応、殺人と事故の両面で捜査しているわ.....どうして彼が殺されたことを知っているの？」

まだ公の場で発表されていないはず...何処で情報を得たか話しなさい...！」

ノリコは、真剣な眼差しでリカに問い掛けた。

「...実は私、犯人を知っています...！」

リカのこの一言で、古谷（下田）死亡事件は、急速に解決されようとしていた。リカとノリコは、お互いの有力な情報を交換して、ある行動に移ろうとした。

夕食時間になると、リカたちは広間で一緒に食事をするが、リカとノリコは、お互い他人の振りをして一切話すことはなかった。リカはずっと伶亜の相手をしていた。

「お姉ちゃん、いつまでここに居るの？」

「明後日までかな、伶亜ちゃんはまだ居るでしょう？」

「うん、一週間は居るよ～」

「いいな、お姉ちゃんは仕事が忙しくて、なかなか休みが取れないんだよ～」

「ふ～ん、大人って大変なんだね～」

リカと伶亜は完全に打ち解けていて、その様子を見て、ノリコは、くすくすと笑っていた。

しばらくして、リカと伶亜は、食事を終えて広間を後にした。リカは去る瞬間、さりげなくノリコとアイコンタクトを取った。

ノリコはあることを目論み、リカたちが居なくなってから自分の部屋に戻った。

リカは、伶亜と共に露天風呂へと向かった。この日も利用客が少ない時間を狙っていた。

「お姉ちゃん、背中流してあげるね～」

「ありがとう、洗っこしようよ」

リカたちは、風呂場で溜めこんだ疲れを取ろうとしたが、同じ頃、旅館内である事件が起ころうとした。

外出中で宿泊客が居ない部屋、一つの不審な気配がそこに迫り、マスターキーを手に無断で入室しようとした。

「.....」

侵入者はある目的で忍び込み、すぐ行動に移った。侵入者は、必死に宿泊客の荷物を物色し始めた。

それから時間が経ち、リカは伶亜を連れて部屋に戻ってきた。

「...今日もお姉ちゃんの部屋で寝ていい？」

「いいよ、でも布団もう一式用意しないとね...茉緒か誰かに頼まないと.....！」

リカが部屋の灯りを点けると、すぐに体が凍りついた。部屋の中は、何者かに荒らされていた。

「...お姉ちゃん、この部屋、泥棒が入ったの？」

「...どうやらそのようね、金目の物はないんだけどね...財布持って行つといてよかったね...」

リカたちは何か盗られていないか、入念に調べた後、茉緒に知らせた。リカは、茉緒を呼んで広縁で話そうとした。伶亜は、居間でテレビを観ていた。

「.....全く昨日と今日と物騒ね...呪われてるのかな...？うちの旅館...」

茉緒は部屋に着いた途端、深く溜め息をついていた。

「何も盗られていないから別にいいわ、たちの悪い客ならクレームつけるでしょうが...」

「こっちも妙なことがあってね、マスターキーが紛失したの...昨夜のことがあったからまたあの娘の仕業かと思ったんだけど...」

「...ほとんど私と一緒に居たからね、もうマスターキーを盗む必要ないでしょう？」

「...ええ、しばらくしたら鍵は元の場所に戻ってたわ...ひとまず安心したけど、何か気味が悪いわ...」

「ええ、悪い夢なら醒めてほしいけど.....侘垂ちゃん、またこの部屋で寝たいそうよ」

「目的は、部屋じゃなくてあなたでしょ...夏休みのいい思い出になりそうね.....布団持ってきたから...敷いてあげようか？」

「いいわ、自分たちでやる...明日も遊ぶ約束しているからもう寝ないと...」

「...私も今日忙しかったから疲れたわ、お休み～侘垂、お姉ちゃんに迷惑掛けるんじゃないよ...！」

茉緒は肩の荷が下り、休息を取ろうとリカの部屋を後にした。

「...さてそろそろ寝ようか...」

夜も更けていき、リカたちは安心して寢床に就いた。

一方、別室にいるノリコは、深夜まで専用のパソコンの画面に釘付けとなり、作業を終えた後、適当に睡眠をとった。

そして、時間が経つにつれ、空は明るくなり、朝日が昇り、運命の時が刻々と迫ろうとしていた。

過去からの逃亡

柚里浜 美楽荘 宿泊三日目

リカが宿泊してからいい天気が続き、その日も雲一つない快晴であった。リカと伶亜は、規則正しく起きて、用意された朝食でエネルギー補給していた。伶亜は、常人以上の速さで口の中におかずを放り込み、リカは、大好物の納豆を温かいご飯にかけて掻っ込んでいた。仕上げにお茶を啜った二人は、立ち上がって出かける準備に取り掛かった。

「伶亜ちゃん、水着持ってんの？」

「うん、スクール水着じゃなくてお洒落なやつ買ってもらったの～もう中に着てる」

「ああそうなんだ、私も海に潜る時の着てるし、すぐに泳げるね、それじゃあ行こうか」

「リカちゃん、二日続けて悪いわね...」

昨日と同じように、沙耶がロビーでリカたちを見送ろうとしていた。

「いえいえ、妹が出来たみたいで楽しいです、今日は川で一緒に遊ぼうかと思ひまして...責任もって面倒を見ますので...」

「リカちゃんはしっかりしているから安心出来るわ...それじゃあお願いします」

沙耶は、昼食の弁当をリカたちに渡して持ち場へと戻った。リカたちは、裏山にある川に向かった。

ここしばらく天候が安定しているため、川の流れはなだらかで、安全に泳げる環境であった。水は澄んでいて、川魚が多く生息しており、釣りを楽しむ者が現れる。しかし、リカたちが来た時間は誰もおらず、貸切状態となった。

「あまり奥に行かないように...勝手に行動したら駄目よ」

「了解しました...！」

伶亜はリカに敬礼し、素直に従おうとした。リカたちは、安全を考慮して思い存分水を浴びた。川のせせらぎが心地よく、まさに平和な時間であった。

同じ頃、密偵として派遣されたノリコは、部屋に閉じこもって、誰かと連絡を取っていた。その相手とは指示を出した公安部の男性刑事であった。ノリコは、警視庁に居る彼から有力な情報を手に入れようとしていた。

「...下田の組織について詳しく調べてみた...組織の名が分かった...名は`レリック、...下田が`我々は時代遅れの過去の遺物だ、と自虐ネタを呟いたことから決まったそうだ...」

「名前なんてどうだっていいわ...他に分かったことは...?」

「...彼とつながりがある人物、組織のメンバーについて調べた...当初、直接会わず命令されたり、洗脳された者がほとんどだったが、一人、親交が深い人物が挙がった...下田は人前で話すことをあまりせず、メンバーには代わりの者をよこすそうさ...ナンバー2ということだ...」

「それは興味深いわね...!」

ノリコがそうと言うと、彼女のパソコンにメールが一通届いた。それは男性刑事からであった。

「これは?」

「開けてみれば分かるさ...とっておきだ」

ノリコは、恐る恐る送られたメールを開封しようとした。中身を確認すると、画像が添付されており、ある人物が写っていた。

「...この女性が彼の右腕?」

「...部下というより恋人だといえる、彼女のことを心底愛していたようだ...彼女もまた彼を愛して両思いだった.....!」

男性刑事がとっておきのネタを公開する中、ノリコはあることに気づいたようであった。

「.....待って、この女性、何処かで見たことあるかも...!」

「...何?それは本当か?」

男性刑事は驚きが隠せず、ノリコの返答を心待ちにした。

「私もこっちで情報を色々と入手してね...彼が何故、この町に訪れたか謎が解けそうよ...これで線が一本につながった」

「...断言出来るのか？」

「ええ...思ったより早く片付きそうだわ」

「よほど自信ありのようだが、すぐに証明出来るのか？」

「明日の朝まで待ってもらえる？今夜、結果が出ると思うから...」

男性刑事は、ノリコの自信ありげな態度に驚愕していた。

「.....よし、任せることにしよう、期待して待っているぞ...」

男性刑事は電話を切り、一服しようと喫煙室に向かおうとした。

「...さて、仕事も大体片付いたし、ゆっくり風呂にでも浸かって来ようかな～」

ノリコは、体を休ませようとタオル片手に露天風呂へと向かおうとした。

やがて昼の時間となり、沙耶が作った弁当を食べて、お腹の中を満たしたりカと伶亜は、再び川で遊ぼうとした。しかし、時間が経つにつれ、観光客や釣り客が増えていき、賑やかになって貸切状態とはいかなかった。リカたちは、常連の釣り客と仲良くなり、釣りを教わろうとしていた。こうして、平穏な時間が流れているわけだが、それを恨めしそうな顔でそっと覗いている者がいた。謎の人影は、茂みから息を殺してリカたちを監視している様子であった。気づくと人影は姿を消していた。

時間が流れていき、日が暮れていき、遊び疲れたりカたちは、ぼちぼち引き揚げようとした。

「楽しかったね、お姉ちゃん～」

「そうだね、またいい思い出になったよ、子供の時の夏休みを思い出しちゃったよ～」

リカたちは、満面の笑みで旅館へと帰って行った。一方、旅館の玄関前には茉緒が居て、帰っ

てきたリカたちに気づいて迎えた。伶亜は、先に旅館の中へ入っていた。

「お帰り～充分満喫したようね、本当にあんた泳ぐの好きだよ～明日、チェックアウトする前にも潜りに行くんでしょ？」

「ええ、勿論よ...今年は特に楽しかったわ、伶亜ちゃんのお蔭かな～」

「助かったよ、一人で遊ばせるの可哀そうだから...あなた居なくなったら寂しがるでしょうね...」

「まあまた会えるよ、今度三人でどっか遊びに行こうよ～」

「いいね、歌劇団の劇場も行ってみたいし...舞台に立ってる姿見たら、驚くんじゃない？」

「...彼女を驚かすために頑張らないとね」

リカは、笑いながら軽く頭を搔いて部屋へと戻った。

しばらくして、リカは伶亜と和やかに談話しながら最後の夕食を取っていた。

「お姉ちゃんって歌劇団の人なんだね～」

「そうよ、まだチョイ役ばかりだけどね...興味ある？」

「うん、はっきり知らないけど...うちのお母さん結構詳しいよ、子供の時からファンで、昔のスターさんの写真いっぱい持ってた、私も一緒に観に行ってたよ、結構面白いね～」

「へえ、やっぱり女性は憧れるんだね～」

「ねえお姉ちゃん、いつトップスターになれるの？」

「え?...そんなの分かんないよ...簡単になれるもんじゃないから...努力しないとね...はは」

「大変なんだね～お姉ちゃんがトップスターになったら絶対見に行くからね！」

「ありがとう、ところで伶亜ちゃん、舞台に立つこととか興味ない？スタイルいいし...きっと似合うと思うよ」

リカは期待して伶亜の返事を待ったが、それは裏切られようとしていた。

「.....私、将来やりたいお仕事決まってるの...」

伶亜は申し訳なさそうにリカに答えた。

「...へえ、そうなんだ、もう将来について考えてるんだ、偉いね、何の仕事したいか教えてよ〜！」

「...フォトグラファー」

「...え？」

「...写真を撮るお仕事よ！」

「ああ、最近、横文字の職業多いから...だからカメラが好きなのね！」

「...一度、歌劇団目指そうと思ってバレエとか習ってたけど、飽きてすぐ辞めたの...それでお母さんと喧嘩になって諦めたの」

「成程、好きにならないと辛くなるからね...それで他にやりたいことを見つけたってことか...」

「...お姉ちゃんはどうして今のお仕事を？」

「.....他にやりたい仕事が無かったからかな？だから何の迷いもなく真剣に取り組めた...伶亜ちゃんくらいの時は何にも考えてなかったし...立派だと思うよ、絶対夢叶うよ！」

リカは伶亜を称え、伶亜は照れて頬が赤くなった。

「フォトグラファーになったらお姉ちゃん撮りに行くからね〜」

「うん、楽しみにして待ってるよ〜...さて食べようか、早く食べないと、茉緒お姉ちゃんに怒鳴られる〜」

リカたちが夕食をしている中、旅館の従業員も仕事が落ち着いたようであった。

「.....客の数が減ったから結構楽ね...皆に自分の仕事が片付いたら上がってもらおうように言って...あんたももう休みなさい、二人のことは見とくから...」

「...そう、じゃあそうさせてもらうわ」

茉緒は、母の言葉に甘えてその場を去っていた。沙耶は娘が去った後、深く溜め息をついて、リカたちの様子をそっと覗いていた。その夜、何事もなく静かだった。リカと伶亜はしばし休憩した後、露天風呂に入ろうと準備して部屋を後にした。

「...！」

リカたちは脱衣場の方へと入ろうとするが、リカだけ怪しい気配を察知していた。彼女は気づいていない振りをして、伶亜とそのまま脱衣所に入って行った。

謎の人影は中の様子を窺い、リカたちが風呂場に入ってから脱衣場に忍び込もうとしていた。忍び込んで何をするかと思えば、脱衣籠に目が留まって物色し始めた。

「.....そこで何やってるんですか？」

「...！！！」

その時、背後から女性の声が聞こえて、我を忘れていた謎の人影は背筋が凍った。

声の主はリカであった。謎の人影は、焦りながらゆっくりとリカがいる方向に振り向いた。

「仲居さんが泥棒の真似事ですか？」

脱衣籠を漁っていた犯人は、仲居の祥子であった。祥子は落ち着かない様子であったが、リカは予想していたようで落ち着いているようであった。

「あら、ごめんなさい...ちょっと掃除しようと思って...」

「下手な嘘ですね...脱衣籠を漁ろうとしていたんでしょう？標的は伶亜ちゃんの所持品...！」

「変な言いがかりは止めて！どうして私が伶亜ちゃんの所持品を漁らないといけないの？」

「往生際が悪いですね...ここでは話しにくいので場所を変えましょうか...」

「え...でも、中に伶亜ちゃんが...」

「それはご心配なく、ちゃんと代わりの保護者が中に居るので...さあ行きましょうか」

風呂場には、仕事を終えた茉緒が待機しており、伶亜の面倒を見ていた。祥子は、素直にリカについて行こうとした。

リカたちは風呂場を後にして、ある宿泊部屋に向かった。祥子は、その部屋に近づくとつれ、顔色が悪くなっていった。

「...ここは」

「この部屋に何かあるんですか？」

リカは、わざとらしく祥子に質問し、部屋の扉を開けた。

「どうも今晚は...」

室内では、ノリコが待ち構えていた。

「なぜ私をここに？」

リカとノリコは祥子を囲み、本題に入ろうとしていた。

「...この部屋、私が使う前は裏山で転落死した古谷という男性が使っていたそうですね...部屋に足を踏み入れたあなたの顔は、強張って尋常ではなかった...言い逃れは出来ませんよ...」

「何のことを言ってるの？」

「まだとぼけますか？では言いますよ、古谷を殺したのはあなただ...！」

ノリコは、自信を持って祥子に告げた。リカは、それを黙って見ていた。

「...何を言うかと思えば...あなたはただの宿泊客でしょう？探偵にでもなったつもり...？」

祥子はノリコの裏の顔を知らず、まだ余裕の表情を浮かべていた。

「...すみません、申し遅れました...私、東京から派遣された警察関係者の人間でして...極秘捜査でやって参りました...」

「...極秘捜査？リカさんはどうして居るの？」

「.....彼女は私の先輩でして...ある事情で捜査に協力することになったんです...私は例の転落死事件のことについて何も知らなかったんですが、事件解決に導く物を手に入れました...」

リカがそう言うと、ノリコは自分の鞆からあるものを取り出した。それは伶亜が愛用しているデジタルカメラであった。祥子はカメラを見ると、余裕がなくなった様子であった。

「あなたは、このカメラの中に挿入されているSDカードが欲しくて、さっき脱衣場に忍び込んだんですよね...？」

「...それは.....」

「このSDカード...喉から手が出るほど欲しいはずです...昨夜、リカたちの部屋に忍び込みましたよね？」

「...何を馬鹿な...！証拠はあるの？」

祥子は動揺しつつ、ノリコに反論した。

「...証拠はありますよ」

「え？」

すると、ノリコは専用のパソコンに触れて、祥子に画面が見えるよう近づけた。

「こちらをご覧ください」

パソコン画面にある映像が映っていた。それは美楽荘の宿泊部屋の一室で、リカの宿泊部屋の様であった。最初の方はリカたちが映っていたが、しばらくすると居なくなり、部屋は真っ暗になった。ノリコは一旦、映像を止めた。

「...これって？」

「...リカの部屋に小型カメラを仕掛けさせてもらいました...勿論、リカや旅館の方の許可を取ってあります...この時間、リカは伶亜ちゃんとお風呂に行っています...しかし、暗くなった数分後、部屋の灯りが点きます...リカたちが戻って来たかと思われましたが、それは違った...」

「.....！」

ノリコは再生ボタンを押し、祥子に続きを見せた。彼女は、この先に映る人物を知っていて、息が詰まりそうであった。

「...今、映っている人物は、あなたですね...？」

祥子は、ノリコに責められて青ざめた。

「祥子さん、全てお見通しですよ...本当に残念です...」

リカは背後から祥子の肩を軽く叩き、表情を曇らせた。

「...聞くとところによると、マスターキーが二日続けて紛失したそうですね...最初の犯人は、伶亜ちゃん...そして、次が祥子さん...あなたってことでよろしいですね？旅館関係者ならマスターキーを盗み出すのは容易ですからね...」

「.....やられたわ、カメラは何処を探してもなかった...休憩時間にあなたたちが居る川まで行ったのに...伶亜ちゃんはカメラを持っていなかった...あなたが持っていたのね？」

祥子は悔しさを滲ませて、ノリコに訊ねた。

「...ええ、リカが伶亜ちゃんを説得して預かり、私の手に渡りました...確認後、地元の警察署に証拠品として提出しました...」

「...見事な連携プレイね...あのSDカードが手中にあれば、どうにかなったのに...」

ノリコは、問題のデータをコピーしたDVDディスクをパソコンにセットし、落ち着きだした祥子に問題の映像を観せようとした。

映り始めは引きの風景の画面で、編集で要らない部分はほとんどカットされ、徐々にズームされていき、崖上で揉み合っている二人の男女が映っていた。ここもまた編集されているため、それは鮮明に映っていた。よって、すぐに祥子と古谷（下田）だということが分かった。そして、

惨劇を目にすることとなった。崖上から古谷（下田）が人形のように落下していき、その時の断末魔の叫びは、しばらくの時間、耳に残るものであった。古谷（下田）が落下した直後、崖上から祥子の姿が見えて、小岩を崖下に投げ捨てた。

それから映像が切り替わり、古谷（下田）が転落した現場付近が映し出された。数分後、一つの人影がそこに現れ、その正体は祥子であった。彼女は、急いで転落現場に駆けつけ、何やら作業を行っていた。

その後、作業を終えた祥子であったが、何かを感じ取って勢いよく振り向いた。その時の祥子は、鬼の形相で睨み付けていて、ぴったりカメラ目線であった。これで物陰に隠れて撮影していた伶亜が気づかれたことが分かった。映像はそこで終わった。

「...まさに衝撃的な映像です、サスペンスドラマ以上の迫力が伝わってくる...伶亜ちゃんは、恐怖に震えたことでしょう...」

「ええ、必死に逃げて行ったわ.....あの娘、リカさんに打ち明けたの？」

「...はい、あまりにも様子がおかしかったですから...一晩寝て落ち着いたようですが、遺体発見現場の近くに行くと、あの惨劇の記憶が甦るみたいで...あなたの変わり果てた姿が纏わりついて来る...全て打ち明けてくれた時、彼女はほっとした顔をしていました...ようやく悪夢から解放されたようでした...」

「...そう、嫌な思いをさせてしまったわね...あなたにも」

祥子は罪悪感を覚え始め、声に張りがなかった。ノリコは、そこから容赦なく話を続けようとした。

「...決め手となる証拠は、伶亜ちゃんの撮ったこの動画ですが、他にもあるんです...亡くなった数時間前、古谷（下田）は、中心街の飲食店に居たと目撃情報があります...店主の話では彼一人ではなかった...ラフな服装で深く帽子を被っていた人物と食事していたと言っていました...その人物はあなたですね...祥子さん？」

「...はい、休憩時間に彼と会いました...」

祥子は、素直に頷いて答えた。

「...古谷（下田）は、店内でビールや日本酒を大量に飲み、変装したあなたは、何も注文せず、じっと座っていた...店を出た後、あなたたちは何処に行ったのか...街中の聞き込みで、有力な情報を入手することは出来ませんでした...そんな時、また別の場所から情報を得ました...女将や

従業員たちは、薄々気づいていましたよ...」

「え？」

祥子は、ノリコの発言にぎょっとした。

「...茉緒が言ってました、私を迎えに行こうと乗車した時、アクセルやブレーキ部分が砂まみれになっていたと...あと床にビールがこぼれていて、おまけに禁煙車のはずなのに、ヤニ臭さが残っていた...不振がっていましたよ...それとお風呂をご一緒した時、膝を怪我されてましたよね？今思うと、それは崖で揉み合った時に負った怪我ではないですか？」

リカは、祥子の傍に行って、茉緒の証言を述べた。

「...その日、送迎車を運転したのは、女将と茉緒ちゃんだけのはずでしたが、実はもう一人居た...運転したのはあなたですね？一緒に古谷（下田）が乗っていた...」

「はい、おっしゃる通りです」

ノリコは、真剣な眼差しで祥子に問い詰め、当然の如く彼女は白状した。ノリコは、車内の様子が映った写真を取り出して、祥子に見せた。

車内についていた土は、裏山の土だった。最初、水分を含んでいて泥に近かったようで、前日まで大量の雨が降ったため、完全に乾いていなかったとされる。

「裏山まで歩けない距離じゃないですが、かなり時間が掛かりますからね...車だと時間短縮出来る...裏山に行った理由は後で話すとして、まず殺害方法です...あなたは崖まで彼を誘いだし、不意を突いて殺そうとした...実際見てないので分かりませんが...想像絶するものだったみたいですね.....話せますか？」

ノリコは、祥子から事細かに殺害方法を聴き出そうとした。祥子は、素直に答えようとした。

「...刑事さんが言った通り、私は隙を狙って古谷（下田）を殺そうとしました...しかし、なかなか上手くいかず抵抗されて、しばらく揉み合いが続きました...彼が酔っていなかったら私が殺されていたかもしれません...」

「...彼は、異常なほどお酒が好きだったようですね...酔って足がふらついていれば、女性のあなたでも殺害が可能...彼の前頭部に何ヶ所も深い傷がありました...叩きつけられたような跡が...転落した時の怪我じゃない...あなたは、岩の欠片で彼の頭を叩き付けた...さっきの映像に狂気の岩

を下に落としているところが映ってました...彼は、それが原因で力尽きて滑り落ちた...そうですね?」

「...はい、それで私は無駄だと分かっていたながら、事故死に見せかけようと偽造工作を...その時、伶亜ちゃんの気配に気づいたわけです」

「よく話してくれましたね、地元刑事たちが外で待っています、続きは地元の署で.....と言いたいところですが...まだあなたを渡すわけにはいかない...リカ悪いけど...」

その時、リカは静かに退室して、二人きりにした。

「...え?あの...」

祥子は、ノリコの思いがけない発言に戸惑っていた。

「私は極秘捜査でやって来たと言いました...本来の目的は被害者の古谷...本名、下田武宏...彼が何故この町に来たのかを調べる事...祥子さん、あなたは彼と親密な関係だったのでは?」

ノリコがそう問いただすと、祥子は静かに頷いて、古谷(下田)との関係を話そうとした。

「...はい、彼とは恋人同士でした...もうだいぶ前に別れましたが...」

「成程.....これは確認のためにお聞きしますが、あなたはレリックという犯罪組織に属していたのでは...?主犯格は下田ですよ?」

「...はい、おっしゃる通りです、私も犯罪組織の一員とされていましたが...彼と別れるのと同時に脱退しました...」

「...下田と再会した日のことを詳しく話していただけますか?」

祥子は躊躇せず、ノリコに真相を話そうとした。

「.....あの日は衝撃の一日でした、彼は...下田は、突然私の前に現れたんです...整形していても彼と目が合った瞬間、すぐに分かり、正常では居られないほど驚きました、彼は私を諦めきれず、執念で探し出したんです...」

「まずお聞きしたい...何故、あなたは組織の一員となったんですか?」

「.....私は下田の裏の顔になかなか気づきませんでした...付き合いだした頃、彼の印象は良くて優しい男性でした...でも付き合い時間が経つにつれ、彼の様子が変わっていったんです...」

「...どういう風に？」

「...口調に冷たさを感じ、あまり話さなくなりました...そして、ある日突然、彼は私にお遣いを頼みました...用意した封筒を待ち合わせしている人物に渡して来てほしいと...」

「封筒の中身は、何が入っていたんですか？」

「後から分かったんですが、それは組織に関する資料や多額のお金でした...私はいつの間にか組織の人間として扱われていたんです...！」

「あなたは、組織でどういった役割を？」

「...主に連絡係を...彼の指示通りにメールや電話でメンバーと連絡を取ったりして...後は雑用を...」

「自ら犯罪に手を染めたことは？」

「...それは一切ありません！」

ノリコは、祥子の目をじっと見て信じようとして、次の質問をしようとした。

「...何故、すぐに組織から抜け出さそうとしなかったんですか？」

「...彼に魅かれて逆らおうとしませんでした...もう操り人形の状態で、洗脳に近かったかもしれません...」

「...脱退したきっかけは？」

「.....メンバーが次々と捕まった時です...下田もさすがに焦っていました...彼は様々な凶悪犯罪に手を出していましたから...私は、やっと危機感を覚えて逃げるようにして、彼のもとから去って行きました」

「...再会した彼とどうして裏山に行ったんですか？」

「...彼が大事な話があるから、人気のない場所に行きたいと言ったので。裏山を選びました...」

「...下田はどういう話をしていたんですか？」

「.....組織についてです...そろそろ再結成したいと言っていました...彼は新たな野望を抱いていたようです、それでまた私に戻って来てほしいと...」

「あなたの答えは？」

「勿論、断りました...それでも彼はしつこくて...」

「新たな野望とは？」

「...日本国家を恐怖のどん底に陥れる計画です...私に事細かに説明していて...その時の彼の表情は、無邪気な子供のようにでした...内容話した方がいいですか？」

「...いえ、ここで話す必要はありません...質問を変えます...今回の殺害方法は計画的だと思える...あなたは始めから下田を殺そうと考えていたんですか？」

「.....はい、彼と目が合った瞬間、昔の嫌な記憶が甦り、恐怖に怯えるのと同時に殺意が芽生えました...彼は邪魔で仕方がなかった...！」

祥子は感情が高ぶり、下田を殺害した時のような怖い表情となった。

「...成程、分かりました...これであなたの罪状がはっきりしました...あなたは下田の殺害容疑でしか逮捕されません...」

「...え？それはどういう？」

祥子はノリコの発言が理解出来ず、返す言葉が見つからなかった。

「今までの話の流れで、下田が強制的にあなたを組織のメンバーにしたということが分かりました...もし、自分の意思で組織のメンバーになったのなら話は別ですが...再逮捕され、いつ外の世界に出れるか分かりません...それは困るでしょう？」

「...ええ、まあ...でもいいんですか？勝手に決めちゃって...」

「...ええ、大丈夫ですよ、地元警察には組織のことを伏せていますし、あなたが下田と親密な関係だったことは、私を含め、限られた人間しか知りませんのでご安心を...」

「...あなたは本当に警察の人なの？」

祥子は、疑いの目でノリコをじっと見ていた。

「そう睨まないで下さい～特殊な部署にいまして...説明すると長くなります...悪いようにはしないので安心して下さい.....条件を満たせば罪は少し軽くなります」

「...条件とは？」

「...あなたは組織のメンバーの中で一番、下田と親しい仲でしょう...彼がどういう野望を抱いていたか興味があるんでね...組織について洗いざらい教えてもらいたいんだけど...」

「...本当にそれで私が組織に居たことをなかったことに？」

「...約束します、ただし、下田を殺害した件は償ってもらいますよ...」

「ええ、それは覚悟しています、あなたを信じて牢獄生活を耐え抜いてみせます...」

「...では私の言う通りにして下さい」

ノリコと祥子の密談が続き、それからしばらくして話し声が聴こえなくなり、ゆっくりと扉が開いた。祥子は姿を現し、その時の彼女の表情を確認すると、蟠りがなくすっきりとしたようであった。

廊下には、リカの他に沙耶が立っており、祥子は啞然としていた。

「.....女将...！」

「.....バシン！！」

その時、沙耶は真っ直ぐ祥子がいる方に向かい、平手打ちを浴びせた。その行為は、怒りと同時に悲しみも込められていた。

「.....私が気づいていないとでも思った？娘でさえ気づいていたんだから...どうして相談してくれなかったの？」

「...そんなこと...出来るわけないじゃないですか...迷惑を掛けたくなかったんです...」

「...何言ってるの...取り返しのつかないことをしてしまったのよ...あなたのやり方は許せない...！」

「...すみません、旅館の名に傷をつけてしまいました...私のことは忘れて下さい...」

「.....お生憎様、うちはそう簡単に評判は落ちないわ...！もっと繁盛させてみせる...！あなたを待ちながら...」

「...え？」

その時、祥子は、沙耶の言ったことで自分の耳を疑った。

「...私はあまり頭が良くないけど、人を見る目はある方よ...あなたは悪人じゃない...臆病なだけよ...過去の嫌なことを忘れて、もし、戻って来る気があるなら観劇するわよ...」

「...女将さん」

祥子は、沙耶の思いがけない言葉に衝撃を受けて、涙を大量に流した。沙耶は、そんな祥子をそっと抱き締めた。

「...いいのよ、ずっと待つてあげるから...リカちゃんとも仲良くなったようね...」

「...ええ、茉緒ちゃんは、本当に素晴らしいお友達をお持ちで...あなたにも嫌な思いさせたわね...」

「...いえ、短い間でしたが楽しかったです...私も待つてるので...」

「...ありがとう、あなたが居る劇場に足を運びたかったけど、だいぶ先になりそうね」

「...まだ下っ端なので頑張ります...生意気ですが、大役を果たせるように...」

「ふふ、応援しているわ、しばらくお別れね.....」

その時、祥子はリカに対して、何か言いたげな表情を浮かべた。

「どうしました？」

「.....悪いんだけどお願いしたいことが.....茉緒ちゃんと伶亜ちゃんにごめんね...と伝えて下さい...」

「...分かりました」

「.....それじゃあ行きましょうか」

祥子はノリコと共に刑事たちが待機している場所へと向かった。刑事たちは、覆面パトカーの中で待機していた。

「...おっ来たか」

ベテラン刑事がノリコたちに気づき、車内から出て、二人を出迎えた。

「お待たせしました、約束通り連れてきましたよ」

「...情報提供、感謝しますよ、彼女だと睨んでいたが、徹底的な証拠がなくてね...御嬢さんのお蔭で解決しました...探偵業をされているとか...」

「...ええ、プライベートでここに来たんですが...」

「...そうですか、偶然とはいえ、とんでもない証拠でしたね...驚いたでしょ？」

「...ええ、あんなもの、そう見れるものじゃありませんよ.....それでは私はこれで.....！」

ノリコは、祥子を警察に引き渡して、その場を去ろうとしていたが、ベテラン刑事は、まだ彼女を見ていた。

「...あの、すみません、あなたと会うの、これで二度目になりますが、それより以前に会ったような気がするんですよ...」

「...へえ、こっちは記憶にないんですが...」

「そうですか、知っている誰かと似ていたのかな？...どうも呼び止めてすみません...それでは失礼します...」

ベテラン刑事は納得して、車内に引っ込み、車を発進させた。ノリコは、正体がばれなかった
ので、ほっとしていた。

こうして、ひとまず忌まわしい事件は解決し、静寂な夜が続いた。

やがて、夜明けとなり新しい一日が始まり、その日、リカは朝食を済ませた後、すぐに海に
向かった。彼女は午前中、ずっとスキューバダイビングを楽しもうとした。同じ頃、侘垂は夏休
みの宿題に手をつけていた。

時間はあっという間に過ぎていき、リカは名残惜しそうな顔でチェックアウトを済ませた。

「...今年もお世話になりました」

「...いえ、こちらこそ、また来年ね...」

「...もし、休暇が取れたら冬にも来ようと思います...」

「あら、そう...楽しみに待ってるわ」

「...リカ、駅前まで車で送るよ、侘垂もついて来るって...」

「そう、ありがとう！」

リカは、茉緒が運転する送迎車に乗り込み、車内から見送る従業員たちに手を振って別れを告
げた。

「...なんかここ数日あったこと、夢みたいに思えるわ、そう思わない？」

茉緒は、運転しながらリカに問いかけた。

「...そうだね、もう何が何だか...楽しいこともあったから良かったけど...」

「嵐みたいだったわ、仕事は死ぬほど忙しかったし...夏も終わり...しばらく落ち着くだろう

けど...」

「...充電出来たし、これでまた戦場に戻ることになるわ」

「まあ無理しない程度に頑張っよ、観に行っよやるからさ〜」

「うん、期待してて」

「.....ああ、そういえば、例のリゾート地開発計画...ひとまず延期になりそうよ...」

「ええ！そうなんだ、良かったじゃん！」

「やっぱり神様はよく分かってるわね〜」

車内にいる三人は、気分よく駅前に着くまで雑談していた。

一方、柚里浜駅前、ロータリーに一台の車が停まっていた。車内にいるのは、ノリコと相棒の男性刑事であった。二人はクーラーを効かせ、祥子の件で話し合っている様子であった。

「.....もう彼女は覚悟を決めていたようだな...」

「ええ、彼女の部屋を調べると、犯行時に履いていた運動靴が出てきたわ、その時、着ていた服も...なぜか処分されていなかった...」

「...しかし、犯行現場が映ったSDカードを盗もうとしていたんだらう？証拠隠滅の行為は確認されているわけだから...」

「...証拠隠滅を企てていたなら、もっとちゃんとしているはずでしょう？雑な面が多すぎるわ、突然思い立ったことだから、パニックになったのは間違いないわ...下田を消すことに無我夢中になって、消した後、緊張が和らいだんだと思う...」

「よっぽど過去から逃げたかったんだな、それに対し、下田は過去を取り戻そうとした...なんとも釣り合わない関係だ...それで彼女とは上手く打ち合わせしたのか？」

「...ええ、手筈通りに...下田にしつこく迫られ、無理やり裏山に連れて行かれ、性的暴行を加えられそうになり、必死に抵抗した挙げ句、いつの間にか殺してしまっていた...これでいいでしょう？」

「ああ...それでいい、嘘も方便ってやつだ」

ノリコたちは、祥子に嘘の自供をさせようとしていた。

「...彼女は地方の刑務所に入所する...服役中、文通相手になってもらうんでしょ？それで組織の情報を得るわけね...」

「...ああ、彼女は重要参考人でもある、これで組織を完全に壊滅させることが出来る...悪の芽を絶やさなければいけない...」

「そうね、かなりいい仕事したでしょう？」

「そうだな、予想以上に早く解決したんで驚いている...助力してくれた人物には感謝しているよ...約束通り、情報提供者の名は明かさなくていい...」

「...感謝するわ」

しばらくノリコと男性刑事が話していると、前方に一台のワンボックスカーが停車した。それは美楽荘の送迎車であった。中からはぞろぞろトリカ、茉緒、伶亜が出てきた。ノリコはリカと目を合わさず、知らない振りをしていた。

「...とにかく早く片付いてよかった...あんたも本業で忙しくなるからな...家まで送る間、ゆっくり寝ていてくれ...」

「ええ、そうさせてもらうわ、安藤さん」

ノリコはお言葉に甘えて、座席を後方に傾斜させて眠りに就こうとしていた。

そして、何を隠そう男性刑事の正体は、リカの相棒となる、若かりし頃の安藤ユウであった。安藤は、リカと組む前にノリコとコンビを組んでいたのがあった。リカと安藤がお互いのことを知るのには、まだ先のことであった。安藤たちは、心置きなく柚里浜を後にした。

リカは、列車が来るまで茉緒たちと話を続けていた。

「伶亜ちゃんと遊んだりして楽しかったよ～山も好きになりそう～」

「この娘、海が苦手みたいなの、ちょっと深い所行くと、酷く嫌がるのよ～」

「...海だって楽しいのに今度、一緒に海に潜ろうよ～伶亜ちゃん」

「...う...うん」

伶亜は、少しためらって返事をした。

「...それにしても伶亜ちゃん、最初に会った時と比べると、少し大人になったんじゃない？」

「そうね～確かにこの娘、少し落ち着いたかな？」

「成長したよ～ここ数日で成長したんじゃない？」

「...だといいいけど、そろそろしっかりしてもらわないとね...」

「...まだ旅館に居るんでしょ？お姉ちゃんやおぼさんを助けてあげてね...」

「...うん、分かった」

「...本当に分かってんの？」

三人が居る待合室は、和やかな空気に包まれているが、列車の到着時刻が迫り、リカはホームに向かおうとした。見送りに来たノリコたちは力強く、リカに手を振って別れを告げた。リカもまた、ノリコたちが見えなくなるまでずっと手を振っていた。

それから数分後、リカを乗せた列車は、発車し、柚里浜の海の風景が窓越しに現れた。天気にも恵まれて絶景であるが、リカは景色を見ずに、うとうととしていた。午前中のスキューバで疲れたのか、彼女はそのまま眠ってしまった。

やがて、列車はトンネルに入り、リカは闇に包まれた。そして、時は現在に戻る。リカは長い夢から醒めようとしていた。

「あ～よく寝た～二度寝は気持ちいいね～っていうかもう昼じゃん～あつ～クーラー一点けよ～」

リカは身を引き締めて、だらしない生活を改めようとしていた。うっとうしい夏が終われば、彼女の最初で最後のディナーショーが開かれる予定である。

二〇xx年、兵庫県を拠点にしている歌劇団にある異変が起こっていた。歌劇団には、大劇場の他に若手の登竜門とされる小劇場があり、それを利用した大きな計画が実行されようとしていた。

歌劇団は現在、五班のチームに分かれてそれぞれの班の特性を活かした公演を行っている。一世紀近くの伝統を誇る歌劇団は、転換期を迎えることとなり、若手劇団員中心を活躍させる場を設けようとしていた。それは制作側である演出家にとっても同じことであった。

計画が進められる中、歌劇団上層部は、今までにない作品をファンに見せようと、各班で成長している若手スターを選出した。また、今回の公演作品は独特で芝居はもとより、ショーに力を注ぎ、新鮮味や活力が溢れる作品にしてもらおうと若手演出家に任せた。

各班を代表して、五人の若手劇団員が選ばれ、順次、計画された作品が上演されることになった。選ばれた若手劇団員メンバーの中にはリカも含まれていて、彼女は主演に抜擢されていた。彼女が主演を務める公演期間は、その年の初夏と決まり、歌劇団人生で忘れられない夏を迎えることとなった。

こうして、リカにとって重要な時期が訪れるわけだが、彼女は表と裏の世界を行き来する人間であり、とある重大事件に巻き込まれようとしていた。

二〇xx年 六月某日、その日は激しい雨が降り続いていた。閑静な住宅街に堂々とそびえ立つタワーマンションがあった。

「…………ブオ」

時間は真夜中、マンション専用駐車場に一台のフォルクスワーゲン・パサートヴァリアントが駐車された。マンションの住人である男性は、駐車場フロアを出て、一階ロビーで郵便物を確認した後、エレベーターへと乗り込んだ。

「…ガッ！！」

その時、男性住人がエレベーターの扉を閉めようとした時、無理矢理こじ開ける者が現れた。男性住人は仕事の疲れで気がなかったが、突然のことで意識がはつきりとしたようであった。

「…………」

突如乱入してきた謎の人物は、男の住人に挨拶もせず、黙って降りる階数のボタンを押して後

方に下がった。謎の人物の服装は全身黒でまとめられ、ずっと歩いて来たのか、傘を使わずレインコートで雨を凌いでいたようであった。また、何故か濡れたレインコートを脱がず、フードも深く被ったままであった。恐る恐る顔を見ようとするが、フードを被っているうえにサングラスやマスクを着用しているため、顔は完全に隠れていた。彼は、独特の怪しい空気を漂わせていた。

「……………！！」

男性住人は謎の人物が住人ではないと感じ取り、冷や汗が止まらなかった。こうして、気まずい空気のまま、時間を過ぎていくのであった。

「……………」

まもなく男性住人が住んでいる階数に到着しようとして、彼は何も起きないことを願った。しかし、それは叶いそうになかった。

「…バチン！」

その時であった。突如、男性住人たちが居るエレベーター内は暗闇に包まれて停止した。

「…え…あれ？」

男性住人は突然のトラブルで錯乱状態であったが、謎の人物は何故か冷静であった。

「…チャ」

さらに予期せぬ事態が起ころうとして、男性住人はそれに気づくことはなかった。

「…パシュ、パシュ…パシュ！」

その時、暗闇に包まれたエレベーター内で、かすかに閃光が見えて同時に物音がした。その途端、謎の住人は人形のように倒れていった。

「…バチン！」

それから数分後、エレベーター内の灯りが点き作動し始めた。エレベーター内を見ると、男性住人は倒れ込んだままの状態で大量の血を流していた。彼はそれから起き上がることはなかった。

謎の人物は何事もなかったかのようにして、適当な階で降りた。彼はエレベーターを降りた後、すぐに非常口に向かって地上へと戻って行った。

「……………」

男性住人が謎の住人に殺害されたことを知る者は居ないと思われたが、一人居るようであった。その人物は一部始終を見ていたようで、しばらく不敵な笑みを浮かべていた。

場所は変わって、神戸港周辺倉庫。

激しい雨が血を叩き付ける中、倉庫エリアにはベンツ数台とバン一台が停まり、車内から強面で屈強な男がわんさかと姿を現した。彼らは使用されていない大型倉庫を占領して何かを始めようとした。

「…そのまま前に進め！」

強面の男たちの他に一人、頭には黒い布袋を被され、手には拘束具をつけられた者が居た。その人物は、素直に従って倉庫内に入って行った。視界と自由を奪われた拉致被害者は、ただただ怯えて先に進むしかなかった。

「…そこに座れ」

強面の男の一人は、拉致被害者を倉庫内に置かれていた古いパイプ椅子に無理矢理座らせた。そして、その直後、拉致被害者の頭に被せられた黒い布袋を脱がした。

「……………！」

拉致被害者の顔を確認すると、誠実そうな青年であった。

「…どうだ、外の空気は美味いだろう？」

「……………」

強面の男の一人は、青年の顔をじっと見て話し掛けたが、彼は無反応で口を開かなかった。

「…まだそうやって吐かないつもりか？こそこそうちの組織のことを嗅ぎまわっているのは分かっているんだぞ…」

また一人、男が青年の前に現れて、彼を脅した。どうやら強面の男たちは暴力団組織の人間のようで、青年は潜入して、組織のことを探っているようであった。結果、彼はスパイだとばれて、正体が暴かれそうになっていた。

「...強情な奴だな、ただの警察の手先じゃないようだが...警察だとしても俺たちは驚かねえよ...
貴様のような若造ならなおさらだ...何者か白状すれば命だけは助けてやる...例え命があったとして
も、何処か体の一部が機能しなくなるかもしれないが...さあどうする？」

「.....」

暴力団組織の非情な発言に対して、青年は表情を変えず、何かを考えつつ沈黙を続けた。

「...そうかい、よく分かった...」

組織幹部の男は、溜め息をついた後、部下二人を呼んで、青年を無理矢理立たせた。

「...ボキボキ」

そこに一人、手をボキボキと鳴らす男が青年の前に現れた。彼は二メートルを超す大男であ
った。青年と大男の身長差は、まさに大人と子供であった。

「...たっぷりと可愛がってやれ」

「...はい、ちょっと触っただけで折れそうな体ですな～」

「...出来ればじわじわと痛めつけてくれたらいい...まだ利用価値があるからな...」

「...分かりました、さて、どうやって料理してやろうか...？」

「.....顔以外なら何処でもいい...」

「ああ？」

その時、突如、青年は口を開き、暴力団組織の人間たちは驚きが隠せなかった。

「...ほほう、やっと答えてくれたか...どうして顔は駄目なんだ？」

組織幹部の男が愛想よく、青年に歩み寄った。

「.....今やってる仕事は、副業みたいなもんでね...顔に傷がつくと本業に影響する」

「...ほう、それは興味深いな、洗いざらい吐いてもらおうぞ」

「...ふん」

青年は、そっぽを向いて覚悟を決めたようであった。大男組員は嬉しそうな顔をしながら青年の前に立った。

「...言われた通り、顔以外を甚振ってやるよ...優男...！」

「.....言うておくが、少しでも顔が傷つけば.....あんた生きて帰れないよ...」

「.....何だと？」

その時の青年の表情は険しく、鬼気迫るものを感じるほどであった。

「何をしている？早くせんか！」

大男組員は、幹部の男に叱咤されたことで我に返り、青年の腹部を殴打しようとした。

「...ボゴ！」

青年が大男組員に殴打されると、鈍い音が鳴り響いて、周りの人間は彼の反応を待った。

「...どうだ、吐く気になったか？」

幹部の男が青年に訊ねようとするが、掛彼は何事もなかったかのような表情を浮かべていた。

「.....あれ？今、殴ったんだ...？気づかなかったよ...」

青年は欠伸をして、暴力団組織の人間を軽く挑発した。

「...痩せ我慢も大概にしろ...！今の置かれた立場を理解していないのか？」

幹部の男は、青年の傲慢さに嫌気がさして、怒りが収まりそうになかった。

「.....はっきり言って全然恐怖を感じないね...何をされても口は割らないよ～」

「言わせておけば！……！ではこれならどうだ？」

幹部の男がそう言うと、大男組員はコルト ガバメント M1911 という銃を素早く抜いた。そして、その銃は青年の頭に突き付けられた。

「…いつでも頭を柘榴みたいにすることが出来るんだぞ」

「…じゃあ、早く撃てばいいじゃないの～頭なら确实だ…」

青年はそう言って、自分の額に手を当てて大男組員を挑発していた。

「……こんな生意気で命知らずの者は初めて会った…拷問の方法はいくらでもある…時間を掛けてその冷静な表情を崩してみせよう……急所以外なら何処を撃ってもいい…やれ！」

大男組員は、幹部の男の命令で青年を狙って得物の引き金を引こうとしていた。

「……………」

青年は危機的状況の中、焦る表情を微塵も見せることはなかった。

「……！」

その時、大男組員以外に銃を触れている者が居て、密かに標的を狙っていた。これから予期せぬことが起こるのは間違いなかった。

「…………ドドン……ンンンンン！！！」

倉庫内で銃声が反響して、その場は静まり返った。ただ、どうも様子がおかしく暴力団組織の人間の顔色が優れなかった。それもそのはずで、彼らは、信じがたい光景を目にしていた。

「な…何が起こった？」

幹部の男は、呆気にとられて頭の中が上手く機能しなかった。現場を確認すると、銃を撃った大男組員が何故か倒れており、青年には全く変化がなかった。これに関しては首を傾げるしかなかった。

「.....あれ？なんかよく分からないけど助かったみたいだね...」

「.....貴様、一体何をした？」

幹部の男が動揺する中、青年に質問を投げ掛けた。

「...別に何もしてないよ、あの木偶の坊が勝手に倒れたんじゃないの？」

「...そんな馬鹿な話.....！」

「...ドドン...ドン...ド...ぐあ...ぎえ...うえ...！！」

青年と幹部の男が会話している途中、急に銃声がして、数人の組員がうめき声を上げながら次々と倒れていった。

「.....今度は何が起こった？次から次へと...！」

「...キン」

その時、地面に落ちた空薬莢を蹴って進む者が現れた。どうやら、その者が組員を倒していったようであった。

「...貴様、うちの者ではないな、何者だ？」

幹部の男が訊ねると、謎の人物は一旦、得物の銃を下ろして彼に近づいて行った。

しかし、謎の人物は、口を一切開こうとしなかった。

「.....もうそっちの負けだよ、茶番は終わりだ...焔矢会（えんやかい）の次期組長さん〜♪」

「...！？」

その時、幹部の男は目が点になった。いつの間にか、青年の拘束具は外されて、周りに居た組員が倒されていた。彼は倒した組員から銃を奪って幹部の男に近づいた。

「...貴様ら、仲間か...？」

「...スパイが複数居るって考えなかった？」

「...くっ、何処までもコケにしやがって！」

「...さて、もうネタが上がっているわけだから言い逃れは出来ないよ...観念してもらおうか...」

立場が逆転して、青年は幹部の男に迫って行った。

「...たかが、二人で何が出来る？片付けば済む話だ...！」

「...片づけられるのはどっちかな？」

幹部の男は青年たちを部下の組員たちで囲み、二人を始末しようとしていた。

「...思い存分撃って、この世から存在を消してしまえ！」

組員たちは幹部の男の命令で、一斉に引き金を引こうとした。

「...ドンドドオドドン...！！」

耳は震えるくらいの銃声が鳴り響き、銃撃戦は長引くと思われたが、決着は意外にと早くつきそうであった。

「.....さて、もうあんたしか居ないけど、どうする？」

気づけば幹部の男一人だけが立っており、組員たちはドミノのように倒れていった。幹部の男は恐怖のあまり、口が震えて上手く喋ることが出来なかった。

「...ほ...本当に...何者なんだ.....？」

「.....知る必要はない.....」

謎の人物がようやく口を開き、その直後、幹部の男にぐろっぐグロック17という銃を向けて容赦なく撃った。

「.....標的が沈黙したため、制圧成功、オールクリアです...」

「.....こちら本部...潜入任務の方、ご苦労であった...予定通り警官隊が駆けつける...もう現地解散で結構だ...」

「...了解しました、それではまた...」

潜入捜査を行っていた二人は、車中で待機していた。青年は、無線で上司に状況報告をして、謎の人物は黙って待っていた。

「...もう帰っていいって？」

「...うん、入手した情報も全部送ったしね」

「ふう、これでやっと解放される...長い三ヶ月だったね～」

「...そうね、表の仕事と重なると、両立させるのが大変だわ...」

潜入捜査をしていた二人についてであるが、その正体は日本警察公安課に属する秘密警察の一員のリカとツバキであった。秘密警察は、暴力団組織 `焰矢会、が香港マフィアとつるんで勢力拡大と同時に、大量殺戮兵器の取引が噂され、リカとツバキに捜査させようと派遣した。

リカたちは、本業である舞台の仕事をする裏で `焰矢会、の内部に潜入して約三ヶ月間捜査を続けていた。捜査方法として、ツバキが囮となって注意を引きつけて、リカがバックアップで一網打尽にするとのことであった。ちなみに `焰矢会、に撃った弾は、麻酔弾であった。

「.....やっぱり殴られる前に動いた方がよかったんじゃない？」

リカは、済ませた仕事に対して指摘しようとした。

「...別にいいじゃない、問題ないと思うけど...」

「私たちの仕事は舞台に立つことよ...！怪我でもすれば支障をきたすわ...」

「.....これもれっきとした仕事よ、今のこと、本気で言ったのなら裏稼業は辞めるべきね...」

「そんな...私はただパートナーのあなたを心配して.....」

「...心配は無用よ、さっきのパンチは痛くも痒くもなかった...鍛え方が違うからね」

「...だからといって、あなたばかり命を削る思いをしている...次の仕事は私が囿になるわ...！」

普段大人しいリカが反論するのは珍しいことであったが、ツバキは彼女の発言に納得していない様子であった。

「...悪いけど、囿は任せられないわ...あなたの弱点は優しさよ...裏稼業では不要なもの...破滅の一途を辿るわ、人は非情にならないといけない時がある...余計な感情を捨てる覚悟をしておいた方がいい...裏の世界で生き抜く場合はね...」

「...私はまだまだ未熟ってこと？」

「そうね、せっかくの素質があるのに退き出せていないと思うわ...本業に関しても同じこと...下手すれば期待している先輩や演出家の先生を裏切ることになるかも...あなた、小劇場公演の主演が決まったんでしょ？かなり頑張らないといけないんじゃない？」

「.....！」

リカはツバキに痛いところを突かれ、反論出来ずにいた。

「...家まで送るわ」

ツバキはリカに気を遣い、そっと声を掛けて車を発進させた。車中はしばらく気まずい空気が流れたが、二人のちょっとした口論が今後起きることに影響することとなった。

こうして、リカたちは表の世界での生活に戻るのであった。

やがて夜明けとなり、激しい雨を降らせた雲は去って行き、朝日が機嫌よく顔を出し始めた。しかし、その日の朝はある場所でおぞましいことが起こり、清々しいとは言えなかった。

その朝、四十四階建てのタワーマンションのエレベーター内で男性の遺体が発見された。兵庫県の所轄刑事や関係者が現場に集結し、遺体に手を合わせた後、捜査が開始された。

「...仏さんの身元は？」

事件の担当している警部は、部下に訊ねた。

「...名前は陣川靖男、年齢は四十三歳、職業はフリーの記者...独身のようで...死因についてですが...至近距離で三発の銃弾を撃たれたとのことです...」

「随分と大胆な犯行だが...このマンションは、セキュリティがしっかりしているようだから誰か犯人の顔を見ているはずだろ？」

すぐに解決出来そうだったと思ったベテラン刑事であったが、部下の暗い表情には特に変化はなく、雲行きが怪しいようであった。

「...今のところ、犯人についての手掛かりはありません...殺害された時間は、深夜の時間帯でロビーのコンシェルジュの勤務時間帯は朝に九時から夜の八時で、昨日は特に怪しい人物を見ていないと...」

「...コンシェルジュが見ていないのであれば、あれに頼るしかないだろう...」

警部は、防犯カメラがある位置に指を差した。それでも部下の表情は変わらなかった。警部は部下にある場所へと案内された。そこは、マンション管理スタッフ専用の部屋であった。

「...ここで防犯カメラの映像を調べてもらっています...」

「...そうか、すみませんが、現場の映像お願い出来ますか？」

警部は、丁重な態度で専門スタッフに頼んだ。

「...はい、ではエレベーター内の映像を流します...！」

刑事たちは防犯カメラの映像に集中し、室内は一時静まり返った。

「...！」

警部は記録された映像を観て、表情が強張っていった。モニターには射殺された陣川が映っており、驚くのはその後であった。

「.....何だ、こいつは？顔が隠れて全く分からない...防犯カメラを警戒しているのが明らかだ...」

「...問題はここからです」

警部は、部下の意味深な発言でつい口がぼかんと開いた。

「.....これは？ どういうことだ？ 途中、映像が映っていない...！ 故障か？」

「...いえ、実はこの時間、落雷の影響で停電になりまして...それで防犯カメラの電源がしばらくの間、切れてしまって...この有り様です...すみません」

「...そうでしたか、何も謝ってもらう必要はありませんよ...このエレベーター内での出来事は突然起きたことだ...この時に殺したということか...」

「...しかし、よく暗闇の中で撃てましたね...撃たれた弾は、全て急所に命中していました」

「...恐らく暗視ゴーグルのような物を掛けていたんだろう...用意周到だな、プロの犯行だ...！」

警部は、犯人がどれだけ恐ろしいかを見抜いていた。

「.....停電が回復した後、犯人は非常口の方へと逃げて行きました...」

「...非常通路にもカメラは仕掛けられているでしょう？」

「...勿論、設置していますが、どうも調子が悪いようで...映像が乱れたりして、はっきり映ってなくて...見失いました...」

「...成程、災難が続きますね...この映像を頂いてもよろしいですか？」

「はい、構いません」

「.....警部、現在、ガイシャの住んでいた部屋を調べているんですが...酷く散らかっていて、何者かに荒らされた可能性が高いそうです...」

「...また問題点が増えたな、何か盗まれたのか...？」

「...金品などはちゃんとあって、特に盗まれた物はないのですが...一つ気になる点があるようで...」

「言ってくれ」

「...パソコンの電源が入ったままだったようで...指紋は殺害された陣川のしか検出されませんでした...どうします？」

「...一応押収してくれ、少しでも気になる物があれば全て押収しろ...殺人犯と同一かもしれない...」

「...分かりました、伝えます」

「...他にお願いしたいことがあるんですが...」

警部は、管理スタッフの一人に歩み寄った。

「どういったことでしょうか？」

「...犯人の情報を得るために協力してほしいのです、近隣住民の聞き込みをしようと思うんですが...」

「全フロアですか？」

「ええ、念のために...陣川氏のことを知っている人がいるかどうかと...犯人らしき怪しい人物を見ていないか確認したいんです...よろしいですか？」

「...まあ捜査のためなら仕方ないですが...私は許可を出す権限がないんです...うちの会社の責任者か...もしくは、ここのオーナーから許可を得ないと...」

「どちらかすぐに連絡取れますか？」

「...生憎、責任者の方は仕事の関係で遠方に行っています...オーナーなら大丈夫かと...」

「ではお願いします」

「...では直接本人に会いに行きましようか？実はお向かいの東塔に住んでいるんですよ...今の時間居るはずですよ」

「そうですか、では我々もご一緒してよろしいですか？」

「どうぞ、案内しますよ」

警察関係者は、タワーマンションのオーナーが居る東塔に向かうこととなった。

「...にしても、ここからの景色はいいですな、周辺が一望出来る」

「ええ、この辺で一番の高さを誇るマンションですから...交通にも便利で安心して住める環境が自慢でしたが...今回のことで非常に残念です」

「.....いくら環境が良くても...いくらセキュリティーが万全でも犯罪は未然に防げるとは限らない...厄介なことです...一番悪いのは犯人だ...必ず捕まえます...」

「...ありがとうございます」

警部は落ち込んでいる管理スタッフを宥めようとした。

「.....」

その時、警部は何か腑に落ちない様子で、若干表情が曇った。

「...オーナーはこの最上階に住んでいます、待っていているようです」

オーナーが住んでいる最上階は一般の住居より広く高級感が漂っていた。

「...平松...昭」

警部はオーナーの表札に目がいき、心当たりがあるようであった。

管理スタッフがチャイムを押すと反応があり、重厚感がある扉が開かれた。中から出てきたのは、二十歳後半の優男で彼がオーナーであった。

「...どうも朝早くすみません、お向かいのマンションで事件がありまして...」

「...知っています、エレベーターで住人が殺されたとか...」

「ええ、犯人は捕まっておらず、解決まで時間が掛かりそうです...そこで協力してもらおうかと...まずはお向かいの西塔だけで構いません、住人の聞き込みの許可を頂きたいんです...」

「...成程、仕方ないことですが...いくら警察でも強引に行う場合、すんなり許可は出ないかも...」

「...それは住人の方々の判断に任せます、警察署に呼んだり致しません、ただ念のためにするだけです...これも仕事ですので...」

平松は腕を組みながら考え込み、結論を出そうとした。

「...いいでしょう、協力しましょう、住人の方々にはこちらからもちゃんと説明しますので...」

「ありがとうございます、助かります.....ところで気になることがあるんですが...」

「...何ですか？」

「あなたの名前です...平松という名字ですが...もしかして平松不動産と関係が...？」

「ええ、そうです、僕は代表取締役会長、平松紘一の息子です...」

「やはりそうでしたか、あの不動産王のご子息ですか、お会い出来て光栄です...あなたがこのオーナーを務めているわけですね...」

「ええまあ、別に大したことはしていませんよ...後を継ぐ気はありませんし...別の仕事で収入を得ています...」

「成程、しかし、いいですね、こんないい部屋に住めて...」

「本当はオーナーになんかなりたくなかったのですが、最上階に住めるということで引き受けることにしました」

「そうですか...ところで早速ですが、事件のことについて色々とお聴きしていいですか？」

「...え？何故です？西塔で殺人事件が起きたんだから関係ないでしょう？...まさか僕を疑っているんですか!？」

「...いえいえ！念のため確認ですよ...最終的には、こちらの塔でも聞き込みさせてもらおうと思っています...昨夜から深夜にかけて、怪しい人物とか見ていませんか？」

「.....見ていませんね」

その時の平松の声は小さく、若干機嫌が悪そうであった。警部たちは平松の部屋を後にして、捜査を続けようとした。

それから数日後、歌劇団大劇場前

大劇場事務所側の周辺には、多くの歌劇団ファンが押し寄せており、それぞれ鼻眞にしている劇団員がやって来るのを待っていた。今日は、リカ率いる公演出演メンバーの集合日であった。続々とメンバーが姿を現す中、主演を務めるリカが颯爽と現れた。彼女は流行りのサングラスを掛けて、澄ました顔でファンの前に現れた。

「...リカさん、お早うございます、お稽古頑張ってください！」

アイドル並みに人気があるリカは、ファンに愛想よく手を振り、事務所の中に入って行った。彼女はエレベーターに乗り込み、稽古場に直行すると思われたが、何故か稽古場がない階数のボタンを押した。

「...ポン」

リカが降りたフロアは人気がなく、ひんやりと冷たい空気が流れていた。彼女は落ち着いた様子で空いている控室に入ろうとした。

「.....！」

リカは控室に入室した途端、目が点になって立ち止まった。

「...お早う、遅かったね」

リカより先に入室していたのは、相棒のツバキであった。

「相変わらずきっちりしているわね、今朝のメール、また仕事ね...裏の...」

「ええ、どんな内容か、一緒に観ましょうよ...」

リカはツバキの隣に座り、机上に置かれていた再生専用DVDプレイヤーの電源を入れようとした。

「...お早う、今回の任務について説明する、数日前、タワーマンションのエレベーターで一人の男性が遺体となって発見された...何者かによって射殺されたと思われる...殺人を犯した者を捜索するなら君たちに頼まない...実は半年前、同じマンションの駐車場で男性の変死体が発見された...その死体は...公安部の捜査員...身内だった、彼はマンションに住んでいる犯罪組織の人間を挙げようと、住人になりすまして潜入捜査を行っていたんだが...何者かに殺されてしまった...犯人は未だに捕まっていない...」

DVDプレイヤーに流れている音声は、加工されており、録音された物なので質疑応答は出来なかった。よって、リカたちはただ集中して聴くしかなかった。

「...気になる点は、何故、彼の正体がばれたかだ...極秘捜査のため、外に情報が漏れることは考えにくい...勿論、内通者も居ない...他に考えられることは、殺害現場のマンションだ...セキュリティが万全の住居のはずが、殺人事件が起こる際、上手く機能していない...これは何かあると思い、マンション管理者が怪しいと踏んでいる...君たちの仕事は、マンションの実態を突き止めることだ...住人になりすまし、裏で何が起きているか事細かに捜査してほしい...任務に関連した資料は机に引き出しに入っている...よく目を通してくれ...何かトラブルが起きた場合、こちらは一切手を貸さない...自分たちで解決するよう心がけてくれ...捜査方法は全てそちらに任せる...なお、この録音された音声は自動的に消去されるので、繰り返し再生するのは不可能だ...報告は以上だ、任務が無事に遂行されることを願っている...それでは...」

謎の報告者の言う通り、録音された音声は消去され、リカたちは担当する事件の資料を手に取り、ひとどおり目を通した。

「...また厄介な件ね」

「...そうね、今まで経験したことと違って特殊だわ...まあ何とかなるでしょう」

「...潜入するマンション、近いわね...大劇場から北東に一キロ足らず...そういえば馬鹿でかい二つの塔が建っているわね」

「...今流行りの高級タワーマンションよ...管理しているのは、大手の陣川不動産の子会社...オーナーは会長、平松紘一の息子ね...何か臭うわ...」

「...まず、そのオーナーから探ってみましょうか、捜査方法はどうする？」

「いつも通りに私が囮になって、黒幕を引きずり出して、あなたが裏方に回って一網打尽に

する...」

「.....」

その時、ツバキの案に対して、リカは頷こうとせず、しばし押し黙っていた。

「...何か言いたそうね...私の作戦に問題が...？」

「.....ええ、今まであなたの言う通りに動いて来たけど...今回ばかりは反論させてもらおうわ...」

「興味深いわね、あなたの案を言ってみて」

「...簡単なことよ、立場が逆になるわけ...私が囿になって、あなたが陰で捜査する...」

「...先日のこと、まだ根に持っているの？あなたにはまだ早いわ...」

「...やってみないと分からないわ、自信はある...絶対に足は引っ張らない...最後のわがままだと思って...お願い...！」

リカは頭を下げて、ツバキに頼み込んだ。

「.....もう分かったわよ、やれるだけやってみなさい...もし、支障をきたすことが起これば、直ちに作戦を変更するわ...」

ツバキは、呆れてリカの案に乗った。

「...ええ、心得ているわ」

「...では、あなたの案を採用するということで、捜査を始めましょうか...今日、主演を務める公演の打ち合わせがあるんでしょう？」

「ええ、そろそろ時間だから行かないと...」

「...私は公演が終わってオフだから、先に仕事を始めるわ...後で落ち合いましょう」

「了解、毎回、表と裏の両立は大変だけど、

やるっきゃないわね」

「そうよ、色々な意味で熱くなりそうね、今年の夏は...」

リカとツバキは一旦別れて、翌日から本格的に捜査を始めようとした。

その日、リカは本業がオフのため、住居を探す客になりすましてマンションの下見に訪れた。手入れされた緑がエントランスを彩り、受付ロビーには気品があるコンシェルジュが出迎えてくれて、実に気持ちのいいものであった。

「.....高級タワーマンションといっても、賃貸ですので一般的な収入があれば問題ありません...安心して生活出来ますよ...」

リカは、案内役を務める女性社員の後をついて行き、マンション内に足を踏み入れた。彼女が案内されたのは、オーナーである平松昭が住んでいる東塔であった。

「...やっぱり広いですね、一人で住むのが勿体ないくらい...」

「そうおっしゃいますが、結構一人で住んでいらっしゃる方多いですよ...住人同士とても仲がいいんですよ...室内は、冷暖房完備でシステムキッチン付きです...どうぞ、案内していきますので...」

リカはベテランの案内役に勧められ、一部屋ずつ確認しようとした。

「...何か壁が少ないように思うんですが」

「そうですね、これは開放感を出すためです...もし、気になれば、リモコン操作で壁を設置出来ます...なので、自分が好きな空間が作れるわけです...」

「へえ、ハイテクですね～」

リカは感心しながら部屋を見て回った。

「...バスルーム...ガラス張りですか...！」

「はい、ここも気になるようならリモコン操作で磨り硝子にすることも可能です...防音加工されているため、大声で歌えますよ～」

リカは案内役の冗談に対して、愛想笑いで返した。彼女たちは最後にベランダの方へ向かった。

「ベランダも広い～見晴らしいですね、ここだと丁度いい高さだし...実にいい～」

リカは両腕を伸ばして満足げな表情を浮かべた。

「...見学は以上となりますが、どうでしょうか...契約されますか？」

「...そうですね、気に入りました、この部屋でお願いします」

「そうですか、ありがとうございます、ところでご職業は何を？」

「...舞台関係の仕事を...」

「...え、舞台？まさか女優さん？」

「...いえ、劇団員ではなく、裏方の仕事です、衣装などを手掛ける仕事を...」

「そうですか、すみません、丁度、近くに歌劇団の劇場があるものですから...それでここを選んだわけですね？」

「ええ、まあ...」

リカは別人になりすまし、捜査対象となる住居に潜入することに成功した。また、相棒であるツバキも密かに動き出し、ある陰謀に直面することとなった。

麗しき血、汚れき血

その日、リカが主演を務める公演の稽古が開始された。彼女は何とも言えないプレッシャーを感じて、ただただ落ち着く暇はなかった。今回の公演は特別で、ベテランや歌劇団の顔であるトップスターはおらず、リカのような注目の若手スターしか出演しないことになっている。制作側も同じことで若手演出家が演出を手掛けることとなる。歌劇団に属する五班のうち、三班の公演が無事に終り、ついにリカが所属している班の番が回って来たのであった。

公演作品のあらすじについてだが、一九四〇年代の第二次世界大戦終結後の日本、一人の男が帰国した。彼は、連合軍情報部員として職務を全うして、敗戦した焼け野原の故郷に帰って来たのであった。

主人公であるその男は、当時アメリカ大使館に勤める外交官でアメリカ人である父と、女優であった母の間に次男として生まれ、兄と共に東京で育った。

日本とアメリカの血が流れる兄弟は日本で青春時代を送っていたが、それもそう長くは続かなかった。第二次世界大戦が勃発し、時代は悪化の一途を辿って行った。主人公は父ともう一つの祖国アメリカへ、兄と母は日本に留まることとなり、そこから人生の歯車が狂い始めた。仲睦まじい兄弟はやがて再会することとなるが、衝撃の事実を知り、絆は崩れようとしていた。戦時中の醜い部分がリアルに描かれたオリジナル作品であり、終戦記念日が近い時期に上演されるため、多方面から注目されていた。なお、小劇場では珍しく、芝居の後、ショーが行われる構成で、伝統がある音楽から当時流行った音楽が流れ、ダンスシーンにも力を入れていた。ファンによるチケット争奪戦が激しくなることは間違いなく、リカ率いる若手劇団員に新たな試練が迫ろうとしていた。

六月某日 兵庫県警

刑事部に属する捜査第一課は、ある事件を追っていた。それは兵庫県の閑静な住宅街にそびえ立つタワーマンションで起きた殺人事件であった。担当する刑事たちは、会議室に集まり、集めた情報を順に報告しようとしていた。

「...それでは現時点の捜査報告を...」

事件の指揮を務める警察上層部の管理官の一声で、一組の担当刑事が立ち上がり、報告しようとした

「...迅速に捜査を続けており、殺害現場となったマンションの住人に聞き込みをしましたが、犯人らしき人物を見たという情報は掴めませんでした...なお、ガイシャと親しい友人、知人なども住んでいませんでした...」

「...そのガイシャの陣川靖男についてですが、職業はフリーの記者でかなり危険な件に足を突っ

込んでいたようです...」

「...と言うと？」

管理官が興味深く、担当刑事に訊ねた。

「主に堅気ではない職業、企業を取材していて、敵対する人間が多かったようです」

「...今回の事件と関係が...？」

「はい、犯人はガイシャに恨みがある者ではないかと捜査を進めています...今のところ、有力な情報は入っていません...」

「...そうか、捜査は続けてくれ...次の報告を...」

管理官がそう言うと、また別の担当刑事が立って報告しようとした。

「...ガイシャが住んでいる部屋を調べまして、中を見ると酷く荒らされていて、稀なる物を押収しました...ガイシャが使用しているパソコンを調べると、取材した件の情報データが保存されていました...膨大な量です...公の場で公開すれば、かなりまずい件も...」

担当刑事が報告していくと、事件に関連した物や場所が巨大モニターに映し出された。

「...それで手掛かりは？」

「...こまめにデータが保存されていたんですが...不審な点が見つかりました...データの一部が削除されていました」

「...それがどうかしたのか？」

「...もし、ガイシャではなく、別の人間が削除したのなら問題です...」

「...成程、何者かにとって都合の悪いデータがあって、それが削除されたということか...そして、殺人まで犯した.....他に情報は？」

また一人、担当刑事が立ち上がって報告しようとした。

「...今回の事件を追っていくうちにあることが発覚しました...殺害現場となったタワーマンショ

ンですが、半年前にも事件が起きていて、マンションの駐車場で男性の変死体が発見されています...身元を調べると公安の捜査員でした...犯人はまだ捕まっておらず未解決のままです...他にも数件、マンション付近で殺人事件や傷害事件が起きていて...どの事件も未解決のままです...」

「...何か気味が悪いな、そのマンションは呪われているのか...犯人が同一犯という可能性は？」

「...高いかと思われ、現在、嚴重な捜査を行っています...」

管理官や上層部の警察関係者は、頭を抱えたり、溜め息をついた後、次の報告を聴こうとした。

「...殺害状況についての報告を...ガイシャは、密室となったエレベーターの中で射殺されたわけですが、犯行直前に停電となったため、肝心の犯人の顔は分かりません...ただ、凶器が判明しました...ガイシャの体内から銃弾が摘出され、それは九ミリ弾...すなわち三八口径で...さらに詳しく言うと、モデルは回転式リボルバータイプ、S & W（スミスアンドウェッソン）M36Jと判明しました.....そこで気になることがあります...」

「...どういったことだ？」

「凶器の銃は、今年から携帯している日本警察専用の銃で...一週間前、神戸市内の所轄署の武器庫から一丁、同じ銃が盗まれました」

「...!!!!」

その時、警察関係者が居る会議室内は、どよめき始めた。

「...それは初耳だな...まだ非公表ということだな...?何処で情報を入手した？」

「調べていくうちに辿り着きました...独自のルートで...」

「独自のルート...ね...まあいいだろう、迅速に解決するためなら手段は問わない...今夜の会見に影響するので、その所轄署の責任者と直接話がしたい...山室君、彼から詳細を訊いといてくれ...私は別件で外出しないといけない...」

「...分かりました、管理官」

管理官は、現場責任者である室山警部に指示をした。

「...もし、殺害に使用された銃と盗まれた銃が一致すれば大問題だ...慎重に捜査することを心がけてほしい...」

管理官は、険しい表情で部下たちに指示をした。これにて、会議は終わりを告げようとしていた。

「.....それじゃあ後のことは任せる...会議が始まる前には帰ってくる...」

「はい、行ってらっしゃいませ...」

室山は、管理官に深々と頭を下げて見送った。刑事たちが会議室から去っていく中、一人、警部に歩み寄る刑事が居た。彼は事件で使用された拳銃について報告した刑事で、名は赤谷陽平、地道に経験を積んでいる若手刑事であった。室山は赤谷を気に入り、彼の活躍を期待して今回の事件の捜査チームに加えた。

「...警部」

「ああ、ここでは話しにくいから場所を変えよう...」

そう言って、彼は使われていない個室へと移った。

「...いいんですか？例の拳銃盗難は元々警部が掴んだネタでしょう？直接話せばよかったのでは？」

「...いいんだ、あの管理官とはどうも馬が合わない...今さら手柄を取ることに興味はないしな...どうせ拳銃盗難の件は隠蔽されるだろう」

「...そんな」

「...色々と事情があるのさ...最近、警察組織内の不祥事が多くてな...都合の悪いことは全てのみ消す...そういった対処はこの先ずっと続くだろう...時代は変わったよ...事件のことより昇進や収入のことしか頭にない警察官が増えている...それでいて悪に染まる者も多い...悲しい現実だ...」

赤谷は、大先輩である室山から日本警察の現状を聞かされ、啞然とするばかりであった。室山は元々、所轄出身であり、その時の経験から現場の刑事の気持ちをよく把握していた。

「それで...これからどうするおつもりですか...？」

「...捜査は続けるさ、ただ、全員同じように動いていては解決出来ない...そこで極秘捜査を行おうと思う...そのためのチームも作った...お前もそのチームの一員だ」

「え？僕もですか？」

「ああ、独断で選ばせてもらった...適性テストなどはなし...早速働いてもらうぞ...デジタルに頼らず足で稼げ...」

「...しかし、いいんですか？ばれたら大変なことになるのでは...？」

「何も心配しなくていい、全て私が責任を取る...どちらにしろ、刑事ドラマのような型破りの捜査は出来ないからな...地道にやっけて行くしかない...」

「そうですか...分かりました、引き受けます...」

室山は、赤谷の快い返事を聞いて、安堵の表情を浮かべた。

「...今回の事件、気になる点はいくつもある...まず、あのマンションで何故、連続して奇妙な殺人事件が起こるのか...犯人は同一犯か...拳銃を盗んだ犯人も突き止める必要がある...何より怪しいのは、マンションの管理会社だ...一緒に現場に行った時のことを覚えているか？」

「...はい」

「...半年前にも管理会社の者と会っている...なのに、顔を合わしてもまるで初対面の人間に会ったかのような対応だった...例の公安刑事変死事件...相当やばい件かもしれんな...徹底的に調べる必要がある...」

室山は、長年の経験と勘でどれだけ危ない道を渡っているかを察知していた。室山と赤谷は、極秘である陰謀に立ち向かうこととなった。

ある夜、何かと問題があるタワーマンションの東塔エントランスに人影が一つあった。その人影の両手には大量の荷物があり、くたくたのようであった。人影の正体はリカであった。その時間、コンシェルジュは待っておらず、受付ロビーのフロアは静けさが漂ってひんやりと空気が冷たかった。

「...！」

リカがマンションに入ると、また後から一人の住人がオートロックの鍵を開けて中に入ろうとした。彼女は後方の気配に気づき、思わず振り向こうとした。

「...あっどうも、こんばんは」

「...こんばんは」

リカに愛想よく挨拶したのは、オーナーの平松昭であった。

「.....見ない顔ですね、新しい入居者さん？」

「...ええ、そうです、引っ越ししてきたばかりで...ここの住人の方ですか？」

「はい、最上階に住んでいます、オーナーをしまして...」

「...ここのオーナーさんですか？凄いです！こんな所で会えるなんて...」

「いえいえ、たいしたことありませんよ、オーナーの平松昭です、よろしく...」

「...〇〇リカです、二十六階に住んでいます、よろしく」

リカは偽名を名乗って、昭に自己紹介した。

「...それにしても随分と多い荷物ですね...仕事の帰りですか？」

「...ええ、そうです」

「...どういった仕事をされているんですか？」

「.....実は近くの大劇場で働いています」

「...え？あの歌劇団の？まさか劇団員？」

「...！いえいえ、裏方の仕事です...舞台の衣装を手がけていて...」

「...そうですか、すみません、綺麗なお嬢さんなので女優さんかと思いましたよ～お世辞じゃな

いですよ！」

「...どうもありがとうございます」

リカは昭の言葉に頬を赤くして、照れているようであった。

「...少し、持ちましょうか？」

「いえ、そんな...大丈夫ですよ、慣れているので...」

「...顔は正直ですよ、かなりお疲れのようだ...少しの間ですが持ちますよ...」

「...すみません、ではお言葉に甘えて...」

昭はエレベーターのボタンを押し、リカの荷物を半分持とうとした。

「...いつもこんなに遅くまで仕事を...？」

「ええまあ、丁度、忙しい時期で...残業が多いですね...」

「...成程、ここのオーナーの他に僕もクリエイティブな仕事をしているので気持ちは分かりますよ.....たいして力になれませんが、何か困ったことがあれば言って下さい...帰りにスーパーに寄るなら駅前止めておいた方がいい...商品が高くて品ぞろえが悪いんでね...そこよりいいスーパー教えますよ」

「そうなんですか、助かります」

リカは昭の軽快なトークに夢中となり、気づけば彼女が住居のフロアであった。

「...部屋の前までお持ちしましょうか？」

「...いえ、大丈夫です、本当にありがとうございました...楽しかったです」

リカは、丁重に礼を述べて昭と別れようとしていた。二人は別れた途端、表情が一変し、それぞれ何を考えているようであった。リカは別人になりすまし、標的である昭に迫ろうとしていた。また、昭もリカのことに興味を持ったようで、それは彼女にとって好都合であった。

「.....ふう」

リカは住居に着き、荷物を置いた後、リビングのソファに飛び乗った。彼女は、行儀の悪い姿で一息つこうとしていた。そんな彼女の目の前には美しい夜景が広がり、妖しい光に包まれた歌劇団歌劇団を見ることが出来た。

「.....」

その時、リカしか居ないはずの部屋に妙な視線が感じ取られ、そっと何者かが彼女の姿を覗き見しているようであった。疲れ果てたりカはその視線に全く気付かず、特に何も起きず、夜は更けていくのであった。

それから数日経ち、歌劇団小劇場ではリカが主演を務める公演の準備が着々と進められ、運命の公演日が近づいていた。無我夢中で稽古していた若手劇団員たちは、久々に休息して自由に動ける時間を満喫していた。

リカは、気晴らしに早朝から近所を散歩していた。彼女の現在の住居は所属している大劇場から近いが、近辺のことについて何も知らず、新鮮な気持ちとなった。

「...ポン」

その時、リカの背後から肩を叩く者が現れ、彼女は咄嗟にびくついていた。

「...すみません、驚かせるつもりはなかったんですが...」

リカは、落ち着いたある背後の男性の声に聞き覚えがあり、安心して即座に振り向いた。

「...あ、平松さんでしたか...びっくりした」

「...今日はお仕事休みなんですか？」

「ええ、なかなか土日に関が取れないもので...平日が多くて.....平松さんの方は？」

「...休みってわけではないんですが、デザインの仕事は家でも出来るので、結構自由が利くんですよ...これから行きつけの喫茶に行こうかと思ひまして...」

「そうなんですか、どうしようかな~この辺詳しくなくて...何処か落ち着く場所がないかと適当

に歩いているんです...」

「よかったらこの辺を案内しますよ、今から行く喫茶のコーヒーは格別で...一緒に行きませんか？」

「...すみません、助かります、ではお願いします」

リカは昭の誘いを受けて、街を探索することとなった。

「.....」

その時、リカたちに怪しげな気配が忍び寄り、何かを探っているようであった。二人はそれに一切気づかず、繁華街の方へと足を踏み入れた。リカは昭の行きつけの喫茶店に連れられ、そこで落ち着こうとした。昭は当店自慢のモーニングセットを、リカはコーヒーだけを注文して、雑談しようとした。

「新居での生活には慣れましたか？」

「...ええまあ、仕事場まで歩いていけるから快適です、マンションのセキュリティーが万全なので安心ですし...でもこの通り、周りがどうなっているか分からなくて行き慣れてないので困っていたところですよ...」

「...気軽に何でも言って下さいね、この辺は庭みたいなものですから」

「ありがとうございます、この喫茶店も気に入りました、私も通っていいですか？」

「勿論いいですよ～この店は常連客多いし、口コミで広がってテレビでも取り上げられていますから...ねえ、マスター？」

「ええ、お陰様で大繁盛ですよ、お待たせ居ました、モーニングセットです」

喫茶店のマスターは愛想よく、リカたちが注文したものを運んだ。テーブルには、焦げ目があるカリカリの分厚いトーストとゆで卵、サラダのセットと挽き立てコーヒーが並べられ、それから作り手の温かさと懐かしさを感じるのであった。

「...すみません、朝食まだだったので...頂きます...」

「はい、私もコーヒー頂きます～」

リカたちは店自慢のコーヒーを味わいながら有意義な時間を過ごしていた。

「...カラン、カラン～」

しばらくすると、新たな客が訪れて常連ではないようであった。その客は、細身の青年で眼鏡を掛けて顔の半分を覆うほどのマスクをしており、姿勢が悪く猫背の状態であった。

「...コーヒーを...ごほごほ」

謎の客は、俯きながら籠った声で注文した。咳込んでいるが、それはどうもわざとらしかった。注文を受けたウエイトレスは、首を傾げてひとまず去っていった。

「.....」

謎の客は、店内に置かれた新聞を読む振りをして、何故かりカたちを気にしていた。

「カラン、カラン」

また店に客が訪れ、続々と入店して、店内の席はあっという間に満席となった。

「おっしやる通り、すごい人気ですね～」

「でしょ、朝から行列になるくらいですから...」

しばらくしてから、リカたちは会計を済ませて店を出ようとした。

「...本当にコーヒー美味しかったです、ご馳走様～」

「それはよかった、こっちも気分がいいですよ、一人の食事は味気なくて...客が少ない時はマスターが話し相手になってくれますが...」

「...時間が合えばまた誘って下さい、常連になりますので...」

「ありがとう.....街の案内はまた後日でも構いませんか?...仕事の方でトラブルがあったようなので戻らないといけません...」

「そうですか、全然構いませんよ、ではまた改めてということで...」

「...申し訳ない、それではこういうのはどうでしょう？今度、一緒に食事でもどうですか？この街にある美味しいイタリアンの店を知っているのです...」

「いいですよ、気軽に誘って下さい」

「...では後日連絡するので...番号を覚えておきます...」

「...分かりました、こっちも一応、携帯の番号を覚えておきます...」

リカたちは食事の約束をして、ひとまずその場で別れた。

「.....」

謎の客はリカたちを追跡せず、煙のように何処かへと消えた。これは何かの事態を予期する始まりであった。

昭は自らオーナーを務めるマンションへと戻ったが、何故か自宅フロアに戻ろうとせず、別のフロアでエレベーターを停めて降りていった。

「♪～」

昭が一室のインターホンを押すと、中から強面の男が現れて奥へと案内した。そこは住居ではなく、会社のような内装であった。

「...お待たせして申し訳ありません」

昭はある人物に呼ばれたため、リカと別れたようであった。大部屋には、スーツを着た強面の男たちが立ち並んでおり、彼らは何処かの企業の人間のようなようだが、堅気でないのは間違いなかった。また、向かい合ってマンションの管理会社の人間が座っていて、物々しい空気に包まれていた。

「お～すまん～急に呼び出しもうて...」

高級ソファに座っている代表と思われる男が、昭に関西弁で愛想よく話し掛けた。

「いえいえ、それでどういったご用件なんでしょうか？」

「...管理会社の者に少し話したんだが、例の件のことが気になってな...最近落ち着かんのだよ...」

代表の男は昭に手招きして、本題に入ろうとした。

「...例の件...あの...陣川のことですか？」

「ああ、そうや...警察がマンション内をうろついていた時は焦ったわ...どうにか誤魔化せたけどな...今回はやばいんとちゃうか？」

「心配は無用です、以前と同じで解決することは出来ませんよ...手筈は整っており、余計なことを言わず自然にしていれば大丈夫です...」

「...そうか、あんたを信用してないわけやないけど、一応確認や...忙しい時に悪かったな...」

「...いえ、全てお任せ下さい、もう少しすれば手を引くでしょう...保障します」

「プレッシャーを与えて悪いけど、よろしく頼むで...ここは実に快適な場所や、前の汚い事務所とはえらい違いや...ここにして正解やったわ」

「ありがとうございます、今後ともよろしくお願いいたします」

「こちらこそ、もう帰ってええで...おい、オーナー様のお帰りや、道を開けんかい」

代表の男はドスの利いた声で部下たちに命令して、昭たちは何度もお辞儀をしながら部屋を出ようとした。

「.....現在の状況は？」

昭は、エレベーターホールに向かいながら管理会社の者に質問した。

「.....数は減りましたが、まだこそこそと聞き込みをしている刑事が居るようです」

「今回はしぶといな、何か嗅ぎつけたとは思えないし...あまりしつこければ追い返せ、評判が悪

くなる一方だ...親父の耳に入るとまずい...」

「了解しました」

昭は管理会社の者に的確に指示して、エレベーターに乗り込んだ。彼は自分の住居フロアに戻り、一息つこうとしていた。

昭はいつものようにコーヒーを淹れて、仕事場の部屋に向かおうとした。

「.....！」

椅子に座ってデザインの仕事に取り掛かると思いきや、どうも昭の様子はおかしく、何か別のことを始めようとしていた。

「...カタカタカタ」

昭は、無造作に専用のパソコンを操作した。すると、部屋に異変が起こり、壁一面にある本棚が自動的に動き、分断されて中央に隠し扉が現れた。

「ガチャ」

昭はすぐさま現れた扉を開けて、謎の部屋に入室した。室内を見ると、驚くべき光景が広がっていた。モニターが張り巡らされ、様々な機器が置かれていた。モニター画面を見ると、マンションのエントランスやロビー、駐車場、エレベーター、ごみ捨て場等が映っていて、特に注目すべきことは一般市民の住居内が映っていることであった。そこは警備員専用の部屋のような環境で、昭のにとっては秘密要塞であった。

「...カタカタカタ」

昭は、記録されたある映像を閲覧して、不敵な笑みを浮かべるのであった。彼は普段、何処にでも居る成人男性であったが、二面性があり異常な人物であることを知る者は少なかった。

ある一つの真相が闇に葬り去れようとするが、それを許せない者が何人か居て、対面する時はそう遠くなかった。

それから時は流れて、ついにリカが主演を務める舞台作品が上演される日が訪れた。彼女だけではなく、若手劇団員、若手の演出家、関係者の力が試される時がやって来たのであった。

公演日当日、リカはいつもより早く家を出た。

「お早うございます、行ってらっしゃいませ」

リカは、コンシェルジュと挨拶を交わして大劇場に向かおうとするが、エントランスに人影があり、彼女は驚愕することとなった。

「...お早うございます、随分出るの早いですね」

リカの前に現れたのは、昭であった。

「...ええ、今日は公演日なので色々と準備があるので...平松さんこそどうしたんですか？」

「...ちょっとした見回りですよ、一応オーナーなので...最近物騒ですし...たまに掃除だってするんですよ」

「...精が出ますね、私も頑張らないと...すみません、急いでいるので失礼します！」

「...ああ、すみません、行ってらっしゃい」

リカは、忙しく昭の前から去って行った。

「.....」

昭は、リカを自分の視界から消えるまでずっと見ていた。その時の様子は普通ではなかった。

小劇場作品開演前、リカを含め、出演する劇団員たちは円陣を組んで、公演の成功を祈った。公演期間は一週間もなく、東京や地方で公演される予定はなく、本拠地の兵庫県限定であった。また、出演者の人数は大劇場公演時の三分の一以下で、劇団員にとって貴重な体験になることは間違いなかった。

公演初日は劇団員の祈りが通じて、トラブルは起こらず、無事に幕を閉じることが出来た。観客は満足したようで、リカたちは温かい拍手を浴びて絶賛された。劇団員たちは大量の汗を掻いて、ひとまず安堵の表情を浮かべた。

公演終了後、若手劇団員はメイクを落とし、軽くシャワーを浴びて帰り支度をしていた。

「...リカ、今夜お邪魔させてもらおうわよ」

「はいはい、一応準備出来ているけど、帰る途中、食べ物や飲み物とか買って行こうか、いいスーパー知っているから」

「いいわね、盛大にやりましょう」

リカは、同期の劇団仲間と何やら打ち合わせをしていて、楽しそうな雰囲気であった。どうやらリカは劇団仲間を家に招き、公演の座談会を兼ねて、パーティーを開こうとしているようであった。

「...リカさん、お疲れ様です～」

リカは、大劇場事務所側ロビーで後輩と待ち合わせしていた。パーティー出席メンバーは揃っていき、彼女たちは大劇場周辺を後にした。

「...彼女は来るの？」

リカは、パーティー出席予定者のことを気にしていた。

「ええ、さっきメールがあって、一時間後には着くって...」

「そう、ぱっぱと買い物を済ませて準備しましょうか」

こうして、リカたちは公演の疲れを忘れて、パーティーを開こうとしていた。

「...それにしてもこのマンション、迫力あるね～稽古場からよく目にするけど...まるでホテルじゃん～」

リカが住むマンションに圧倒されて感想を述べているのは、彼女の同期であるソラであった。

「...私もこういう所に住みたいと思っていますよ～大劇場から近いし～」

もう一人、羨ましそうにマンション内を歩くのは、リカの二年後輩にあたるシエルであった。

「...賃貸だし、意外に家賃が安いから、ここに決めたんだけど...」

「へえ、それならいいわね、ここに移ろうかな～」

「...そうしてもらおうと嬉しい、ここ静かで親しい人居ないから...さあ入って、入って」

リカは劇団仲間を招き入れて、パーティーの準備に取り掛かった。テーブルの上には近くのスーパーで購入した食材（主に酒のつまみ）が並べられ、リカはこの日のための手料理とシャンパンを出した。

「...さて、ぼちぼち始めましょうか～今日はお疲れ様でした～」

リカの一声でパーティーが始まり、シャンパンが開けられ、出席者は乾杯をした。

「...やっぱり初日は緊張するね～人数少ないし、先輩たちも居ないから心細くて...」

「そうだね～台詞が飛んだりしないか心配で心配で...」

「...まさかりカさんのお兄さん役をすることは思いませんでしたよ...」

「...別に違和感なかったよ、徹夜して稽古した甲斐があったね、大学野球の選手を演じることから一緒にプロ野球観戦したり、バッティングセンターに行ったね～」

「楽しかったけど、芝居に活かせませんでしたね～」

「いいな～私なんか今回の公演は戦争がテーマだから関連の資料を読み漁ったのに～」

「ソラはやっぱり真面目だね、私の上官役、似合ってたよ、圧倒されちゃった～」

「いやいや、演技派のリカさんには敵いませんよ～」

リカたちは、食事をしながら稽古時やプライベートで起きたことを話して和やかなムードに包まれていった。

「...そういえば昨日の夜、変な夢見たな～台詞とか全然覚えてない状態で舞台に立っていて...」

「何それ？地獄絵図じゃん！」

「そうでしょう！怖くなって飛び起きたよ、もう体中汗びっしょりで.....」

「♪...！！」

その時、オートロックの呼び出し音になり、リカは訪問者の顔を浮かべて受話器を取った。

「やっぱり思った通り～」

リカの住居を訪ねて来たのは、パーティー参加者で、彼女とは同期であるハナであった。

「もう盛り上がっているようね、私も参加させてもらおうわよ」

「どうぞ、どうぞ、本当に会うの久し振りね～」

ソラはハナを手招きして、彼女が座るスペースを作った。

「...この娘、会うの初めてでしょう？...紹介するわ、私たちの二年後輩のシエルよ」

「...よろしくね～シエルちゃん～」

「...どうもよろしくお願ひします！」

リカは、ハナにシエルを紹介してから、グラスにシャンパンを注いでいった。

「...入団した途端、皆、ばらばらになっちゃったからね...あなたたちはいいわね、同期と一緒に仕事が出来て...」

「あなたの班にも同期は居るでしょう？」

「...居るけど、最近は上級生との絡みが多いわ、ダンスシーンはほとんど出ているような気がする...」

「ハナはダンスが得意だからな～注目されているってことじゃないの？」

リカはハナの実力を見抜き、自然と意見を述べた。

「その言葉、ありがたく頂戴するけど、あなたこそ、最近色々と忙しいんじゃないの？あなたたちの公演観に行けなくて残念だわ、同期の頑張っている姿見ると、嫌なこと忘れて、ほっとするから...」

「そうよね、最初は皆、チョイ役とかで出番少なかったから、よく会って遊んでいたけど、最近
は出番が増えてプライベートでは会えなくなったわね...」

リカは、仲間たちと今置かれている立場について、しみじみと語り合った。

「...それにしても、最近はこちらと学年に近い劇団員の活躍が目立つわね...」

「そうね～」

ハナは、歌劇団の現状を語りだそうとした。

「ダンスシーンでよく一緒になるのは一年先輩のチエさんでね...入団当時から注目されているわ、
何ととってもダンスが若手とは思えない程、迫力があって、貫禄があるわ...今、リカたちが小
劇場公演しているけど、その前はチエさん率いる班だったのよ...私は別の班で遠征していて参加
してないけど...」

「...チエさんなら知っているわ、私、入団したばかりの時に会って話をしたことがある...本当に
面白くていい人だったと思うけど...」

リカは、チエと会った時の印象を簡潔に述べた。

「そうでしょう、本当に気さくで面白い人なのよ、後輩の面倒見もいいし、うちの班のムードメ
ーカーというか...現在、若手の中で一番トップの座に近いのは、彼女だと思うわ...」

「そうね」

リカたちはハナの意見に納得して、揃って頷いていた。

「...後輩だって、注目された劇団員が結構いるみたいで、ミュって娘なんだけど、若手ながら卓
越した演技と現代的な容姿が売りみたいよ」

「...その娘、知っているわ、彼女が属する班は、芝居に厳しいから主力になるでしょうね...」

ソラは、ミュのことを知っているようで簡潔に述べた。

「私も知ってるわ、今している小劇場公演のトップバッターを務めたのが彼女よ」

リカはそう言って、A4サイズの小劇場のチラシを出した。チラシにはリカを含め、五班の主演の姿が写っており、話題になったチエとミユも写っていた。

「...ついこの前まで、一言くらいしか喋らないチョイ役をしていたのに最近は重要な役をする機会が増えたわね...本当に時間が経つのが早いわ...」

「あと、数年で十年目よ...信じられないわ」

「...♪」

「...!？」

リカたちが歌劇団について語っている中、突然インターホンが鳴りだした。

「.....誰?こんな時間に...もうパーティーの参加者は揃っているはずだけど...」

リカたちは突然のことに表情が険しくなって、口を一切開かなかった。リカは、恐る恐るインターホン専用の受話器を取ろうとした。

「...はい、どちら様ですか？」

「.....今晚は～夜遅くすみません...」

リカの住居に訪ねて来たのは、昭であった。彼女は、パーティー参加者に心配ないことを伝え、玄関へと急いだ。

「...あっどうも、どうしたんですか？」

「あの...これ...よかったら...この白ワインをどうぞ...お口に合うと思います...」

「え...ありがとうございます、高そうですけど...いいんですか？」

「はい、貰ってやって下さい、いくらでもあるので...随分と賑やかですね～ご友人を招いているんですか？」

「.....ええ、仕事仲間です、久々に集まって盛り上がりましょうかと...」

「そうですか、是非皆さんでそれを飲んでみて下さい...それでは...」

昭は、用意したワインをリカに渡して、静かにその場を後にした。

「...この住人の人？」

ハナがりカに歩み寄り、昭について訊ねようとした。

「うん、このオーナーをされていてね、すぐ仲良くなったの...このワインを頂いたわ」

「へえ、丁度よかった、早速飲みましょうよ～」

「そうね、折角だから頂きましょう」

リカたちは昭から貰ったワインを開けて、パーティーの後半戦に突入しようとした。彼女は真面目な話から他愛のない話をして、大いに盛り上がっていた。

こうして、リカは楽しい時間を過ごしていたが、密かに脅威が迫っていき、巻き込まれる時が近づいていた。

支配者の盲点

リカが主演を務める小劇場公演は後半戦となり、その前日は休演日であった。

彼女は体力を充電しようと、余計な体力を使わないようにしていた。ただ、一日中だらだらと過ごすのも不健康だということで、太陽の光を浴びようと近所を散歩をしたり、家事を徹底的にこなそうとしていた。

「よいしょ～」

リカは早朝、ラフな格好でゴミを捨てに行こうとした。

「.....お早うございます」

リカがゴミを分別していると、彼女の背後から男性の声がした。声の主は、ゴミ袋を持った昭であった。

「あっどうも～お早うございます」

「...今日はお仕事お休みですか？」

「はい、休演日なので...」

「そうですか、丁度良かった、お伝えしたいことがあったので...急なんですけど...今夜、空いていますか？」

「...ええ、まあ...特に予定はないですが」

「よかった～先日、一緒に食事をする約束をしたと思うのでどうかなと思ひまして...行きつけの店に案内しますので...」

「確かイタリア料理のお店ですよ？楽しみにしています」

「それでは今夜、十九時に予約してありますので...迎え行くので待っていて下さい」

「分かりました、それではまた今夜に...」

リカは昭に一礼して、ごみ捨て場を後にした。

「.....」

その時、昭から明るい表情が消えて、リカの後ろ姿をじっと見ていた。彼はどうも良からぬことを考えているようで、婦君さを漂わせていた。

「.....」

ごみ置き場があるフロアには、リカたちの他に何者かが潜んでいた。その人物は以前、リカたちが来店した喫茶店に居た謎の青年であった。彼はずっと監視して、何かを探っているようであった。

リカはごみを捨ててに行った後、気晴らしに朝の散歩をしようとした。マンションを出ると、彼女の表情は一変した。

「.....今夜、誘われたわ...この暮らしも悪くないけど...そろそろ終わりにしないとね...そっちは万全でしょう？」

「...ええ、捜査していくうちに色々分かったわ...彼の化けの皮が剥がせそう...このことが世間に公表されれば大ダメージを受けて堂々と立ってられなくなるでしょうね...」

リカは耳に無線機のイヤホンをつけていて、会話している相手は、相棒であるツバキであった。彼女は、リカと別行動を取って潜入捜査を行っていた。二人は潜入したマンションで起きた不審死事件についての十分な情報を集めて仕上げに入ろうとしていた。

「じゃあ、今夜仕掛けるということで...」

「本当に任せて大丈夫？あんな、誘惑とか出来るの？」

「...出来るに決まっているじゃない！私だって女なんだから...それくらい芝居でカバー出来るわ...なんだったらそっちがスカート履いてデートすればよかった？」

「.....私が悪かったわ...あんに任せて正解...」

ツバキはリカの反撃に対し、言い返すことが出来ず、今回、自分が囹役でないことに胸を撫で下ろした。

「...にしても、これが仕事じゃなかったらよかったのにな～久々に劇団仲間と集まって楽しかったな～あんたも来ればよかったのに...」

「私が行くわけないでしょうが...パーティーみたいなのが苦手だね...それに私、先輩なわけだし、何かと気遣うでしょう？」

「そうかな～参加しても問題ないと思うんだけどな...そういえばハナがあんたのことを喋ってたよ～」

「え...ハナが？」

ツバキはリカから意外なことを耳にして、同じ班に所属するハナが話した内容を聞こうとした。

「...ハナ以外にもあんたを慕っている劇団員が居るわ...もう少し心を開いてみたら？」

「冷たく接しているつもりはないんだけど...口下手だから...ムードメーカーのチエが居るし...私以外に有望な劇団員は居るでしょうに...」

「...素直に喜んだら？もう食事の誘いを断らないようにね...」

「考えとくわ...まずそっちの食事を済ませないといけないから、それからよ.....で彼女、私たちの関係を知らないのね？」

「ええ、ハナも秘密警察のことを知っているけど、現場担当じゃないから知らないわ...教える必要ないし...上手く誤魔化しといたわ...」

「...私たちがコンビを組んでいると分かったら驚くでしょうね.....それじゃあ今夜、よろしく頼むわ...」

リカとツバキはある打ち合わせをして、今夜に備えようとした。

「.....！」

昭は、秘密の部屋に閉じこもっていて、独自の監視システムで、リカを含めた住人の部屋を覗き見していたが、その途中で眠気の襲われてそのまま眠ってしまっていた。彼は数時間後に目が

覚め、一旦秘密の部屋を退室して、クローゼットに向かい、スーツジャケットを一着手に取り、かすかに笑みを浮かべていた。それは今夜、リカと会う時のために用意されたスーツジャケットのようであった。

そして、ついに運命の夜が訪れた。リカは、普段着ることのない黒のノースリーブワンピースを着用して、昭が来るのを待っていた。

「...どうも今晚は～準備の方は大丈夫ですか？」

「はい...服装なのですが、これで大丈夫ですか？あまり晩餐会専用の服を持っていなくて...リクルートスーツもおかしいですし...」

「それで充分ですよ、よく似合っています」

「...そうですか、ありがとうございます！」

リカと昭は準部が整い、予約したイタリアンレストランへと向かった。

「...いらっしやいませ、お待ちしております、奥へどうぞ...」

リカと昭は、ウェイターに特等席へと案内されて晩餐を楽しもうとした。

「時間を気にせず、好きなだけ召し上がって下さい、勿論、代金のことも...奢りますので...」

「本当にすみません...頂きます！」

リカは遠慮せず、次々に運ばれる料理を口に含んでいった。昭はそんな彼女の姿を嬉しそうに眺めていた。

「.....最近調子はどうですか？よく早朝に出掛ける姿を見かけますが...お忙しそうですね？」

「.....ええまあ、でも短期間の公演なのであと少しで落ち着きます...」

「そうですか、かなりハードみたいですね...表情を見れば分かる.....」

昭は、いつも通り軽快な話術でリカを楽しませると思いきや、どうも様子がおかしく、急に押し黙る素振りを見せた。

「...あの...どうされました？」

「.....実は先日、歌劇団大劇場に行って来たんですよ、近所に住んでいながら一度も行ったことなかったものですから...あなたと会ってから興味を持ちましてね...」

「！.....へえ」

大劇場のことが話題になると、リカの表情が若干強張り、昭の話を黙って聞こうとしていた。

「...劇場内を散策しまして、観劇しようと思いましたが、チケットは完売していたのでとても残念でした...」

「...当日に観るのは難しいですよ、早い者勝ちでいい席はすぐに埋まって行きますから...」

リカは冷静さを装い、昭に言葉を返した。

「...そうでしたか、勝手に分からなくて...観劇を諦めて劇場内の店を回って、最後に喫茶店でコーヒーを飲んで帰りました...結構楽しめましたよ」

「...そうですか」

「...帰る途中にあることに気づきました、入ってすぐの所にもう一つ劇場がありますよね？大劇場に比べれば規模が小さいですが...どうやら若手の劇団の登竜門として利用されているようですね.....」

その時、リカは昭の発言に対して応答しなかった。彼女の顔色は悪くなっていき、無言のままであった。昭はリカの反応を見て、一気に核に迫ろうとした。

「.....リカさん、あなたと出会って数週間経って打ち解けてきましたが...僕に何か隠していることないですか？」

「.....え？」

昭は険しい表情を浮かべ、声のトーンを下げて、リカに疑問を投げ掛けた。彼女は突然の彼の質問で体が凍りついていた。

「とぼけても駄目ですよ、分かってしまいました、あなたの正体が...」

「.....私の正体？」

当初、和やかなムードに包まれたディナーであったが、昭の一言で一転して、場の空気は張りつめていた。

「あなたは一つ嘘をついている.....確かに大劇場で働いているようですが、実際は舞台衣装を扱う仕事などしていない...そうでしょう？」

「.....面白いですね...結論をどうぞ」

リカが結論を求めると、昭は不敵な笑みを浮かべた。

「小劇場の出入り口付近に公演中の作品のポスターが貼ってありました...じっとそれを見るとあなたが写っていた...どう説明します？」

「.....それは.....」

「...それからファンの人やネットから情報を集めました...あなたは裏方の人間じゃない...表舞台の人間だ...歌劇団の若手劇団員...現在、小劇場の主演を務めている注目株...あと、とっておきなのがこの写真です...」

昭はそう言って、リカに携帯のカメラで撮ったある写真を見せた。

「...これは！」

昭が撮った写真には、楽屋口から出てきたリカの姿が写っていた。彼女は反論する言葉が見つからず、観念するしかなかった。

「どうです？」

「凄い...出待ちまでされたんですね...」

「何故、嘘をついたんですか？」

「それは...色々面倒なんです、中にはしつこく付き纏ってくるファンの人も居るので...近所迷

惑にもなるし...だから付き人や一部の関係者しか教えていないんです...出来ればプライベートの時はそっとしておいて欲しいんです...」

「...成程、しかし心配は無用ですよ...絶対に口外はしません、二人だけの秘密ってことで...」

「ありがとうございます、助かります」

リカは素直に話したことで気分が晴れて、楽しく食事を続けた。

「.....」

しかし、昭はリカの言ったことに納得した振りをして、裏で何を企んでいるようであった。夜は長く、悪夢を見るのはこれからであった。

それから二時間経ち、リカと昭はデザートを口にした後、店を出ようとしていた。

「ご馳走様でした~どの料理も美味しかったです~もうお腹はぱんぱんです」

「それは良かった、誘った甲斐がありましたよ.....あの、もし良かったらこれからうちに来ませんか？美味しいお酒がたくさんあるので、夜景を肴にして一緒に飲みませんか？」

「いいですね、先日頂いたシャンパン、とても美味しかったです、友人たちも喜んでいました」

「大手貿易会社に知り合いが居まして...よく譲ってもらったんです」

「羨ましい~最近飲めるようになったんで...どんなお酒が飲めるか楽しみです」

「...それじゃあ行きましょうか.....あれ？水滴が...一雨来そうですね...急ぎましょうか...」

夜空を見ると分厚い雲に覆われおり、ごろごろと音を立て、やがて豪雨が降り注いだ。リカと昭は大粒の水滴を浴びて自分たちが住む塔に帰還した。

「...えらい目に遭いましたね、これだから最近の気象情報は当てにならない...」

「やっぱり今日はこれで解散しましょうか？こんな格好でお邪魔するのはご迷惑なので...」

「全然構いませんよ、お気になさらず...ただ、美しい夜景はお預けになるかもしれません...」

昭は、快くずぶ濡れのリカを招き入れて、

リカにタオルを渡して、リビングルームまで誘導した。

「うわ、何かうちのリビングより全然広い...最上階は構造が違うんですね」

「ええまあ、大体どの部屋も二倍近くの広さでしょうか...あまり物を置くことが嫌いなので殺風景ですが...」

「そんなことはないです、素敵です、私もあまり物を置くの好きじゃないので...」

「...どうぞ掛けて下さい、とっておきのお酒を用意しますので...」

昭はキッチンルームに設置してあるワインクーラーからワインボトルを一本取り出して、リカにご馳走しようとした。

「白ワインですか？」

「ええ、美味しいですよ、それでは乾杯しましょうか...」

「...チン」

リカと昭はワインを一気に飲み干して、心地いい表情を浮かべた。

「美味しい～癖になりそうです」

「そうですね、さあ、飲んで下さい」

昭は、構わずリカのグラスにワインを注いだ。

「...あの、私、明日から仕事なのでこのくらいにしときます...」

「まあいいじゃないですか、夜はまだ長いんですから.....出来ればずっとこうしていたいぐらいですよ...」

「え？」

リカは、昭の発言に疑問を感じていた。

「...あなたは本当に美しい...初めて会った時、体が疼きました...一目惚れってやつでしょうか...最近、あなたのことが頭から離れない...リカさんは今、恋人とか居るんですか？」

「...居ませんけど」

「...歌劇団って恋愛禁止なんですか？」

「.....いいえ、特に決まりはないですが...」

「そうですか.....あの...突然ですけど、僕と付き合ってもらえませんか？」

「...え？そんな.....困ります...！」

「お願いします、騒ぎにならないようにしますから...結婚まで考えています！」

「あの...歌劇団に在籍している間、結婚は認められません、退団した後じゃないと...」

「それなら退団するまで待ちます、結婚を前提に交際を考えています！」

「...勝手なこと言わないで下さい！お付き合いは出来ません...帰らせてもらいます.....！」

昭は、帰ろうとするリカの前に立ちはだかった。

「...そう簡単に帰すわけにはいかないな、用は済んでいない...！」

「...平松さん！きゃ...！」

昭はじっとリカを睨み付けて、ソファの方へと彼女を押し倒した。

「逃がさないよ.....き...君は...僕の...モノだ.....ぼ...僕のモノに.....なるんだ...歌劇団も...辞めてしまえ...はは...！！」

昭は、豹変して常軌を逸していた。リカは昭に無理やり抱きつかれて身動きが取れなかった。

「...止めて！平松さん！！」

「大声を出しても無駄だ、誰も助けに来ないよ...ゆっくり楽しもうじゃないか！」

昭は男の力を見せつけて興奮状態のままでリカを押さえつけて、強引に彼女の唇を奪おうとした。

リカは窮地に追い込まれ、昭に犯されそうになった。ここで一つの惨劇が起こると思われたが、意外な展開が待ち受けていて解決の光が見え始めた。

「♪～」

昭の住居のチャイムが突然鳴りだし、状況は一変することとなった。

「.....だ.....誰だ？こんな時間に...！！」

焦った昭は、一旦リカから離れて来訪者を確認しようとした。

「♪♪♪♪♪♪～...」

謎の来訪者は、しつこくチャイムを鳴らしていた。昭は、直接顔を合わせようとして扉を開けようとした。

「五月蠅いぞ！！何のつもりだ.....！！」

昭は扉を開けた途端、何かの衝撃で後方に吹き飛ばされた。謎の訪問者は黒ずくめでいかにも怪しかった。

「バン！」

謎の来訪者は、昭を蹴飛ばした後、強引に中に入ろうとした。

「.....痛.....おい！！待て.....」

昭は謎の訪問者の暴走を止めようとするが、全く言うことを聞こうとしなかった。

「...！」

謎の訪問者は、急ぎ足でリビングルームへと向かって、リカと顔を合わせようとした。それはまるで彼女の安否を確認しているように見えた。

「...おい！ どういうつもりだ？」

突然のことで怒りが抑えられない昭は、謎の訪問者に怒鳴り散らした。

「.....そっちこそ、ここで何をしていたの？ お楽しみのところ邪魔だったかな？」

「...！？」

昭は、ようやく謎の訪問者の顔を拝むことが出来たが、呆然と立ちすくんでいた。

「.....だ...誰だ？」

「私？ 私はこのマンションの住人だよ...」

「君のことなど知らないぞ！」

「何度か顔を合わせているはずだよ、あんたがオーナーらしいけど、ちゃんと挨拶に行かなきゃいけないの？」

「急に現れて、何だ、その口の利き方は？」

「...じゃあ軽く自己紹介しときますか...私は東棟の三十九階に住んでいる〇〇ツバキってもんだけど...」

謎の訪問者の正体は、リカの相棒であるツバキであった。彼女は偉そうに男性のような口調で昭に話した。彼はまだ状況が把握出来ず、大きく口を開いたままであった。

「.....やはり見覚えがない、無礼じゃないか、勝手に上り込んで...用件は何だ？」

ツバキは昭の質問に対し、冷静に答えようとした。

「.....そこに居るリカは、私の友人でね...彼女に卑猥なことをしてなかった？」

「何を馬鹿な？僕はただ彼女とお酒を飲んでいただけだ...！」

「...いくらでも言い訳は聞くけど...被害者本人に訊けば早い話だから...リカ、あの人に襲われていたでしょう？」

「...ええ、キスを迫られたわ...」

「...！！！」

ますます昭から穏やかな表情が消えていき、顔色が悪くなっていた。

「.....証拠はまだある、実はあんたたちの会話をずっと聴いていてね...さっきまで外で食事していたんでしょ？」

「...どうやってそのことを？」

昭が驚きの表情を浮かべると、リカは着用しているワンピースに付けられたブローチを外し出した。

「このブローチは、発信器が内蔵されていまして...音声も傍受出来ます」

「...発信器...？何故そんな物を？」

昭はリカの発言について理解出来ず、錯乱状態になっていた。そして、ツバキが事実を述べようとした。

「とりあえずリカを襲った件は置いておこう...私たちはある目的でこのマンションに引っ越してきたんだ...」

「ある目的？」

「先日起きた殺人事件のことを調べていてね...エレベーターで男性が射殺された事件...知っているよね？」

「！.....え？ああ、向かいの西塔で起こった事件のことだろ？」

昭は殺人事件のことを耳にすると、とぼけた様子を見せた。リカとツバキは、そんな彼をじわ

じわと追い詰めようとしていた。

「...犯人は未だに捕まっておらず、捜査は難航、有力な手掛かりはない.....とされているけど、それは表向きの話...実際はかなり進展があつてね...解決しそうなもの...」

「.....さっきから君たちが言っていることについて行けないんだけど...殺人事件とか犯人とか...まるで警察の人間と話しているみたいだ...」

「.....簡単に言うと、私たちはその警察みたいなものよ、極秘で捜査をしているの...狙いはあんたよ、追っている事件の捜査対象になっているわ」

「...ちょっと待ってくれ、訊きたいことがたくさんある！...リカさんもその一員なのか？歌劇団の劇団員じゃないのか？」

昭が問いただすと、リカはゆっくりと口を開いた。

「...ええ、詳しいことは言えないけど...ツバキの言う通り、極秘捜査でやって来た...騙してごめんなさい...」

「...何故、僕を疑っている？根拠は？」

昭は頭の中が整理出来ないまま、リカたちに質問を投げ掛けた。

「根拠はある...第一に不審な点は、ここのセキュリティーよ、至る場所に防犯カメラが設置されているのに、犯人の姿が一切映っていないなんて考えられない」

「.....偶然映っていなかったんだろう...防犯カメラも当てにならない時がある...」

「...そう偶然が重なるかな？都合が良すぎると思うけど...何か裏があるように思えて運営側、管理側が怪しいと踏んだのよ」

ツバキは呆れ顔で言い返して、昭は体を小刻みに震わせた状態でリカたちの話を聞いていた。

「...もし、マンションのセキュリティーが正常に機能していなかったら...カメラの映像が捏造されていたら...組織ぐるみの犯行だったら...話は変わってくる」

「推測するのは勝手だが...それで僕を含めた内部の人間を疑って、解決の糸口は見つかった

のか？」

「ああ、勿論よ...そのためにリカはあんたと接触して、私は陰であんたのことについて洗いざらい調べようとした...何度か無断でお邪魔したことあるけど、気づいていないようだね...侵入して眠らせた時もあったんだけどな...」

「...何だと？.....そう言えば急に眠気に襲われたことがあった...君の仕業だったのか...」

「私があなを誘い出している間、ツバキがあなとの住居に忍び込んでいたんです...」

「...僕はずっと利用されていたわけか...」

「...そうです、すみません」

昭は、リカたちの発言に驚愕するばかりであった。

「...強引だけど、うちのやり方なんでね...許してくれなくて結構...」

「...当然だ、捜査のためと言ってもやりすぎだぞ！」

怒りを露にした昭であったが、リカたちは怯むことなく彼を問い詰めようとした。

「怒りを買うのを承知で、あんたの住家に侵入したわけだけど...お蔭でとっておきのものを発見することが出来たわ...」

「...何だと？」

「...相棒はまだ知らないんでね、案内してもらおうか...あんたの隠れ家に...」

「.....まさか！！」

昭は、ツバキの意味深な発言で動悸が激しくなり、あるものが頭の中を過った。

「.....あれを見つけたのか？」

「ああ、見つけてしまったよ、案内しない場合、痛い目に遭うよ...」

「.....分かった」

昭は、素直にツバキの言うことに従って、ある場所へと案内しようとした。そこは仕事場として使っている一室であった。

昭が部屋に設置されたパソコンの操作をすると、本棚が分断されて隠し部屋につながる扉が現れた。

「...ここが！」

リカは、初めて隠し部屋にして、ただただ驚いていた。

「...ここは変わっていて、他のフロアと独立した構造になっていてね...部屋の大きさ、数が通常と違って、こんな隠し部屋まである...ここはリアルタイムで監視出来る設備が整っているわ」

「...よく分かったな、ここが...」

「こっちもプロなんでね...ここを見つけたことで事態は大きく変わった...」

「私は、ここへ来たの初めてだからちゃんと説明して...ここは何なの？」

リカは、ツバキに質問を投げ掛けた。

「ちゃんと説明するわ...この部屋が立て続けに起きている不可解な事件のカギを握っているのよ...」

昭は、反論せず大人しく聞いていた。

「例の事件で殺害されたのは、フリー記者やジャーナリスト...そして、警察関係者...何故彼らは殺されなければならなかったのか...それはこのマンションの秘密を知ってしまったから...ここは反社会勢力、暴力団、犯罪者を匿っていた...それもかなり大人数の...この事実を知っているのは一部の管理会社の人間とオーナーであるあんただけ...」

昭はツバキに真実を暴かれて、じわじわと汗を掻いた。

「この部屋は色々な利用方法がある...一つは一般市民と暴力団組織の接触を避けるための防止策

...しかし、そのうち闇の住人のことを嗅ぎ付けた者が現れて、一網打尽にされそうになった...それに対処すべく、あんたは恐ろしいことを目論んで、この部屋を使った...」

「.....この部屋の存在を知ったとなれば、色々といじったということだな...？」

昭は、心臓をバクバクさせながらツバキに質問した。

「ああ、過去の映像を調べていったよ、それは何とも身の毛がよだつ惨劇のシーンばかりだった...エレベーターで起きた殺人もはっきり映っていたよ」

「...でもその時間、停電して映っていなかったじゃあ...」

リカは途中、ツバキに疑問を投げ掛けた。

「...ああ、普通の防犯カメラには映っていないよ、実際、エレベーターの中には一般の住人が知らないもう一つの`眼、があったんだよ...」

「もう一つの`眼、？」

「エレベーターの壁に小型カメラが埋め込まれていたのさ...取り出せば分かると思うけど、電池が内蔵されているから停電になっても問題はない、おまけに赤外線暗視カメラだから暗闇でもちゃんと撮影されるわけよ...通常のカメラよりかなり高性能みたいよ...」

「...君の言う通りだ、エレベーターだけじゃない、非常通路などにも仕掛けられている...私が監視役となり、殺人実行犯に指示して逃がして、警察を欺いた...」

「一つ分からないことがある...何故私の侵入に気づかなかったの？セキュリティは万全のはずでしょう？カメラをチェックしなかったの？」

「.....そこまで気が回らなかった...基本、留守中はシステムの電源を切っているし...まさかここに忍び込んでくるなんて考えたことなかったから...一度も泥棒に入られたことがないのが自慢だ...」

「...何とも軽率ね...お蔭で楽だったけど...」

「.....恐れ入るよ」

昭は観念したのか、冷静に白状していった。

「...素直に話してくれて嬉しいけど、あんたにはまだ裏の顔があるわ...」

昭は、ツバキの意味深な発言でまた表情が険しくなった。

「...ここの部屋の利用方法はもう一つある...例のカメラは各フロアの住居にも仕掛けられているね...おまけに盗聴するための装置も仕掛けてある...かなり悪趣味ね...というより立派な犯罪だわ...」

「...これで分かった、先日のパーティーにあなたが訪れたわけが...ずっとこの部屋で私たちの様子を視ていたのね...」

リカの一つの疑問が解決し、昭は言い訳せず黙っていた。

「リカのことを好きになり、今夜口説こうとディナーに招待して、家に誘った...こちらとしては好都合だったけどね...こういった行為は、一度や二度じゃない...かなり慣れているようね...タイプの女性住人が現れたら徹底的に監視して我が物にしようとする...ストーカーと同じ行為だね」

「何て酷いことを...」

リカは、昭を軽蔑した目で見ていた。

「.....よくここまで辿り着いたね、君たちが初めてだよ、警察は無能な者ばかりだから拳銃の果てに命を落とすことになる...」

「...今まで自分の手を汚さず潜り抜けてきたようだけど、年貢の納め時のようだね」

「.....ふ」

リカたちは、昭を奈落の底に落とそうとしていたが、彼はまだ妙に落ち着いて笑みをこぼしていた。

「...何かおかしいの？」

「...いやいや、すまない...これだけ追い詰めたら普通パニックを起こすはずだが...何故か不安がない...そもそも君たちが警察関係者だということも疑わしい...」

「...まあそうだね、確かに私たち刑事に見えないよね～話は以上だけど、どうする？」

「逮捕するというのなら抵抗させてもらうかもしれない...それに僕には守ってくれる知り合いが多く居るんでね...君たちもただでは済まないよ...」

昭は一切反省の色を見せず、リカたちを馬鹿にする態度を示した。そこで彼女たちは最後の手段に打って出ようとしていた。

「...チャキ」

「.....！！！」

ツバキは、愛用しているリボルバー銃、S & W M 2 9 センチネルアームズカスタムコンバットを昭に向けた。彼は血の気が引いて、リカたちを恐れた。

「このままじゃあ罫が明かないんでね、私たちも忙しくてね...こればかりに構ってられない...今日で片づけたいんだよ...抵抗するというのなら容赦なく撃つよ」

「.....君たちは何をやっても許されるのか？何者か知りたい...」

「...知る必要はない、私もリカと同じ境遇で生きてるとだけ言っとくよ...好きに動けるけど、その分、リスクを背負っているんでね...もし、私たちの秘密を公表すれば、その人物は無事では済まないだろうね...試してみてもいいけど...どうする？」

昭は、ツバキに脅迫されたことで黙り込んだ。彼女はここで昭への追及を止めて銃を納めた。

「...実はここまでやっついて、私たちに逮捕する権限はないんだよ、数分後、あんたが無能呼ばわりしている警察が到着するから...下の怪しい連中も捜査対象になる...逃げ場はないよ...私たちはこれで失礼するよ...」

ツバキはそう言って、リカと共に昭の前から去ろうとしたが、まだ幕を閉じそうになかった。

「.....うわああああああ...！！」

昭は理性を失って、背中を見せたツバキに襲い掛かろうとした。彼女は対応が間に合いそうになかった。

「...ドン！！」

その時、突然銃声が室内で鳴り響き、昭は興奮が冷めて我に返り、そのまま後ずさりした。

「.....リカ」

銃を撃ったのはツバキではなく、リカであった。彼女は、怖い顔で小型携帯銃であるグロック19を構えていた。

「.....今の.....リカ...さんが撃ったのかい...?その銃は本物...！！」

「...ええ、本物です、今のは威嚇だったけど、もし、まだ暴れるようなら急所に命中させる...！」

「.....ひい！」

リカが言っていることはハツタリではなく、昭は思わず情けない声を発し、全身に力が入らないようであった。

「.....あなたと知り合って、どんな人間かよく分かったわ、表向きは誠実で好かれるタイプだけど、実際は自分の利益のために手段を選ばない支配欲の強い獣ね...この件の他にも色々やっているようだし...しばらく暗い獄中で頭を冷やした方がいいんじゃない...？」

「相棒の言う通りだ、優秀な弁護士を呼んだり、親に頼んだりしても無駄だから...あんたは裁かれる運命にある...覚悟しといた方がいいよ...」

リカとツバキは昭に警告したが、彼の耳に届いておらず、魂の抜け殻のようになり、そのまま体が固まっていた。リカたちは昭を部屋に置いていき、その場を後にした。

それから数分後、雨は止んでツバキが言った通り、昭が所有するマンションに大勢の警官や捜査員が集結した。近隣住人は突然の騒ぎで驚愕して、窓を開けたり、外の様子を確かめようとした。現場付近は大量のパトランプで赤く染まり、しばらく騒然としていた。昭を含め、マンション管理会社の人間が連行されていき、オフィスフロアに住みつく暴力団組織も気づいた時は遅く、捜査されることになった。これで主犯の昭は丸裸にされ、一連の忌まわしい事件は無事に解決しようとしていた。

それから数日後...

兵庫県警 刑事部捜査第一課

現場責任者である室山は、捜査資料に目を通しながら部下の赤谷と解決した事件のことについて話し合っていた。

「...やはりあのオーナーが一枚噛んでいたか...マークして正解だったな...」

「...はい、犯行に関わったのは彼だけではなく、関連した会社を一斉捜査して...彼の父親...平松会長も任意で取り調べを受けさせました...」

「あのマンション、かなり問題があるようだな...欠陥住宅ということか？」

「...はい、マンションの資料を調べた結果、設計、企画データは改ざんされていることが発覚しました...防犯、防災システムはちゃんと機能しておらず...設置された防犯カメラは全て不良品でした...おまけに住人のプライバシーを覗くための監視室が見つかり...住居エリアには無数のカメラや盗聴器が仕掛けてありました...追加工事は平松昭の指示で行われたとのことです...」

「父親は関与していなかったんだな？」

「ええ、全て息子がやったことだと言い張っています...」

「どちらにしろ、評判はガタ落ちだろう、不動産王の名も形無しだな」

「おっしゃる通りで、会社側は朝から休む暇なくクレーム対応に追われていて、契約数が急激に減っているようです...」

「...それで事務所を借りていた連中は？」

「暴力団組織 `焰矢会、を脱退した組員の集まりでした、表向きは金融会社ですが、実際は詐欺紛いのことをして、一般市民から金を巻き上げていました...また、オーナーには賃料の他に賄賂も渡していたようです...」

「...ところで、平松昭はマンションの秘密を守るために次々と殺害を企てたわけだが...彼はあくまで計画犯だ、実行犯は?... `焰矢会、の元組員の仕業か？」

「そうだとはいいたいところですが、奴らは手伝っただけです...主犯は別にいます...」

「！...それは誰なんだ？」

「.....」

室山は赤谷に問うが、彼はどうも言いにくそうな顔を浮かべた。

「...どうした？言えないのか？」

「.....犯人は所轄の警察官でした、署の武器庫から銃を盗んだ犯人でもあります...名は村本秀臣、警備課に所属しています」

「そんな...動機は何なんだ？まさか公安捜査員を殺したのもその警察官なのか？」

「...はい、彼の犯行です、村本は、公安捜査員が追っていた犯罪組織の人間と黒いつながりがありました...関係がばれることを恐れた村本は、平松昭と組員に協力してもらい殺害を実行したんです...」

「陣川という記者も二人で？」

「陣川はマンションの闇を探り、平松昭をゆすっていたそうです...平松昭は彼の要求に応じず、村本と組んで殺害した...その時、管理会社の間人も協力していて、村本のパソコンから闇のデータだけを削除して証拠隠滅を図ったわけです」

「...成程、彼らは秘密が明かされないよう、次々に邪魔な存在を消していったわけだな...？」

「そうです...そして、何より一番危険なのは平松昭です、彼は多くの秘密を隠していました...」

「...何だと？」

室山が啞然とする中、赤谷は昭の裏の姿を明かそうとした。

「平松昭は大学卒業後、すぐに会社を設立していますが、経営は上手くいかず、すぐに会社は倒産して多額の借金を背負うこととなります、それを見かねた父親は、息子の借金を肩代わりして例のマンションのオーナーになるよう勧めました...それが間違いだった...快適な住居空間は、彼の手でたちまち悪の巣窟に変わってしまったわけです...それと彼は再逮捕することになりそう

です...」

「どういうことだ...？」

「ここ最近、女性の不審死事件が多発しているんですが...一つの原因は過度の危険薬物摂取です...中には学生が居ました...驚くことにその事件と平松昭につながりがありました...彼の監視室に記録された映像に薬物中毒で死亡した女性が映っていて、彼女たちは彼に強姦されて薬漬けに...見るに堪えない映像でした...さらに彼はアルコール中毒症に危険薬物中毒症と診断され...精神面にも欠陥があるのも頷けます...」

「...とんでもない化け物を野放しにしていたな...だがもう終わりだ...彼の城はようやく崩れた...今までご苦労だった、お前たちの手柄だ...これからも期待しているぞ...」

「...はい、ありがとうございます、経験を活かして努めていきます.....」

「...？何か質問はあるのか？」

「.....いえ！ありません...失礼しました」

捜査資料のある写真が赤谷の目に留まっていたが、彼は室山に話そうとしなかった。赤谷は数週間に渡り、昭を尾行していたわけだが、彼と一緒に居る女性のことが少し気になっていた。その女性はリカであった。今回の一連の事件には、リカたちが関わったことは全く記録されていなかった。やがて赤谷も気にしなくなり、彼女たちのことについて詮索することはなかった。

その日、リカが主演を務める公演の千秋楽であった。戦争という重いテーマの芝居から始まり、後半はショーで四季を彩る伝統的な童謡や当時流行っていたJポップの曲が流れて観客を楽しませた。座長であるリカは共演した劇団員を紹介していき、緊張しつつも最後の舞台挨拶を述べた。その時のリカの姿は希望に満ち溢れていた。

無事に千秋楽を迎えたりカは帰ろうとせず、何故か大劇場の屋上へと向かっていた。屋上の扉を開けると、夕日の光が浴びせられて綺麗な橙色に染められた場所にツバキが立っていた。

「今日はお疲れさん、よかったよ...」

「何だ、観に来てくれたんだ...楽屋に来たらよかったのに...」

「どうせ、ここで会うんだからいいでしょう...裏の仕事のことは話せないし...進展があったんで

伝えようと思ってね...」

「...例のマンションの件ね...」

「うん、あのマンションはもう住めないわ、取り壊しが決定したようで...その後に商業施設が建つ予定になっているそうよ...その件に平松不動産は関わっていない...」

「...平松昭の方は？」

「...相変わらず往生際が悪くてね...否認し続けている...起訴を考えているようだけど、時間の無駄よ...父親は助けようとせず、彼に味方する者は一人も居ないわ...」

「そりゃそうでしょうね～」

「...今回はあんたの活躍が目立ったわ、ご自慢の迫真の演技でぱくることが出来た...キスを迫られそうになった時、殺意が芽生えていたでしょう？」

「...まあね、あなたが来るの、もう少し遅かったら頭突きを喰らわせていたかも...」

「よく我慢したわね、彼に威嚇発砲した時も非情さ、冷酷さが出ていて良かったわよ...成長したわね」

「喜んでいいんだか、悪いんだか...」

「褒め言葉だと思って受け止めてよ...これで安心して困役が任せそう...頼もしいわ、これからも宜しくね...」

リカとツバキは、お互いの握り拳を軽くぶつけ合って絆を深めていった。

「.....これで公演の方に集中出来る...リカはとっては、そっちの方がいいでしょう...？」

「...最近そうでもなくなってきた...裏稼業も色々と勉強になるわ...本業にも活かせそうだし...」

「本当に頼もしくなったけど、しばらくお別れね...お互い素晴らしい舞台人になれるよう頑張りましょう」

「そうね、これから忙しくなりそうよ」

「.....おっと、そろそろ時間だわ、食事の約束をしているから行かないと...」

「珍しいね、相手は友達？」

「...ハナに誘われたのよ、他に後輩が大勢来るみたいだけど...」

「へえ、楽しそうね、良かったじゃない」

ツバキは、かすかに笑みを浮かべながらリカの前から去って行った。リカが成長したのと同時にツバキにも変化が起き、彼女たちにとって貴重な期間となったのであった。リカたちは新たなステージに踏む込むこととなり、自らの運命を開こうとしていた。

鳳の眼 未の章

<http://p.booklog.jp/book/99331>

著者 : iwaiwa01663856

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99331>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99331>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ